

---

# ポケットモンスター 絆

ユウキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットモンスター 絆

### 【Nコード】

N0586L

### 【作者名】

ユウキ

### 【あらすじ】

悪の組織、ロケット団が滅びて五年……平和になった世界で少年少女は旅立ち、世界を揺るがす事件に巻き込まれていく……これは、少年少女が出会い、壮大な旅をする物語

## レナ編 第一話 旅立ち（前書き）

どうも皆さん！ユウキです！この度は新連載を始めました！題名、内容ともにありきたりかもしれませんが、精一杯がんばっていきま  
す！では第一話をどうぞ！

## レナ編 第一話 旅立ち

この世界には、ポケットモンスター、縮めてポケモンと呼ばれる生き物がいる。これは、ポケモンと共に冒険を繰り広げる少年少女の物語である。

ジリリリリ!!

「うゝん、なにゝゝ？うるさいなゝ」

私は寝ぼけながら、目覚まし時計を止めた。まだ眠い……寝よう……

「ちょっとレナ！？いつまで寝てるの！」

私が二度寝をしようとすると、私のお母さんが起こしに来た。あっ、私はレナ。ワカバタウンに住む女の子よ。えっ？言わなくても女の子だってわかる？まあ気にしないでよ。

「もう少し寝かせて……」

「なに言ってるの！今日から出発でしょ！？リュウタ君達が待って

るんじゃないの？」

ああー！！今日から旅に出るんだ！すっかり忘れてたよ。この世界では、十四歳になると、ポケモンと一緒に旅に出れるの！私もこの前十四歳になったから旅立てるんだ！

「そっか！忘れてた！お母さんご飯！」

「もう用意してあるわよ」

私は急いで階段を下りた。はやく行かないとまた怒られちゃう！

「ごちそうさまー！」

私は急いで食べ終わった後、昨日用意した荷物を持った。

「忘れ物はない？」

「うん！」

「そう……気を付けてね」

お母さんは、私の頭を撫でながら言った。

「お母さん……うん。じゃあ、行ってきます！」

私は元気良く家を出た。

「さて……はやく行かないと！」

私は駆け足で待ち合わせ場所に向かった。はやく行かないと完璧に遅刻だよ！

私が待ち合わせ場所のワカバ公園に着くと、全員揃っていた。うう……完璧に遅刻だ……

「遅いぜ！」

そう言ったのは幼なじみのリュウタ。

「ほえっ？揃ったの？」

そう言ったのは幼なじみの一人のキョウコ。近くにいたポツポを見ていたみたい。……まあのんびり屋さんというか、なんていうか……いつも通りね。

「……揃ったなら行くぞ」

そう言ったのはシヨウ。彼も幼なじみなの。私を含めて四人で旅立つの。

「そうね。所で何かプランはあるの？」

「まあな。まずヨシノシティに行くことになるな」

私の質問にリュウタが答えた。ヨシノシティ、ワカバタウンのすぐ近くにある町ね。何回か言ったことがあるよ。

「んで、そこからキキヨウシティ……そっからはまだノープランかな」

「……それより先に博士の所だろ……」

リュウタの説明に、シヨウが補足をした。そうそう、旅立つ前にウツギ博士のところに行かなくちゃ！

「よし！しゅっぱー……」

キヨウコが出発と言おうとした刹那、シヨウが一人で歩きだした。

「もー！しゅっぱーつ、て言おうと思ったのに」

「……勝手にやってる」

ふう……相変わらずシヨウはクールというか無愛想というか……。

「とにかくオレ達も向かうとするか！」

リュウタはそう言いながら歩きだした。

「さて……キョウコ、私達も行こう？」

「……ほえっ？ うん、行こう」

キョウコ……リュウタが説明しているのに、なんでぼんやりしてるのよ……

「えへへ」ポップの群れを見てたからリュウタ君の説明聞いてなかったよ」

「もう……とにかく歩きながら説明するから……早く二人を追いかけてよ！」

私とキョウコは、先に行ったリュウタとシヨウを追いかけた。

私達は、ワカバ公園を出て数分後、ウツギ博士の研究所についた。ウツギ博士は、このワカバタウンでポケモンについて研究している



人なのよ。

「こんにちはー！」

「博士いますか？」

キョウコ、私の順にそう言った。すると、博士の助手の人が出迎えてくれた。

「おや、レナちゃんにキョウコちゃん。リュウタとシヨウ君はもう来ているよ」

まあ、私達の先に行ったから当然よね。あっちなみにこの助手の人は、リュウタのお父さんなんだよ。

「こちらです」

リュウタのお父さんが、ウツギ博士のもとに案内してくれた。部屋に行くと、そこにはリュウタとシヨウ、ウツギ博士に、何匹かポケモンがいて、遊んでいた。

「やあレナちゃんにキョウコちゃん。よく来たね」

「こんにちはー博士ー」

「今日は旅立つ君達に、パートナーとなるポケモンを渡そうと思っ  
てね。わざわざ来てもらったんだよ」

そうだったんだ。なんで私達を呼び出したのか聞いてなかったから、少し驚いちゃった。

「そうなんですか。なら私はもう決めてますよ」

「ほえっ？もう決めてるの？」

「まあね。私はこの子にするわ」

私はそう言いながら、一匹のポケモンを抱き上げた。猿に似た姿をしたポケモン、エイパム。実は前から仲良しだったんだ。

「やっぱりレナはエイパムか」

「うん。リュウタは？」

「オレはこいつだ」

そう言いながらリュウタは私に一匹のポケモンを見せてくれた。イタチに似ていて、首に浮袋みたいなものがあるポケモン、ブイゼルだった。

「一目見た瞬間にこいつだ！って思ったんだよ。よろしくな、ブイゼル」

『ブイブイ！』

「アタシはこの子」

キョウコは、ギザギザなしっぽと、黄色と黒を基準とした体が特徴のピチューを選んだ。

「この子かわいーよー　よろしくねー」

『ピッチュー』

ピチューは笑顔で答えた。キョウコじゃないけど、確かにこの子、可愛いわね。

「シヨウは？」

「……俺はこいつだ」

シヨウの足元には、緑色の体に、鋭い牙を持つポケモン、ラクライがいた。

「へっカッコイイね」

「……………」

シヨウは、キョウコの言葉に無言で返した。もう少し愛想よく出来ないのかなあ？

「決まっただみたいだね！所で今後の予定は？」

「……俺はヨシノシティから船でシンオウに行く」

へっ？一緒に行くのかと思ってたのに……

「ほえっ！？シヨウはシンオウに行くの！？」

「……………嗚呼。前から決めていたことだ」

「……そっか　じゃあアタシも行こうと」

えっ！？キョウコもシンオウに行くの？突然どうしたのかな？

「ショウ一人だと無茶そうだし」

「……勝手にしろ……」

「キョウコがいたらもつと危ない気がするのはオレだけか？」

リュウタが心配してるのもわかるわ……私もそう思うもん……

「レナちゃんとリュウタ君はどうするんだい？」

「オレ達はジョウトを旅するぜ」

「私もよ」

「そうか。ならお願いがあるんだ」

お願い？なにかしら？

「お願い？」

「僕の知り合いにポケモンじいさんという人がいるんだ。その人の所にいつて貰ってきてもらいたいものがあるんだ」

「貰いたいもの？なんなんだ？」

「僕も聞かされてないんだ。僕が行きたいをだが、研究が忙しくて

ね……お願い出来るかな？」

なるほど、そういうことね。それぐらいお安いご用だね。

「いいですよ」

「本当かい。いやー助かるよ！じゃあお願いするよ！」

「……そろそろ行くぞ」

シヨウが研究所から出ていくと、キヨウコも後に続いた。

「さて！オレ達もいくか！」

「うん！」

私達も研究所を後にした。これからどんな旅になるのかぁ……楽しみ！

レナ編 第一話 旅立ち（後書き）

皆さんよろしくお願いします！

レナ編 第二話 初ゲット（前書き）

第二話完成！

リュウタ

「授業中じゃねえのか？」

気にしない気にしない

では第二話をどうぞ！

## レナ編 第二話 初ゲット

私達はワカバタウンを出発し、二十九番道路にやって来た。ここは狂暴なポケモンはいないし、怪しい人もいないから、安心して来れるのよ。

「ここはいつも穏やかなね」

「そうだな」

私の言葉に、リュウタが答えた。

「ところでシヨウ？」

「……なんだ」

「シヨウはなんでシンオウに行くの？ ジムを制覇するだけならジョウトでも良いんじゃない？」

私は、さっきから思っていた疑問を、シヨウに問い掛けた。

「……シンオウの方が強いやつらがいると聞いたからだ……」

シヨウは何故か少し時間を置いてから答えた。なんで時間を置いてから話したんだろ？ 気になるわね。



私達が二十九番道路に来てからしばらくすると、急にキョウコがはしゃぎ始めた。

「あつ！あそこにオタチがいる〜！かわいい〜！」

キョウコが丸い大きなしっぽが特徴のオタチをみて騒いでいた。何回か見たことあるけど、確かに可愛いわね。

「ねえ。ゲットしてきていいかな？」

キョウコは、あのオタチをゲットしてくると言い出した。キョウコったら……本当に可愛いポケモンが好きよね。

「言いよね？ショウ？」

「……勝手にしろ」

ショウは素っ気ない態度で答えた。少しは愛想良く出来ないのかなあ？

「じゃあ行ってくるね」

キョウコは満面の笑みを浮かべながら、オタチをゲットするために走り出した。上手くいくといいなあ。

「上手くいくかな？」

「どうだろうな？まあ、なるようになるっしょ！」

リュウタはそう答えた。うん……本当に大丈夫かな？

「よし！ピチュー！お願い！」

『ピッチュ！』

キョウコは、パートナーのピチューを出した。ピチューのやる気は十分みたいね！

「いくよピチュー！電気ショック！」

『ピーチュー！』

ピチューはオタチに電気ショックで攻撃したけど、オタチに気づかれてかわされてしまった。

『オタツ！』

オタチは引つくくで、ピチューに攻撃してきた。ピチューは避けられなかったみたい。頬に少し引つかき傷が出来ちゃってるよ。

「ほえっ！？大丈夫！？」

『ピッチュ！』

ピチューはキョウコの声に元気よく答えた。まだまだ元気みたいね。

「ピチュー！天使のキッス！」

『ピッチュ』

ピチューは天使のキスをオタチに放った。天使のキスは、命中すると、相手が混乱する技なのよ。どうやらオタチは混乱しちゃったみたい。

「チャ～ンス ピチュー！電気ショック！」

『ピーチュー！』

ピチューは電気ショックでオタチに攻撃した。電気ショックはオタチに命中し、かなりのダメージを与えたみたい。チャンスね！

「今だ！モンスターボール！」

キョウコはオタチにモンスターボールを投げた。ボールはオタチに当たり、オタチは吸い込まれていった。

「……………」

しばらくの沈黙が流れたあと、オタチはボールから出てきてしまった。

「ほえっ！？なんで!？」

「まだ体力があるんだ！もう少し弱らせてからボールを投げるんだ！」

少しパニックになっていたキョウコに、リュウタがアドバイスをした。いつも軽いけど、いざという時には頼りになるわね。

「わかったよー！ピチュー！もう一回電気ショックー！」

『ピッチュー！』

ピチューの電気ショックは、オタチに命中し、さすがのオタチも目を回していた。

「今度こそお願いー！モンスターボール！」

キョウコは再びモンスターボールを投げ、オタチはボールに吸い込まれていった。今度こそゲット出来るかな……？

「……………」

モンスターボールはカタカタ動いていたのが、止まり、ボールの中央部分の点滅が消えた。これって……

「やったー！オタチゲットだー！」

キョウコは跳びはねて喜んだ。ピチューも凄い喜んでいた。

「やったねキョウコ！」

「うん ありがとうー ピチューもお疲れ様ー」

『ピッチュー』

ピチューも凄い喜んでるね。ピチューも頑張ってたからね。

「な？なるようになったら？」

「……そうだな」

シヨウはそう答えたけど、シヨウの感心は、違う所に向いていた。  
どうしたのかな？

「ほえっ？シヨウ、どうしたの？」

「……あれ、怪しくないか？」

シヨウの視線の先には、黒い服を着た男の人と、銀色の服を着た、  
おかつぱ頭の男の人が、こそこそしていた。あつ怪しい……

「いってみよう……」

私達はその男の人達に近づくと、黒い服を着ている方は、誰かと通  
信機で話していた。

「……はい。あとは四十五番道路から迷いこんだヒメグマだけです  
……はい。他のこの道路の強いポケモンは乱獲しました……はい。  
了解しました」

男の人達はそんな会話をしていた。……乱獲って……良い会話をし  
ているとは思えないね。

「リュウタ。どうみる？」

「まあ、良いことしてるとは思えないな」

「……やることは一つだ……」

シヨウの言う通りね！なんとかしてヒメグマを守らなくちゃ！

「おい、ヒメグマの位置を確認した」

おかつば頭の男の人が、なにかの装置を見ながら答えた。あの装置はなんなのかな？

「もう見つけたのか？まったく、ギンガ団の技術力はたいしたものだな。ロケット団にも分けて貰いたいぜ」

ギンガ団にロケット団？確かロケット団は、五年前に解散したはずだよ？なんているのかな？ギンガ団は知らないけどね。

「リュウタ、ロケット団って……あのロケット団かな？」

「多分そうだろうな。でもなんでロケット団がいるんだ？五年前に解散したはずだよな？それにギンガ団も聞いたことないな」

「……ギンガ団はシンオウで活動していた組織だ。だが二年前にリーダーが消失したと聞いている……てっきり壊滅したと思っていたが……」

シヨウがギンガ団について説明してくれた。でもなんで壊滅した組織がいて、しかもお互い協力しているのかしら？

「よし、ヒメグマ捕獲に行くぞ」

「嗚呼」

二人はヒメグマのいるところに向かったみたい。考えても仕方ない！私達も！

「私達も追い掛けよう！」

私達は、ヒメグマを捕獲しに行った男の人達を追いかけていった。ヒメグマは絶対に守ってみせるよ！

## レナ編 第二話 初ゲット（後書き）

キヨウコ

「オタチかわいいー」

オタチ

『タツチー』

レナ

「作者さん！なんで初ゲットが主人公の私じゃなくてキヨウコなの！？」

気にしない気にしない

それに主人公は君だけじゃないよ

キヨウコ

「どゆこと？」

一応説明するね。この話はダブルヒーローシステムを使ってるんだ

レナ

「どこかで聞いたことあるわね」

うるさいな！だから主人公は二人いるんだよ

キヨウコ

「もう一人は？」



話の流れでわかるでしょ？

レナ

「ということは……」

かなりあとがき長くなってしまった……では！

レナ

「バイバイ」

レナ編 第三話 ヒメグマを救出せよ！（前書き）

第三話完成！

レナ

「早くヒメグマを助けなくちゃ！」

頑張れ（笑）

では第三話を……

レナ

「どうぞ！」

### レナ編 第三話 ヒメグマを救出せよ！

私達が怪しい二人組を追いかけて始めてから数分後、二人組は、おかっぱ頭の男の人が持っている機械とにらめっこしていた。

「あの機械ってなんなのかしら……」

「……おそらくターゲットの居場所を発見するものだ……」

確かにシヨウの言う通りかもね……さっき、あれを見ながらヒメグマを見つけたと言ってたもんね……。

「おい、この辺か？」

「みたいだ……お！見つけたぞ！」

二人組の前には、額に三日月のような模様のある、小さい熊みたいなポケモン……ヒメグマがいた。

「ターゲットを捕獲するぞ！」

「嗚呼！」

二人組がヒメグマを捕獲しだした。おかっぱ頭の人が、なにかの機械からネットみたいなものを発射し、ヒメグマを動けなくした。早くヒメグマを助けなくちゃ！

「まてっ！」

私がでようとした刹那、リュウタが、二人組を止めに入った。もう！リュウタに良いところりされちゃったよ！

「なんだお前達？」

「そのヒメグマは渡さないぜ！」

「あ？ポケモンをゲットしようとしてなにが悪い？」

黒い服を着ている男の人が言った。あくまでとぼける気ね……。

「……とぼけも無駄だ。貴様達がロケット団とギンガ団だってことはわかってる……」

「ふん、知っていたか。だがその解釈は間違っているな」

「……なに？」

私達の解釈が間違っている……？どうゆうこと？

「我々はロケット団でもあり、ギンガ団でもある」

「……まさか！？」

「さて、おしゃべりはここまでだ。仕事の邪魔をするやつは排除する！行け！デルビル！」

「ヤミカラス！」

二人組は、黒い犬みたいなポケモン、デルビルと、鳥に似たポケモ

ン、ヤミカラスを出してきた。でも、デルビルの足には、なにか機械みたいなものがついてる……それにヤミカラスには翼に、なにか機械みたいなものがついてる……なんなのかしら……？

「私がいく！エイパム！お願い！」

『ウキー！』

「オレも行くぜ！頼むぞ！ブイゼル！」

『ブーイ！』

私はエイパム、リュウタはブイゼルを出した。うん！二人ともやる気は十分ね！

「エイパム！デルビルにスピードスター！」

「ブイゼル！ヤミカラスに水鉄砲だ！」

私とリュウタは、手始めに遠距離技で様子を見た。

「ふん！デルビル！火の粉で迎撃しろ！」

「ヤミカラス！避けてからブイゼルに翼で打つ！」

かなりの至近距離からの攻撃だったのに、エイパムの攻撃は、相殺され、ブイゼルの水鉄砲はかわされてしまった。それ以前に、あのヤミカラスのスピードが尋常じゃないよ！

「エイパム！避けて！」

「ブイゼル！アクアジェットで迎撃するんだ！」

『ウキッ！』

『ブイブーイ！』

エイパムは、ギリギリ火の粉をかわすことが出来た。ブイゼルは、ヤミカラスにアクアジェットで攻撃し、ヤミカラスの翼で打つとガチンコバトルになった。

「頑張れ！ブイゼル！」

『ブイ！』

「私達も！エイパム！デルビルに引っこく！」

「かわして噛み付く！」

エイパムの引っこくは、デルビルにかわされてしまった。あのデルビルのスピードも規格外だよ！？

『ウキヤー！』

「エイパム！？そこからスピードスター！」

『ウキ！』

エイパムは至近距離からスピードスターを放った。それはデルビル

に命中した。さすがにあの距離は反撃出来ないよね。

「ちっ！デルビル！スピードで攪乱しろ！」

デルビルは、目にも留まらぬ速さで、エイパムの周りを走りはじめた。デルビルに普通あんなスピードなをよね？まさか……あの機械のせい？

「デルビル！至近距離から火の粉！」

「エイパム！影分身！」

『エイパッ！』

遠距離は、影分身で分身を作り出した。さすがのデルビルも、これには動揺しているみたい。

「ちっ！」

「今よ！乱れ引つかき！」

『ウキー！』

エイパムは、分身を囷にし、デルビルに乱れ引つかきを決めた。上手くいったわ！

「ふざけやがって！炎の牙で止めだ！」

デルビルは、エイパムに炎の牙で攻撃してきた。これはまずいよ！

「エイパム!!」

『ウ……キー!!』

エイパムはデルビルの炎の牙を受け止め、強力なパンチを放った。  
今の技は……？

「なに！？カウンターだと!？」

カウンター？確か物理技で受けたダメージを倍返しにする技だった  
よね？エイパムにそんな切り札があったんだ！

「くそっ……デルビル!」

デルビルは、黒い服の男の人の声に反応しなかった。どうやら気絶  
しているみたいね。

「エイパム!やったね!」

『ウキー』

エイパムは、私の胸に飛び込んできた。本当、エイパムに感謝ね。

「そうだ。リュウタは？」

私はリュウタの方を見ると、リュウタとブイゼルは、スピードが尋  
常じゃないヤミカラスに苦戦していた。

「ブイゼル!水鉄砲!」



「避けてから悪の波動！」

『ブーイ！！』

「ブイゼル！？」

ブイゼルに、ヤミカラスの悪の波動が直撃した。これはまずいよ！

「チェックメイトだ！翼で打つ！」

「どうすれば……！そうだ！確かブイゼルは……ブイゼル！ギリギリまで引き付けろ！」

えっ？一体リュウタはなにをするつもりなの？

「今だ！泥かけ！」

『ブー！』

『ヤミッ！？』

ブイゼルは、ヤミカラスがぶつかる寸前に、泥かけで反撃した。確かに泥かけは威力こそ小さいけど、相手の視力を封じる効果があるのよね？リュウタ、考えたわね！

『ヤミ！ヤミ！』

ヤミカラスは泥のせいで上手くブイゼルを確認出来ず、手当たり次第に攻撃していた。チャンスよ！

「今だブイゼル！アクアジェット！」

『ブーイ！』

ブイゼルは、ヤミカラスにアクアジェットを決めた。ヤミカラスは目を回していた。やった！ブイゼルの勝ちね！

「よっしゃー！やったなブイゼル！」

『ブイブイ！』

ブイゼルはガッツポーズをしていた。初めての勝利が嬉しいのかな？

「ちっ！撤退だ！」

「逃がすか……ラクライ、電磁波」

ラクライは、二人組に電磁波を使い、動きを封じた。

「くそ……」

「貴様達に聞きたいことがある……何故ロケット団とギンガ団が手を組んでいる……？」

「ふん。貴様達に言う必要はない」

「ラクライ、電気ショ……」

「わかった！ヒントだけだ！俺達は新たな組織、ラクリモーサを作

り出した！それだけだ！メリープ！フラッシュ」

おかつぱ頭の人がメリープを出し、目くらましをした。私達が目を開けると、二人組はいなかった。

「逃げられたか……」

「そうだ！ヒメグマは！？」

私は、ネットに捕われていたヒメグマを助けた。

「大丈夫？」

『ヒメー』

ヒメグマは、私に抱き着いてきた。もしかして……？

「ねえヒメグマ？私と一緒に行かない？」

『ヒメー』

ヒメグマは笑顔で、頷いた。可愛い仲間が増えたわね。

「わー 可愛いー」

キョウコが、ヒメグマを見てはしゃぎ始めた。

「よろしくね、ヒメグマ」

『ヒメー』

「さて！そろそろヨシノシティに行かないと暗くなるぜ！」

「じゃあ、行こっか！」

私達は、目的地のヨシノシティを目指して歩きだした。

レナ編 第三話 ヒメグマを救出せよ！（後書き）

レナ

「私の初めてのゲットだ！」

ヒメグマ

『ヒーメ』

次回はヨシノシティに到着です

レナ

「やっとね」

すみません……

レナ編 第四話 バイバイ（前書き）

第四話完成！

レナ

「このサブタイトルは……」

それは今回の話で

では第四話をどうぞ！

## レナ編 第四話 バイバイ

私達は、変な二人組をやっつけ、無事にヨシノシティにたどり着いた。潮風が気持ちいいわね。ここには海があるのよ。

「ほわあ〜！海だあ〜！」

早速キョウコは海の方に笑顔で海に向かって走り出した。もう……そんな子供じゃないのに……とか思いつつ私もキョウコを追って走ってたんだけどね。

「あいつらは餓鬼か……」

「ま、いいんじゃないの？それよりショウ、頼みがあるんだけどよ」

「……なんだ？」

「リュウター！ショウー！早くおいでよー！」

私はリュウタとショウを呼んだ。なんかリュウタがいつものお気楽顔じゃないような……気のせいかな？

「今行くからよ！」

リュウタはそう言いながら波打際で遊んでいる私とキョウコの所に走ってきた……のは良かったんだけど……

「お待た……ぐほっ！」

まさかの躓いて転倒……相変わらずのドジっぷりね。

「大丈夫？しっかりしてよね」

「痛って……」

「なにやってんだ……」

シヨウがかなり呆れたような顔でリュウタを見ていた。リュウタは照れ隠しか、頭をかいていた。

「それよりさっきの続きだけだよ」

「なんだ……？」

「シヨウとキヨウコはここでバイバイだからよ、シヨウとバトルがしたいんだ！いいか？」

そっか……キヨウコとシヨウはここでお別れしてシンオウに行くんだよね……寂しいな……

「……いいだろう」

「えゝ私はゝ？」

「キヨウコは私と見学ね」

「ううゝしょうがないなゝ」

キヨウコはすごいしょんぼりした感じになってしまった。



「バトルの前にポケモンセンターに行かない？あそこならバトル出来るし、ポケモンも回復しなくちゃいけないし」

私はリュウタとシヨウに提案した。二人は、そうだなと言い、納得してくれた。

「じゃあポケセンにレッツゴー！」

キョウコは、何故かポケモンセンターを略し、元気よく歩きだした。私とリュウタは、それを見て笑っていたけど、シヨウは、呆れた表情を浮かべていた。よく考えたら、こんなに正反対の二人が一緒に旅して上手くいくのかな？

「なんとかなるっしょ！」

不意にリュウタが私に話しかけてきた。なんで私の考えていることがわかったの？

「ん？なんでわかったのって顔してるな？」

リュウタはニヤニヤしながらそう言った。

「うっうん」

「まったくよく何年一緒にいると思ってんだよくそれぐらいならわかるって」

リュウタはニッコリ笑いながらそう言った。何故かその言葉と笑顔を見ると、胸の鼓動が早くなった。それに顔も熱い。えっ？もしか

して顔が赤くなってるのかな？

「二人共々早く〜！」

キョウコが私とリュウタを呼んだ。

「行こうぜ〜」

「うんっ！」

私とリュウタは、先に行ったショウとキョウコの後を追いかけていった。

「ではお預かりします」

私達は、ポケモン達の看護婦さん、ジョーイさんにモンスターボールを渡した。ジョーイさんにボールを預けると、ポケモン達の体力を回復してくれるのよ。

でも……ジョーイさんってみんな同じ姿、同じ声なのよね……そんなことが可能なかしら？

「さてと……時間も時間だし、昼飯に行こうぜ」

「わーい ご飯だ」

確かに今はお昼過ぎ。ちょうどお腹がすいてくる時間帯ね。ちなみにポケモンセンターはポケモントレーナーに泊まる場所と食事も提供してくれる。正直、そんなに奮発して大丈夫なの？って思うくらいね。

「早く行こうよ。お腹すいちゃった」

「……さっさと行くぞ」

シヨウが一人で食堂に行ってしまった。さっさも思ったけど……本当にキョウコと二人旅なんて大丈夫かなあ？

「ほわぁー おいしー」

私達は食堂で、お昼ご飯を食べていた。私とキョウコはスパゲッティ、リュウタはカレーライス、シヨウはラーメンを食べていた。

「でもなんでリュウタはシヨウとバトルしたいの？」

そう、私にはリュウタがシヨウとバトルをしたい理由がわからなかった。

「前からライバルとしてシヨウとバトルしたかったんだよね！」

リュウタとシヨウは仲が良いけど、どこかライバル視しているのよね。

「ライバルか……フン」

シヨウはリュウタの言葉を聞き、シヨウは静かに微笑んだ。まんざらでもないみたいね。

「そろそろ終わったかな？行こうぜ！」

私達は、ジョーイさんに預けたボールを受け取り、バトルフィールドへと向かった。

「じゃあ一対一のバトルでいいな！」

「嗚呼」

いやリュウタ……そもそも二人共一匹しか持ってないわよね？

「いくぜ！ブイゼル！」

『ブーイ！』

「いけ、ラクライ」

『ガウツ！』

リュウタはブイゼル、シヨウはラクライ……相性ならラクライが有利ね……リュウタはどう攻めていくのかしら……？

「リュウター！シヨウー！がんばれー！」

キョウコが、大声で二人の応援をしていた。勝っても負けても悔いのないバトルにしてほしいなあ。

「ブイゼル！水鉄砲！」

「かわせ！」

ラクライは、ブイゼルの水鉄砲を難無くかわした。なかなかのスピードね。

「スパークだ」

『ガーウ！』

ラクライは、全身から雷を放出し、そのままブイゼルに体当たりしてきた。

「かわしてアクアジェット！」

『ブーイ！』

ブイゼルはラクライのスパークを、右にジャンプしてかわし、そのままアクアジェットで攻撃し、ラクライに直撃した。リュウタ、なかなかやるわね！

「ちっ！ラクライ、噛み付くだ！」

『ガウ！』

『ブイツ！？』

ラクライは、ブイゼルの右腕に噛み付いた。ブイゼルは痛みのせいか、少し顔を歪めていた。

「ブイゼル！水鉄砲！」

『ブーイ！』

『ガウツ！？』

ブイゼルの水鉄砲は、ラクライの顔面に直撃し、ラクライは吹き飛ばされてしまった。でもなんとか踏み止まったみたい。

「決めるぞ！アクアジェット！」

「スパークで迎撃しろ！」

『ブーイ！！』

『ガーウ！！』

ブイゼルとラクライはぶつかり合い、爆発が起こった。

「どっちが勝ったの！？」

「煙りで見えない〜！」

煙りが晴れると、そこには、目を回したブイゼルとラクライがいた。二人ともダウンしてる……ってことは引き分け？

「くっそー！引き分けかー！まあいいや、楽しかったし！ブイゼル、お疲れさん！ゆっくり休んでくれ！」

「ラクライ、ご苦労だった」

二人は自分のポケモンを、モンスターボールに戻した。その表情は、どこか満足したような感じだった。

「……フツ……良いバトルだった」

シヨウは微笑みながら言った。

「オレもだな〜！でも次は勝つからな！」

二人共、バトルが楽しかったのか、笑顔で話していた。

「それよりシヨウ、そろそろ船来るよ」

キョウコが、腕に付けてるポケギアを見ながら言った。ちなみにポケギアは、ポケモンギアの略で、いろんな機能があるのよ。

「だな……」

「お別れだな」

「嗚呼……そうだな」

二人は、どこか寂しそうな感じだった。いつも会っていた人と、しばらく会えなくなるんだもんね……正直私も寂しいよ……

「さて……船着き場に行くか」

「その前にポケモンの回復だ」！

シヨウとリュウタは、ポケモンセンターでバイゼルとラクライの体力を回復し、ヨシノシティの船着き場に向かって歩きだした。私とキョウコもその後を追っていった。



船着き場に着くと、そこには、フェリーを少し大きくしたぐらいの船が止まっていた。この船みたいね。

「レナ、リュウタ、バイバイ……」

キョウコは少し涙目になりながら言った。そんな目で見られたら私まで泣いちゃうよ……

「シヨウ！次はオレが勝つからな！」

「フツ……楽しみにしている」

フツ……なんだかんだ言っても、やっぱりこの二人は仲が良いわね。

「元気でねキョウコ！」

「ふえ〜ん……レナも元気でね」

キョウコは本格的に泣き出してしまった。本当に私まで泣いちゃうぞ……

「……別れが嫌なら来なくてもいいぞ」

「駄目〜！アタシはシヨウと一緒に行くの〜！……じゃあ二人とも、元気でね〜！」

「じゃあな」

二人はそう言いながら、船に乗っていった。私達は、船が見えなくなるまで見送っていた。

「おいレナ？大丈夫か？」

リュウタが、少し寂しいそうな私を心配してくれた。

「うん……大丈夫！私達も頑張ろっ！」

「だな〜！」

そう、私達も頑張らなくちゃ！そうじゃないと二人に追い越されちゃうよ！

「次はどこに行くの？」

「ウツギ博士に頼まれごとされてたよな？それを済ませてからキキヨウシテイだな〜」

リュウタはこれからの旅のルートを説明してくれた。いつも軽いの、こういうのは頼りになるわね。

「こういうのはって酷くないか〜？」

「えっ？なんでわかったの？」

「あ、当たってた？何となく表情に出てたからさ〜」

うう……私って顔に出やすいのかな……？気をつけよう……

「じゃあポケモンじいさんって人の所に行こう」

「うっし！行くか」

私とリュウタは、ウツギ博士に頼まれていた用事を済ませるために、ポケモンじいさんの家に向かっていった。

## レナ編 第四話 バイバイ（後書き）

リュウタ

「いっちゃまったな」

レナ

「寂しいね……」

今回はシヨウ視点で進めていきます

レナ

「前に言ってたもう一人の主人公はシヨウ？」

そゆこと

基本的にレナ視点、シヨウ視点と入れ代わって進めていきます

レナ

「ややこしくならないようにね」

努力するよ……

## シヨウ編 第五話 海の上で（前書き）

第五話完成！

レナ

「なんで誓いと絆の両方を更新したの？」

リュウタ

「テストへの逃避しかないっしょ！」

うるさーい！

では第五話をどうぞ！

## シヨウ編 第五話 海の上で

俺とキョウコは、あいつらと別れ、シンオウに行く船に乗っている。それ程大きい船ではないが、なかなかの乗り心地だ。

「ほわあゝ 綺麗ゝ」

キョウコは船のデッキから海を眺めながら言った。まあそう思うのもわからなくはないな。

「シヨウも一緒に見ようよゝ」

「……断る」

俺はキョウコの誘いを断った。あいつのペースに乗せられたらなにされるかわからないからな。

「ぶうゝ……所で目的地はどこなの？」

なんだ……目的地知らなかったのか？まあ教えてなかったからな。

「マサゴタウンだ。そこまで大きい町じゃないらしい」

俺は、キョウコにマサゴタウンについて説明した。そういえばあそこにはポケモンの研究所があると聞いたな……まあどうでもいいか。

「ところでお二人さん！なんでジヨウトからシンオウに行くんだい？」

俺とキョウコが話していると、中年ぐらいの船の操縦士が話しかけてきた……随分と馴れ馴れしい男だ。

「ん？ ショウはシンオウに強いトレーナーを求めてるんだよ」

キョウコがその運転手の男に説明した。間違っではないが……なに勝手に話しているんだ？

「そうかい！ 確かにシンオウには強いトレーナーは多いな！ んじゃない？ お嬢ちゃんは？」

「アタシ？ アタシはショウについて来たの」

「なるほど！ そういうことかい！」

操縦士の男が何か思い詰めたような顔をした。

「最近この辺で、暴れん坊のポケモンが出るって聞いてな。そろそろそいつの出没する場所なんだが……」

男がそう言った刹那、いきなり船が揺れた。まさか……そのポケモンが現れたのか？

「ショウ！ 下！ 海の中になにかいるよ！」

俺も確認すると、確かにポケモンの影が見えた。どうやらそいつが攻撃してきているみたいだ。

「どうしよう！ このままだと船が！」

「一応結構頑丈だが、あんまり攻撃を受けると耐え切れんぞ!」

「やるしかないな……ラクライ」

『ガウッ!』

俺はモンスターボールから、パートナーのラクライを出した。

「ラクライ、海に電磁波」

俺はラクライに電磁波を海に向かって放つように言った。電磁波のような弱い電気なら船を壊す心配もなく、そのポケモンを麻痺させることも出来る。

電磁波を使つてすぐ、一匹のポケモンが、船のデッキに上がってきた。星型で、真ん中に宝石のようなものがあるポケモン、ヒトデマンだった。

「こいつはヒトデマンだ!」

「ヒトデマン?初めて見たよ」

こいつが……フッ、面白い、ゲットしてやる。

「ラクライ、いくぞ。スパーク」

『ガウッ!』

ラクライは体から電気を放出し、そのままヒトデマンに向かって突



進した。ヒトデマンは、スパークに対して回転しながら体当たりをする技、高速スピンドで迎撃してきた。

「そのまま突っ込め！」

『ガーウ！』

ラクライはそのままヒトデマンに向かって突進した。二つの技がぶつかり合い、二匹は押し戻されてしまった。

「大丈夫か？」

『ガーウ！』

ラクライは元気良く返事をした。ダメージは少ないようだ。

「おいおい！あんまり激しいバトルするなよな！」

操縦士の男がそう言った。確かにここは船の上。さつさと蹴りをつけた方が良さそうだ。

「一気にいくぞ。ラクライ、遠吠え！」

『ガーウ！！』

ラクライは遠くにも聞こえそうな声で遠吠えをした。遠吠えは自分の攻撃力を上げる技。次の攻撃で終わらせるための準備だ。

「終わらせるぞ！スパーク！」

ラクライは全身に雷をまといながら、ヒトデマンに向かって突進した。それはヒトデマンの中央にある宝石のような部分に命中し、ヒトデマンは吹っ飛んだ。ヒトデマンは中央のコアを点滅しながら倒れた。

「シヨウ！今だよ！」

「わかってる。モンスターボール！」

俺は、ヒトデマンに向かってモンスターボールを投げた。ヒトデマンはモンスターボールに吸い込まれていった。

「どうかな……」

「……………」

俺はモンスターボールを見守っていた。ボールはまだカタカタ動いていた。そして、カチツツという音がし、ボールの動きが止まった。

「止まった……」

そうキョウコが言った。俺は止まったボールの所に行った。

「ヒトデマン……ゲットだ」

俺はモンスターボールを拾いながら言った。

「やったー！」

キョウコは、自分のことのように喜んでいた。

「なかなかやりおるな！」

操縦士の男も喜んでいた。正直俺も初めてのゲットに喜びを隠せなかった。

「出てこい、ヒトデマン」

俺はモンスターボールからヒトデマンを出した。ヒトデマンはダメージが大きいのか、フラフラしていた。多分ヒトデマンならあれが使えるはずだ。

「ヒトデマン、自己再生」

ヒトデマンは自己再生を使い、自分の怪我を治した。やはり自己再生を使えるみたいだな。

「よろしくな」

ヒトデマンは回転しながらジャンプした。よろしくってことか？

「でもショウ、なんで自己再生を使えるのがわかったの？」

「……俺の親父がスターミーを持っていたからだ」

そう、俺の親父はポケモントレーナーだった。何故過去形かって？……親父は……五年前にギンガ団に殺された。その親父がヒトデマンの進化系のスターミーを持っていたから知っていたんだ。

「よっし！発進するぞ！」

操縦士の男は止めていた船を発進させた。

「そういえばまだワシの名前を言ってなかったな！ワシはリュウジだ！」

操縦士の男、リュウジは自己紹介をした。

「アタシはキョウコよ」

「……シヨウだ」

キョウコ、俺の順に自己紹介をした。この男、そんなに悪い奴じゃないみたいだな。

「さて！全速前進だ！」

リュウジは船のスピードを上げた。あとどれぐらいでシンオウに着くんだ？

「リュウジ、あとどれぐらいで着くんだ？」

「そうだな……早くてあと5時間ぐらいだな」

「まだそんなにあるんだ……早く着かないかなあ」

キョウコは少しふて腐れたような顔をした。確かにそう思うのはわかる。

「ポケモンを出して遊んではどうだ？」

リュウジは、笑顔で俺とキョウコに言った。確かにそれなら退屈しないですみそうだな。

「そうだな。出てこいラクライ」

『ガウッ』

俺はボールからラクライを出した。ヒトデマンは既に出ているから出す必要はない。

「アタシも！おいでピチュー！オタチ！」

『ピッチュー』

『オタ』

キョウコはボールから、ピチューとオタチを出した。

「みんな！ゆつくりしていいよー！」

キョウコがそう言うと、ピチューとオタチはじゃれあい始めた。ラクライはそこに混じり、ヒトデマンは一人でひなたぼっこしていた。

「なんか和むね」

キョウコはまったりしながら言った。確かになぜか和むな。

「なんか……眠くなってきたよ……」

キョウコは目をこすりながら言った。それから数分もしないうちに眠ってしまった。

「シヨウも着くまで寝てたらどうだ？」

リュウジは俺にそう言った。ラクライ達も寝てしまったみたいだ……俺も寝るか。

「そうだな……着いたら起こしてくれ」

俺はリュウジにそう頼んだあと、シンオウのことを考えながら眠りについた。

## シヨウ編 第五話 海の上で（後書き）

新しい仲間のヒトデマンです！

ヒトデマン

『……………』

キヨウコ

「無口だね〜（汗）」

ヒトデマンは無口だと思いました。

キヨウコ

「次回は〜？」

レナ編です。一応お使いを済ませますよ

キヨウコ

「次回をお楽しみに〜」

レナ編 第六話 ポケモンじいさん（前書き）

第六話完成！

レナ

「なんか久しぶりね」

テストだったからね

では第六話を……

レナ

「どうぞ！」

僕の台詞……（泣）



## レナ編 第六話 ポケモンじいさん

私達はシヨウとキヨウコと別れ、ヨシノシティの先にある30番道路にやって来た。ここにウツギ博士に頼まれていたポケモンじいさんって人の家があるはずだけど……どこかな？

「で？そのポケモンじいさんってのはどこにいるんだ？」

リュウタが私に聞いてきた。そういえばウツギ博士から細かい場所を聞いてない……

「私……知らないのよね……」

「おいおいマジかよー！ったくしっかりしてそっに見えてドジだな」

「ドジって言わないでよ！」

ううっ……私ってそんなにドジなのかな……ううん！そんなことないもん！私はドジじゃない！

「とにかく探すわよ！」

私は少し声を荒げてリュウタの腕を引っ張った。

「ちよっ！引っ張んなってー！」

リュウタが何か言ってるけど……今の私には聞こえないよ！それに私はドジじゃないんだもん！

「でもどうやって探すんだ？あてもなく探すのはどうかと思っぜ」  
引つ張られていたリュウタが私に聞いてきた。確かに……どうしたらいいのかしら……

「どうするの？」

「聞き込みするのがいいんじゃないか？」

リュウタが意見を出してくれた。確かにこの辺の人ならわかるわよね。

「じゃあ聞きに行こう！」

私は一人で走りだした。リュウタは急いで私の後を追ってきた。

「あゝすみません」

私は目の前の男の子に声をかけた。帽子を被っていて短パンを履いていた。いかにも外で遊ぶのが好きって感じの男の子だった。

「なんだい？」

「ポケモンじいさんって人の家どこにあるか知ってますか？」

「おう、知ってるぜ」

やった！いきなり知ってる人に会えたよ。

「どこなんだ？」

「教えてもいいけど……俺とバトルしたら教えてやるよ！」

そう言いながら男の子はモンスターボールを取り出した。なんか嫌でもバトルさせたいみたい……

「よっしゃ！オレがやるぜー！」

もう……こっちはこっちでバトル馬鹿がいるし……仕方ないね。

「じゃあ私が審判するね」

「オーケー！頼むぜブイゼル！」

『ブーイ！』

「いけっ！コラッタ！」

『コラッ！』

リュウタはパートナーのブイゼル、男の子は紫色の体に大きい前歯が特徴的なポケモン、コラッタを繰り出してきた。リュウタ、大丈夫かなあ？

「じゃあブイゼル対コラッタのバトル、開始！」

「よっしゃあ！ブイゼル！アクアジェット！」

「コラッタ！体当たり！」

私の号令を合図に、二人は自分のポケモンに命令を出した。ブイゼルとコラッタはぶつかり合ったけど、パワーはブイゼルの方が上みたい。コラッタは押し負けて少し吹き飛ばされちゃった。

「一気にいくぜ！ブイゼル！ソニックブーム！」

『ブイ！』

ブイゼルは尻尾を回転させ、衝撃波を発生させた。それをコラッタに向けて発射した。

「避ける！」

コラッタはギリギリソニックブームをかわした。リュウタ、攻めるけど、いまいちペースを握れないね……

「ブイゼル！アクアジェット！」

「コラッタ！必殺前歯！」

ブイゼルは自分の身を水で包み込んでコラッタに突っ込んでいった。対するコラッタは、自分の前歯に力を込め、ブイゼルに迎撃しようとした。二匹はぶつかり合い、お互いに吹き飛ばされた。

「ブイゼル！」

「コラッタ！」

二人の呼びかけに反応したのはいなかった。ブイゼルもコラッタもダウンしているみたい。

「ブイゼル、コラッタ先頭不能！このバトル、引き分け！」

私はそれを見てコールをかけた。二人は自分のポケモンのもとに駆け出した。

「ブイゼル！大丈夫か！？」

リュウタは倒れているブイゼルに声をかけた。ブイゼルは気絶しているみたいね。

「お疲れ様。ゆっくり休んでいてくれ」

リュウタはそう言いながらブイゼルをモンスターボールに戻した。そうしてる間に、男の子はコラッタを戻し、私達の所に来た。

「引き分けか」とりあえず場所を教えなくちゃな」

男の子はそう言いながらポケモンじいさんの家の場所を教えてください。

「じゃあ俺は行くから。じゃあな」

そう言い残して、男の子は去っていった。

「早く行こうぜ」

リュウタは早くポケモンじいさんの所に行こうって言ってるけど……

「その前にポケモンセンターでブイゼルの体力を回復した方が良いんじゃない？」

「そうだったな！ドジなレナも良いこと言うな」

「ドジじゃないもん！」

私がそう言うと、リュウタはヨシノシティの方に逃げ出した。私はそれを追い掛けたけど……私はドジじゃないんだからね！本当だよ！

私達はポケモンセンターでブイゼルの体力の回復を終え、さっきの男の子が教えてくれた道を歩いていた。

「ここを真つすぐか？」

「みたい……あつあれかな？」

私達の前には、小さいけど、オシャレな家があった。ここがポケモンじいさんの家かな？

「とりあえず入ってみるか」

リュウタはそう言いながら家の扉をノックした。普通ここかなって躊躇するんじゃない？本当に積極的よね……

「はい？どちらさま？」

出てきたのは六十代後半ぐらいのおばあちゃん。リュウタはその人を見て話し始めた。

「ウツギ博士に頼まれて来たんですけど」

リュウタはいつもより丁寧な言葉で言った。なんかいつも軽いリュウタが丁寧な言葉をしゃべると違和感があるなあ。

「あらあなた達ね。じいさん、ウツギ博士の所の人が来たわよ。さあ、上がって」

「おじゃまします」

私とリュウタが家の中に入ると、そこには帽子を被ったおじいさんと、白髪で白衣を来たおじいさんがいた。

「よく来たね。私がポケモンじいさんだよ」

帽子を被ったおじいさんがポケモンじいさんだったのね。じゃあもう一人の方は……？

「失礼ですけど……あなたは？」

私は白髪のおじいさんに質問した。おじいさんは嫌な顔をせず、自己紹介を始めた。

「ワシはオーキドというものじゃ」

『オーキド！？』

思わず私とリュウタの声がハモってしまった。オーキドってあの有名なポケモンを研究している人よ！？なんでここにいるの！？

「あの有名なオーキド博士が何故ここに？」

リュウタがオーキド博士に質問した。その表情は、まだ驚きを隠せていなかった。

「ポケモンじいさんとは古い付き合いでな。丁度ウツギ君の所から有望なトレーナーが来ると言っていたからな」

ウツギ博士ったら、いつの間にそんな連絡を入れてたのかしら……

「ふむ……ウツギ君の言っていた事は正しいみたいじゃな。君達にこれをあげよう」



そう言いながらオーキド博士は、私とリュウタにあるものをくれた。  
これって……！？

『ポケモン図鑑！？』

またしても私とリュウタの声がハモってしまった。まさかオーキド博士がポケモン図鑑をくれるなんて……まだ信じられないよ。

「良いんですか！？」

「うむ！君達にその図鑑を完成してもらいたいんじゃない！」

図鑑を完成……凄い大役ね……でもなんかワクワクするよ！

「ありがとうございます！」

リュウタはオーキド博士にお礼の言葉を言った。その瞳は子供がおもちゃを貰ったみたいにキラキラしていた。

「所で……ウツギ博士に渡したいものって？」

「おお！忘れておったわ！これじゃー！」

そう言いながらポケモンじいさんは一つの卵を渡してくれた。これって……ポケモンの卵？

「これをウツギ博士に届けてもらいたいんじゃない！」

「わかりました！」

リュウタが元気よく答えた。そこにオーキド博士が話し掛けてきた。

「君達これからどこに行くんじゃない？」

「とりあえずウツギ博士の所に戻ってからキキョウシティです」

私はオーキド博士に説明した。

「ならワシが届けてやろう。君達はキキョウシティに行きなさい」

ええっ！？まさかの親切に私もリュウタも驚いてしまった。

「そんな！悪いですよ！」

「いやいや、ワシもウツギ君に用があつてのう。君達は早く旅の続きをきなさい」

うーん……ここはお言葉に甘えちゃおうかな？

「ありがとうございます。お願いします！」

私はオーキド博士にお礼を言った。さすがオーキド博士ね。

「ではワシはこれで」

オーキド博士はそう言い残して、卵をもって家から出ていった。

「君達はもう行くのかね？」

ポケモンじいさんが私達に声をかけてきた。私はいちでもいいんだ

けど……

「なあレナ！ちょっとポケモン図鑑を試してみようぜ！」

確かに試してみたいわね。私はオーキド博士から貰った図鑑を取り出した。

「ポケモン図鑑は、ポケモンに向ければその説明や使える技がわかるのじゃぞ」

ポケモンじいさんが、図鑑について説明してくれた。私はそれを聞き、エイパムとヒメグマをボールから出した。リュウタもブイゼルを出していた。

「じゃあ……」

私はエイパムに図鑑を向けると、エイパムの説明や体格、使える技が表示された。

「スゲー！」

リュウタは小さな子供みたいにはしゃいでいた。

「レナ！早く旅を再開しようぜ！」

ちよつと……もう少しゆっくりしてからでもいいと思うんだけど……でもあんまり長居するのも悪いよね。

「じゃあ私達、そろそろ行きますね」

「そうかい。気をつけてな」

私達はポケモンじいさんの家を後にした。

「さて……行こうぜ」

「うん！」

私達は元気良くキキョウシティへと歩きだした。

レナ編 第六話 ポケモンじいさん（後書き）

リュウタ

「ポケモン図鑑スゲー！」

静かにしなさい

次回はシヨウ視点です

キヨウコ

「そろそろシンオウ」

いつの間に……

シヨウ編 第七話 シンオウ到着（前書き）

第七話完成！

キヨウコ

「今回はアタシ達」

そつじつことな

では第七話をどうぞ！

## シヨウ編 第七話 シンオウ到着

「お二人さん！シンオウに着いたぜ！」

俺は操縦士の男、リュウジに声をかけられ目を覚ました。

「着いたのか……？」

「おうよ！早くお嬢ちゃん達を起こしてきな」

俺は少し寝ぼけていたが、リュウジの言う通り、キョウコ達を起こしにいった。

「おい……着いたぞ」

俺はキョウコに声をかけた。良く見ると寝顔はかわいいな……まあ今はどうでもいいがな。

「ふえ……？着いたの……？」

キョウコは寝ぼけ眼でそう言った。

「嗚呼。早く起きろよ」

俺はそう言い残してラクライ達を起こしにいった。ラクライ達は俺が起こすとすぐに起きた。

「よし、起きたな」

俺はラクライとヒトデマンをボールに戻した。

「私も……戻ってピチュー、オタチ」

キョウコはいつもの元氣を感じられないよいな声でピチューとオタチをボールに戻した。まだ寝ぼけてるのか？

「じゃあ氣をつけてな！」

「うん〜！ありがとうね〜」

「じゃあな！」

リュウジはそう言い残して去っていった。

「じゃあ行こう〜！」

「嗚呼」

俺達はマサゴタウンに向けて歩きだした。



歩きだして数分も経たずに町に着いた。おそらくここがマサゴタウンなんだろうが……なんだか騒がしいな……

「どうしたのかな？」

「さあな」

正直俺は興味が無かった。それ以前に面倒なことかもしれない。そんなことに巻き込まれるのは勘弁だからな。

「シヨウ〜！あれ〜！」

キョウコの指差す方を見ると、白髪のじいさんと、赤い帽子を被った、俺達とさほどかわらない男が、黒服でおかっぱ頭の男が絡んでいた。あの男……！

「あの男〜！」

「嗚呼……ギンガ団とロケット団の残党……！」

そう、旅立って直ぐに出会ったロケット団とギンガ団の合わさった組織……ラクリモーサ……その仲間か！？

「いくしかないよ〜！」

「そうだな」

俺とキョウコは人混みを抜け、黒服のおかっぱ男の前にでた。

「なんだお前達は？」

「貴様……ラクリモーサか？」

俺の子供に、黒服の男は少し驚いていた。まあいきなり自分の組織の名前を言い当てられたら驚くよな。

「俺達を知っているとはな……悪いが俺について来てもらおうぞ！」

そう言いながら男は一匹のポケモンを出してきた。兎みたくで、グルグルの目にぶち模様があつた。

「やれ！パッチール！」

パッチールと呼ばれたポケモンは、俺達の所に走り出した。だがその様子は普通のポケモンとは違っていた。普通のポケモンより殺気が溢れ、右手にはキャノン砲みたいな装置が着いていた。

「なんじゃあのポケモンは……普通とは違うのう……貴様！そのポケモンに何をした！？」

白髪のじいさんが、黒服の男に怒鳴り付けた。確かに普通とは違う……装置を装着しているのは前に見たが……あそこまで殺気が凄いのは見たことがない……

「お前達に教える必要はない！」

「なら力ずくでも話してもらおう。ヒトデマン！」

「私も！オタチ！」

俺はヒトデマン、キョウコはオタチを繰り出した。

「僕も加勢します！ペラップ！」

赤い帽子の男は、頭に音符のようなものがあるカラフルな鳥を繰り出した。ペラップっていうのか。

「僕はケイタっています！お二人は？」

赤い帽子の男はケイタと名乗った。

「……シヨウだ」

「キョウコだよー！」

俺とキョウコは自己紹介をした。さて……そろそろいくか。

「そろそろいくぞ。ヒトデマン！水鉄砲！」

『デヤッ！』

ヒトデマンはパッチールに向かって水鉄砲を放った。

「その程度か！？パッチール！かわせ！」

パッチールは右にステップして、水鉄砲をかわした。だがそこまでスピードはないな……

「私もいくよー！オタチ！引っかく！」

「ペラップ！突く！」

『オタツ！』

『突く！突く！』

オタチとペラップは、それぞれの技でパッチールに攻撃した。それ以前にペラップが喋ってる……そういえば声マネをするポケモンがいるって聞いたことがあるが……それがペラップなのか？

「かわしてサイケ光線！」

パッチールはオタチとペラップの攻撃を簡単にかわし、虹色の光線を放ってきた。

「オタチー！？」

「僕に任せてください！ペラップ！守るでオタチを守るんだ！」

『守る守るー！』

ペラップは自分の周りに壁を作り、オタチごと自分の身を守った。あのペラップ……かなりのレベルだな……

「ちっ！うっとうしい！パッチール！フラフラダンス！」

男がそう命令すると、パッチールはフラフラと不思議なダンスを踊りはじめた。なにがしたいんだ……！！？

「ヒトデマン!？」

ヒトデマンは意味のわからない行動をしはじめた。まさか混乱しているのか？

「あのダンスのせいなの!？」

「フラフラダンスは自分以外のポケモンを混乱させる技なんですよ……厄介ですね……」

混乱させる技か……確かに面倒だ。どう攻めるか……

「パッチール! 一気に決めろ! サイコキャノン!」

なんだ? パッチールの右腕についている装置が光だした……まさか!？

「放てえ!!」

そう男が言った刹那、パッチールの右腕の装置から虹色の光線を放った。先程のサイケ光線と似ているが、その威力は比べものにならなかった。

「うそ〜!？」

「マズイ!」

そう言ってる間にも光線は近づいてきていた。どうすれば……

「一か八かです! ペラップ! 守る!」

なに？ペラップは混乱しているし、なにより守るは連続では成功確率が下がる。それなのに守るを命令するのか？だが俺の考えは半分違っていた。ペラップは混乱していなかった。

「成功してください！」

『成功成功！』

ペラップは先程と同じように守るを使った。刹那、ペラップの周りに壁が発生し、ヒトデマンとオタチを守った。守るが成功したのか？

「ペラップ！？」

だが守るが切れたと同時に力尽き、地面に落ちた。

「ペラップ、お疲れ。ゆっくり休んで……」

ケイタは倒れたペラップをボールに戻した。その表情はどこか怒っているようにも見えた。ペラップが倒されて怒っているのか？

「あなたはポケモンをどう思っているんですか！？」

ケイタは唐突に黒服の男に問い掛けた。男は微笑を浮かべて話しはじめた。

「目的を達成するための道具……それ以外になにがある？」

フン……予想通りの対応だな……クソヤロウが。

「二年前のギンガ団そっくりですね……もう容赦しない！ゴウカザル！」

『ウキヤー！！』

ケイタは、頭に炎が燃えている、猿に似たポケモンを出してきた。ゴウカザルっていうのか……

「ゴウカザル！挑発！」

『ウキッ』

ゴウカザルは『来いよ』と指で挑発した。パッチールはそれを見て怒りだした。たしか挑発は攻撃技しか出せなくなる。これでフラフラダンスは封じたわけだな。

「ゴウカザル！ブラストバーン！」

「パッチール！サイコキャノン！」

ゴウカザルは燃え盛る火球、パッチールは虹色の光線を放った。二つの技はぶつかり合い、お互いに消滅した。

「今ならチャンスか……キョウコ！」

「任せて〜！オタチ〜！ヒトデマンに手助け〜！」

『オッタ！』

「ヒトデマン、パッチールの背後に回れ」

俺の命令を聞き、ヒトデマンはパッチールの後ろに回り込んだ。ゴウカザルに集中している今ならいけるはずだ。

「ヒトデマン、最大パワーで水鉄砲！」

「なっ！？パッチール！後ろだ！」

今ごろ気付いたか……だが遅い。水鉄砲はパッチールの背中に直撃した。手助けの効果は、対象にしたポケモンの次に出す技の威力を上げる技。今の威力はかなりのものだ。ダメージが大きいかさつきよりフラフラしている。

「オタチ！引っかく！」

「オター！」

なに？オタチは引っかくをせず、両手で水色の波動を作り出して、パッチールに放った。今は……水の波動か？

「凄い！オタチ水の波動が使えるんだ」

「オタツ」

オタチは笑顔で答えた。水の波動はパッチールに命中し、ダウン寸前になっていた。

「一気に決めましょう！ゴウカザル、火炎放射！」

「わかった。ヒトデマン、水鉄砲」



「オタチゝ！水の波動ゝ！」

『ウキー！』

『デヤッ！』

『オター！』

三匹の技はパツチールに命中し、爆発が起こった。煙りが晴れると、そこにはパツチールが倒れていた。

シヨウ編 第七話 シンオウ到着（後書き）

キヨウコ

「勝った〜!!」

凄いはしゃぎっぷり……

シヨウ

「……次回はどうなるんだ？」

レナ編だねそろそろキヨウ到着かな？

シヨウ

「……………」

## レナ編 第八話 探検ツアー（前書き）

第八話完成！今回から\*snow white\*さんの『ポケモン  
ジヨウトADVENT』とのコラボです！

リュウタ

「楽しみだな！」

そういえばこのサイトに登録していなくても感想が書けるようにな  
ったんだよね

リュウタ

「だな」

僕の小説もそういう風に設定しましたので、良かったら感想お願い  
しますね

では第八話をどうぞ！

## レナ編 第八話 探検ツアー

私達はポケモンじいさんの家を出て数時間後、なんとかキキョウシティにたどり着いた。もう空は赤くなってしまう、ヤミカラスが鳴いていた。

「思ったより遅くなっちゃったな」

「リュウタがバトルばかりしてるからよ！」

そう、ここまで来る間に、リュウタは何回もポケモンバトルをしていたの。おかげでこんなに遅くなっちゃったのよ。

「とにかく……ポケモンセンターだな！腹減ったぜ！」

リュウタはそう言いながらポケモンセンターへと歩きだした。

「ちょっと！場所わかるの？」

「……あゝわかんねえやゝハハハハッ！」

なにやってるのよ……とりあえず私はバックからタウンマップを取り出した。

「えっと……こっちみたいね」

「方向間違えてねえか？」

「間違えないよ！」

「ドジなレナならわかんないからな」

リュウタは笑顔で私をからかい始めた。だ〜か〜ら〜！私はドジじゃないもん！

「もう！私先に行くよ！」

「待てって！悪かったよ！」

「もうリュウタなんか知らない！」

私は頬つぺたを膨らませながら、ポケモンセンターがある方へと向かって歩きだした。

私とリュウタはポケモンセンターに着いて早々、ポケモン達をジョーイさんに預け、食堂に向かった。

「レナなに食べる？」

私はリュウタの問い掛けを無視し、そっぽ向いた。

「まだ根に持ってたのかよ〜今度なにかおこるからさ〜」

「……じゃあマダツボミ饅頭!」

マダツボミ饅頭はキキョウシティの名物の一つなの。イチゴとかチョコとかいろんな味があるのよ!

「へいへい。とにかく早く飯食おうぜ」

「うんっ!」

私は機嫌を直し、ご飯を食べることにした。その日は私はスパゲティ、リュウタはハンバーグを食べていた。

「うちそうさま」

「さて〜明日どうするよ?」

明日か……本当はジム戦に行きたいけど、焦ったらだめよね。

「さっき聞いたんだけど、この近くにあるアルフの遺跡って所で探検ツアーみたいなものがあるみたい」

「よっしゃ!決定〜」

リュウタは目をキラキラ輝かせながら言った。本当に探検とか好きよね……女の子の私には理解に苦しむよ。

「とりあえず部屋に行こうよ」

「だろ」

私達は自分達の部屋へと向かった。ちなみに私とリュウタは同じ部屋……え？嫌じゃないかって？小さいころから一緒だから、そんなこと思ったことないよ？

「二段ベッドじゃん」

リュウタはそう言いながらベッドにダイブした。

「なあレナ、俺上で良いか？」

まあ私は上でも下でも良いからね。まあ良いかな？

「良いわよ」

「よっしゃー！」

リュウタは大袈裟にガッツポーズをした。そんなに上の方に利点があるのかしら？

「じゃあ私シャワー浴びて来るね」

「いつてらっしゃい」

私は部屋にあるシャワーへと向かった。本当、食堂もあるしシャワーもあるし、ポケモンセンターは便利ね。

私がシャワーから出てくると、リュウタは漫画を読んでいた。漫画なんか持ってきていたんだ？

「開いたよ」

「おう りょーかい」

リュウタは漫画を片付け、シャワーを浴びに行った。

「フウ……」

私はため息を一つしてベッドに横になった。なんか今日は疲れたな…… あっなんか眠くなってきた…… もうなんだかんだで夜の8時だもんね…… でもちよっと早いよ……

「ふああゝ……」

私はあくびを一回した。そのせいか余計に眠くなってきちゃった

……

「さっぱりしたぜ」

「ふああゝ…… あっリュウタ……」



私は目を擦りながら言った。ダメ……本当に眠い……

「眠そうな顔だな〜つつてもオレも眠いんだよな〜」

リュウタも欠伸をしながら言った。

「もう寝るか〜」

「そうね……おやすみリュウタ」

「おう、おやすみ」

そう言いながら私とリュウタは眠りに着いた。

次の日、私が目覚めると、リュウタは既に起きていた。

「ようレナ」

「おはよう……痛っ！」

私が起きて立とうとしたら、二段ベッドの上のベッドに頭をぶつけてしまった。痛いよう……

「大丈夫か？まったく、相変わらずドジだな」

「ドジじゃないもん……」

私は涙目になりながら訴えた。本当に痛いよ……

「本当に大丈夫か？」

リュウタは私がぶつけた所を撫でながら言った。子供あつかいしないでよ……もう。

「もう大丈夫だから。朝ごはん食べに行こうよ」

「だな」

私達は朝ごはんを食べに食堂へと向かった。

私達は朝ごはんを食べ終え、ジョーイさんからモンスターボールを受けとった。

「んじゃアルフの遺跡にレッツゴー！」

「まってよー！」

リュウタは意気揚々と出発した。置いてかないでよー！

「ここがアルフの遺跡かー！」

リュウタは目を輝かせながら言った。なんだか不思議な感じがするところね……

「で？ ツアーはどこで参加するんだ？」

「あそこね」

私が指差した方には、ツアー参加申し込みと書いてあった。

「んじゃ行くかー！」

リュウタは私の手を引っ張りながら言った。痛いから引っ張らないでよー！

「ようこそアルフの遺跡探検ツアーへ！」

まだ若そうな男の人が説明を始めた。なんかワクワクしてくるね。

「このツアーは四人一組で行い遺跡探検をしながら各ポイントに置かれてあるスタンプを押していくスタンプラリー形式になっています。また、一番にすべてのスタンプをゲット出来たチームには素敵なプレゼントをご用意してありますので、頑張ってくださいね！」

うわぁ！プレゼントってなにかな？でも……四人一組？人数足りないよ……

「ワクワクするな！」

「でも……人数足りないよ……」

「確かに……おっ！」

リュウタがなにか見つけたような表情になった。リュウタの目線の先には、私達とさほどかわらない男の子と女の子がいた。

「あいつらに頼むか」

「ちよっ！？リュウタ！」

リュウタは笑顔で前にいる二人に声をかけた。なんでこんなに人見知りしないのかしら？

「なあ、俺達と一緒に組まないか？」

リュウタは二人にそう声をかけた。二人共優しそうな感じがするわね。

「えっ？」

「いきなり悪いな。オレの名前はリュウタ！ポケモントレーナーだ」

リュウタは変わらない笑顔で自己紹介をした。私もしないとね。

「私はレナだよ。リュウタと一緒に旅してるんだ」

私は二人に簡単に自己紹介をした。二人は顔を見合わせてから、話し始めた。

「うん、良いよ。僕はエイト、同じくポケモントレーナーだよ」

「私はリナよ！よろしくね！」

男の子はエイト君、女の子はリナちゃんと私達に名乗った。なんだか仲良くなれそうな気がするよ。

「エイトとリナだな。今日はよろしくな！一番とってプレゼント貰おうぜ！」

リュウタ、すごい気合いね……でもプレゼントってなんなのかな？

「うん！頑張って行くぞー！」

『おおー！』

リナちゃんの号令を合図に、私達は一齐に言った。なんだか私もやる気になってきた！頑張るよ！

レナ編 第八話 探検ツアー（後書き）

リュウタ

「探検」

レナ

「もう、子供じゃないんだから」

僕も探検とか好きだけど？

レナ

「次回は？」

ツアー開始だね

キョウコ

「アタシ達は？」

コラボが終わったからね

ショウ

「……………」

レナ編 第九話 事件発生（前書き）

第九話完成！

リュウタ

「たんけーん」

レナ

「私も楽しみね」

では第九話をどうぞ！



## レナ編 第九話 事件発生

「どこから行くの？」

リナちゃんはさつき私達がもらったアルフの遺跡の地図を見ながら言った。ポイントは五個あるみたい。一番近いのは……遺跡の中の大広間ね。

「この先にある遺跡の大広間みたいだね」

私より先にエイト君がリナちゃんに教えた。早く行かないとね！

「なら大広間にレッツゴーだぜ！」

「おおー！」

リュウタの号令に続き、リナちゃんが大広間へと向かった。なんかあの二人って仲良くなれそうだね。

「僕達も行こう」

「そうね」

私とエイト君も、遺跡の大広間へと向かった。

私とエイト君が大広間に着くと、既にリュウタとリナちゃんに来ていた。なんか一緒にはしゃいでいるね。

「うおー！広いなー！」

「この文字なにかな？」

リナちゃんの前には、なにかの文字が書いてあった。なんなのかしら……？

「確かこれはアンノーン文字だな〜読めないけどな！」

アンノーン文字っていうのね。でもリュウタ……読めないことは威張れることじゃないよ……

「でよ〜肝心のスタンプどこだ？」

リュウタが周りをキョロキョロしながら言った。

「あそこじゃないかな？」

エイト君の指差す方を見ると、そこには古代のポケモンの像の下に、スタンプを押す台があった。あれみたいね。でもあのポケモンの像はなんなのかしら？

「スタンプはつけ〜ん！」

それを見るやりナちゃんがスタンプ台に向かって走り出した。

「オレが先だ〜！」

「……………」

二人の気迫のせいで、私とエイト君は黙り込んでしまった。

「レナちゃん、苦勞してるんだね……………」

「ハハハ…………とにかく私達も行こう」

私は苦笑しながら、スタンプ台へと歩きだした。

「まず一個ゲット！」

「やったね」

スタンプを台紙に押して、二人は喜んでいた。なんか二人のテンションについていけないよ…………

「次はどこかな？」

「近くにある壁画みたいね」

リナちゃんの質問に私が答えた。古代ポケモン…………この像もそうだけど、一体どんなポケモンだったのかしら？

大広間を歩いて約十分後、色んなポケモンが描いてある壁画の所に着いた。色んなポケモンが描かれているわね。

「不思議な絵だね……」

思わずエイト君がそう言葉をこぼした。私もそう思う。なぜかわからないけど、見ていると不思議な気分になった。

「スタンプは？」

そう、こちら辺にスタンプがあるはず……あつあれかな？

「スタンプ見つけ！」

リュウタがそう言った刹那、スタンプ目掛けて走り出した。もう！一人で抜け駆けしてる！

「待ってよ！」

私は急いでリュウタを追いかけた。

「私も〜！」

リナちゃんもスタンプに向かって走り出した。

「みんな元気だな……」

エイト君も少し遅れてスタンプに向かって走り出した。

「よっしゃ！スタンプゲット！」

「ハア……ハア……リュウタ速い……」

私はなんとかリュウタに追いついた。それにしてもリュウタ足速い……もうクタクタだよ……

「とりあえずスタンプは見つけたし……次はどうするよ？」

どっとうするって……リナちゃんとエイト君を待つて……それから少し休みたいよ。

「スタンプあった？」

遅れてエイト君とリナちゃんが来た。

「あつたよ〜！」

リナちゃんが早速スタンプを台紙に押していた。

「早く次に行こうぜ〜！」

リュウタはまだまだ元気みたいだった。ちょっと待ってよ……私少し休みたい……

「少し休もうよ……」

「ええ〜？一番になれないじゃん！」

「そうだよ〜」

なんでそんなに元気なの……？リュウタとリナちゃんの体力についていけないよ……

「結構ハイペースで来てるから休んでも大丈夫だよ」

エイト君が私に賛成してくれた。正直ありがたいよ。

「そうだな〜正直少し疲れたし、休むか〜」

そう言いながらリュウタはその場に座った。ふう……エイト君に感謝ね。

「所でエイト、なんで旅しているんだ〜？」

リュウタがエイト君に質問した。そういえば聞いていなかったわね。

「ジム巡りしているんだよ。そっちは？」

「オレ達もだぜ。まあバッジは持ってないけどな」

リュウタは苦笑しながら言った。そういえばキキョウシティのジムリーダーってどんな人なのかしら？飛行タイプのポケモン使いとしか聞いていないよ。

「見て見て！私達は持つてるよ！」

リナちゃんは私達にバッジを見せてくれた。これがそうなんだ……いいなあ。

「キキョウシティのハヤトさんは強かったよ。二人共頑張ってたね」

「おうよ！絶対勝つ！勝ったら勝ーつー！」

リュウタ、過ごし意気込みね……私も頑張らなくちゃ！

「そろそろ行くか？」

リュウタが切り出した。結構休んだからだいぶ疲れが取れたし……そろそろ良いかな？

「そうね。次は……」

私は遺跡の地図を見た。次は……大広間を出て、個室にある石版みたいね。

「大広間を出て個室の石版みたい」

「じゃあそこにレッツゴー！」

「っしやー！」

リュウタとリナちゃんは意気揚々と出発した。休憩したから体力が有り余ってるのかしら。

「到着！」

私達は大広間を出て、いくつかある個室の遺跡に入った。そこには古代のポケモンが描かれていて、所々にさっき見たアンノーン文字があった。

「ここも不思議……」

「ねえレナちゃん！一緒に石版見に行こうよ！」

「うんっ！」

「じゃあ僕達は先にスタンプを押しに行くよ」

リュウタとエイト君は近くにあるスタンプを押しに行った。



「これなんのポケモンかな？」

「ポケモン図鑑ならどうか？」

試しに私はポケモン図鑑を石版に向けたけど、なんの反応もなかった。おかしいよ。駄目ならエラーって出るはずなのに……

「レナちゃん、電源入ってないよ？」

「……あつ！」

図鑑を見ると、確かに電源が入っていなかった。これじゃあ反応しないよ。

「レナちゃんってドジ？」

リナちゃんの言葉は私の心に突き刺さった。

「ドジって言わないでよー！」

私は涙目になりながらリナちゃんの頭をポカポカ叩いた。

「ゴメンゴメン！悪気はなかったのー！」

リナちゃんは笑いながら謝った。もう！謝る気ないでしょ！

「なんで笑ってるのよー！」

私達がじゃれてると、事件が起こった。私とリナちゃんは石版にぶつかり、バラバラにしてしまった。うそっ……ここはパズルだって

のは聞いていたけど……どうしよう!？

「どうしよう……」

私達が悩んでいると、リュウタとエイト君がスタンプを押して戻ってきた。

「どうしたの？」

エイト君が私達を心配してきた。私は二人にいきさつを話した。

「まずいんじゃない？とりあえず受付にいた人の所に行こうぜ」

「そう……だね」

私は力なくそう答えた。やっぱり怒られるかなあ……

「それにしてもよくレナだけであそこまでドジするか？」

「……リナもかなりドジなんだよ」

「……やっぱりな」

なんか二人でこそこそ話していたけど、私とリナちゃんの耳には入ってこなかった。

私達が外にでると、外は騒がしかった。ツアーで賑やかだったから騒がしかったと言ったら騒がしかったけど、それとは違う感じだった。

「君達！早く避難するんだ！」

係員の人が私達のもとに駆け寄った。すごい焦ってるみたい。それに避難って？

「避難？なにかあったんですか？」

「大広間が大変なことになってるんだ！君達も早く……」

大広間？一体なにがあったのかしら……とにかく私達がやることは一つね！

「よっし！行くぜ！」

「うん！」

リュウタの号令を合図に、私達は大広間に行った。係員の人が止めていたが、私達は強引に行くことにした。

「なんだこりゃ……」

リュウタの反応も妥当だと思う。私もそう思ったんだもん。なぜなら、大広間に入ると、相当な数のらアンノーン文字にそっくりな生き物が飛んでいたから。

「これは……あのアンノーン文字の？」

私はポケモン図鑑を目の前の生き物に向けた。名前はアンノーンっていうのね。それにしても色んな形があるわね。

「見て！」

リナちゃんが叫ぶと同時に、アンノーン達は、色んな色のエネルギー弾、目覚めるパワーを放ってきた。

レナ編 第九話 事件発生（後書き）

レナ

「どうなったの!？」

さあ？それは次回さ

リュウタ

「ま、こんなところで主人公は死なないよな」

それを言っちゃあおしまいさ（汗）

レナ編 第十話 アンノーン(前書き)

第十話完成！

レナ

「私達どうなるのかな？」

どうなるやら(笑)

リュウタ

「(笑) ってな……」

では第十話をどうぞ！

## レナ編 第十話 アンノーン

私達に向かってきた目覚めるパワーは地面で爆発し、爆発音とともに光が発生した。そのために今はなにも見えない。

「ま……眩しい!!」

リナちゃんが叫んでいる。確かに目を開けているのは辛いよ……でもみんな大丈夫かな？私は心配だったけど、今騒いでも焦ってしまっただけなので、光が収まるのをまつた。

あ、視界が開けてきた。私は急いで周りを確認した。

「レナ、エイト、リナ、大丈夫か!!」

リュウタが叫んだ。リュウタも心配していたのね。

「なんとかね……」

「全っ然へーきだよ!」

私とリナちゃんがそれに応答する。リナちゃんも怪我はないみたいね。

「僕も大丈夫だよ。…でも、あのアンノーンたち、どうしようか……」

エイト君の言う通りね。一体や二体ならなんとかなるかもしれないけど、相手の数が多すぎるよ……

「うん……。」

リュウタは考え込んでしまった。私も考えてるけど、良い手が思い付かないよ。

そうこうしている間にも、アンノーンたちは再び攻撃をしかけてきた。さっきと同じ目覚めるパワーだった。

「わっ！こっちに来たよ！」

私は思わずビククリした。いきなりくれば誰でもビククリするよ！

「……さあ、エイトはどうするのか……！」

リナちゃんはナレーションっぽいことをいつている。……リナちゃん、状況を考えてよ……それとも余裕の表れなのかなあ？

そう考えているうちに、アンノーン達の目覚めるパワーで攻撃してきた。どっとうしよう！？

「ブイゼル、水鉄砲！」

私が焦ってあたふたしていると、リュウタがブイゼルを出して私を目覚めるパワーから助けてくれた。ふう……リュウタとブイゼルに感謝ね。

「いけ、ヒノアラシ！！ブイゼルを援護、火の粉だ！」

「ミスゴロウ、お願い！ブイゼルと一緒に水鉄砲！！」

「エイバム、スピードスター！！」



エイト君はボールから一匹のポケモンを出した。クリーム色と、深緑色を基準とした色に、背中に炎が燃えていた。ヒノアラシっていうのね。私とリナちゃんも続いてポケモンを出した。私はエイパム、リナちゃんは、ミスゴロウと呼ばれるポケモンを出した。水色の体に、頭にはひれがあった。

みんなで一斉に攻撃したけど、アンノーン達の攻撃の威力が高いせいか、四体での一斉攻撃でも、すべてを防ぐことができず、防げなかった分の目覚めるパワーがそれぞれのポケモンを襲った。

「エイパム、大丈夫!？」

私はエイパムのほうにかけた。

『エイパツ……』

エイパムはつらそうに鳴いた。さっきのが、かなりのダメージになっちゃったみたい……

「ブイゼル、まだいけるな!！」

「ミスゴロウ、まだまだいくわよ!！」

『ブイブーイ!』

『ガヤガヤ!!!』

ブイゼルと、ミスゴロウはまだまだ平気のようだ。

「なんで私のエイラムだけつらそうにしてるんだろう…」

私は周りを見ると、ヒノアラシもブイゼルもミズゴロウもまだ元気だった。もしかして何かの差別？そんなことないよね……？その時エイト君が何かに気がついたみたいな顔をした。

「レナちゃんは目覚めるパワーがどんな技かしっている？」

私はエイト君に聞かれた。確か……ポケモンによって威力とかタイプが変わるのよね……？

「……うーん確か、技を使うポケモンによってタイプが変わるんだっ  
たっけ」

「大体そういうことかな。それじゃあ、さっきの目覚めるパワーを  
思い出してみて。何色だった？」

「オレンジだよ……！」

私の代わりにリナちゃんが答えてくれた。実は焦っていてよく見て  
いなかったのよね。

「さっき僕たちのポケモンが受けたのは、オレンジ色の目覚めるパ  
ワーだったんだ。つまり、そのタイプが『格闘』だったために、エ  
イラムだけがダメージを受けたってことさ。……あくまでも予想  
だけだね。」

「……確かにつじつまが合うよな！エイト頭いいな」

リユウタが感心している。正直私もエイト君の推理に感心してしま

っていた。

「それはいいから、もう一度攻撃するよ！ミズゴロウ、泥かけ！」

『ギャツ！』

「そうだな！ブイゼル、もう一度水鉄砲だ！」

『ブイッ！』

二人の攻撃はアンノーンたちに避けられてしまった。なかなか素早いね。

「なんであたんないの！」

リナちゃんは悔しがっていた。あんなに数がいるなら当たっても良いんだけどね。

「くっそー……ん??」

リュウタも悔しがっていたが、なにかに気づいた。なにかあるのかな？

「おい、アレみてみるよ……」

リュウタが指差す方向には何匹かのアンノーンが規則よくならんでいた。

左から、『K・A・B・U・T・O』、『O・M・U・N・A・I・T・O』

一体なんなのかしら……?でも、そんなのんきに考えている状況じ

やなかった。突然アンノーン達が光だしたの。

「眩しいッ!!」

私はそう叫んだ。さすがに一日に二回は辛いよ。

「視界が開けるのを待つんだ!!」

確かに今むやみに動くのは危ないよね。私はエイト君の言う通り、その場にじっとしていた。

数秒後、視界がもとに戻ってきた。ふう、目が少し変だよ。

『!!!!』

私たちは啞然としてしまった。私達の前には、アンノーンの他に、二匹も見なかったことのないポケモンがいた。

レナ編 第十話 アンノーン（後書き）

リュウタ

「なんだあれは!？」

アンノーンのカ

レナ

「アンノーンって凄いね……」

レナ編 第十一話 VS 古代のポケモン！（前書き）

第十一話完成！

リュウタ

「調子良いな」

すごくる調子が良いのだ！

では第十一話をどうぞ！

## レナ編 第十一話 VS 古代のポケモン！

「冗談じゃないぜー！」

リュウタは思わずそう言った。それもそのはず、私達の前には、アンノーンの他に二匹ポケモンがいたから。私はとっさにポケモン図鑑を向けた。堅そうな甲羅がある方がカブト、貝みたいのを背負っている方がオムナイトっていうのね。

「来るよ！」

リナちゃんが叫んだ。私達は前を見ると、オムナイトとカブトが、大量の泡を放ってきた。あれはバブル光線ね。ってのんきにしている場合じゃないよ！

「エイパム！スピードスターで迎撃して！」

「ブイゼルはソニックブームで援護だ！」

エイパムとブイゼルの攻撃で、なんとかバブル光線を防ぐことに成功した。でも事態はまだ良くなっていなかった。アンノーン達が、攻撃が終わったエイパムとブイゼルに目覚めるパワーで攻撃してきた。これは避けきれないよ！

「ヒノアラシ！火の粉だ！」

「ミズゴロウ！水鉄砲！」

『ヒノー！』

『ガヤー！』

ヒノアラシとミズゴロウの攻撃で、なんとか目覚めるパワーを受けずに済んだ。エイト君とリナちゃんに感謝ね。

「この前じゃ防戦一方だ。オレがアンノーンを引き付けるから、その間にあの二匹を！」

「私もアンノーンと戦うよ！」

リユウタとリナちゃんが申し出た。確かに固まっていたら格好の的よね。

「じゃあ私とエイト君でカブト達ね」

「わかった！ヒノアラシ！カブトに火の粉だ！」

「エイパムはオムナイトにスピードスター！」

『ヒノー！』

『ウキッ！』

エイパムとヒノアラシの攻撃は、カブト達に防がれず直撃したけど、ダメージはほとんどないみたい。そういえばさっき図鑑で調べた時、二匹のタイプは水と岩だった。ノーマルタイプのエイパムと炎タイプのヒノアラシはかなり部が悪いわね……



「……！？レナちゃん！危ない！」

「えっ？キャアア！」

アンノーン達が私に向かって目覚めるパワーを放ってきた。私は突然の事で足がすくんでしまった。

「ミスゴロウ！水鉄砲でレナちゃんを守って！」

『ガヤガヤー！』

私に迫って来るエネルギー弾に、ミスゴロウが水鉄砲で防ごうとしてくれた。でもそのうち押されてきて、最後には水鉄砲が打ち破られてしまった。ここまでなの……？

「レナーツ……！」

リュウタが私のもとに走ってきた。そして私に飛びついてきた。そのおかげでエネルギー弾が私に当たることはなかった。

「レナ！大丈夫か！」

「うっうん。大丈夫」

「くそが！あいつら調子に乗りやがって！」

リュウタはかなり熱くなってきた。このままじゃやられちゃうよ！そうこうしている間に、またアンノーン達が目覚めるパワーで攻撃してきた。

「もう容赦しねえ！ブイゼル！電光石火で回避してからアクアジェットだ！！」

『ブイブイ！』

「一人で良いとこ取らないでよね！ミスゴロウ！ミスゴロウでブイゼルの援護をして！」

『ギャツ！』

ブイゼルは目覚めるパワーを簡単にかわした後、アクアジェットでアンノーン達に突撃した。アンノーン達も反撃で目覚めるパワーを放とうとしていたけど、ミスゴロウの水鉄砲で阻まれた。ブイゼルの攻撃は直撃し、アンノーン達は倒れた。

「っしやー！」

「やったね」

二人は喜んでいた。でもまだアンノーンは沢山いる。気を抜いてる場合じゃないね。私はさっきのカブト達の方を向いた。私は私に出来ることをしないとね！

「レナちゃん！大丈夫！？」

「うん。心配かけてごめんね」

エイト君が私の心配をしてくれた。

『ウキー』

エイパムが私に寄り添って鳴いた。エイパムにも心配かけちゃったね。

「私は大丈夫よ」

私は頭を撫でながら言った。さあ、反撃開始ね！

「ヒノアラシ！煙幕だ！」

『ヒノー！』

ヒノアラシは黒い煙幕を出し、カブトとオムナイトの周りを包み込んだ。これでどうするのかしら？

「よし！ヒノアラシ！煙幕から離れるんだ！火の粉！」

ヒノアラシは煙幕から少し離れ、火の粉を放った。すると、火の粉が煙幕にぶつかり、火が煙幕に着火して爆発が起こった。

「うまくいったね」

「凄い……」

『ウキ……』

エイパムも驚いていた。エイト君って頭脳派なのかしら？

「えっ？」

煙りが晴れると、私は驚いてしまった。カブトとオムナイトには傷一つついていなかった。あのポケモンはそんなに頑丈なの！？

「どういうことだ……レナちゃん、少し考えたいからカブト達の相手をお願いしてもいいかな？」

なにか考えがあるのかしら……？とにかくやるしかないわね。

「任せて！ヒメグマ！お願い！」

『ヒメー』

私はヒメグマをボールから出した。さすがにエイパムだけはキツイだろうからね。一方リユウタ達はなかなか攻めきれていなかった。アンノーンの数が多すぎるみたいね。

「ブイゼル！水鉄砲！」

「ミズゴロウは泥かけ！」

『ブーイ！』

『ギャツ！』

二匹の攻撃はアンノーン達にかわされてしまった。さすがに空中の敵は辛いね。

「だーっ！めんどくせー！」

「どうすればいいのよ！？」

……なんかかなりマズイ状況ね……焦ったら勝てないよ……

「……！これでいくぞ！ブイゼル！その場に待機だ！」

「えっ！？」

『ブイツ！？』

リナちゃんだけじゃなくブイゼルも驚いていた。一体どうするのか？その間にアンノーン達が目覚めるパワーで攻撃してきた。

「あの量は無理だ！リナ、何発か打ち消してくれ！」

「任せて！ミスゴロウ、水鉄砲！」

『ガヤー！』

ミスゴロウは水鉄砲で何発か目覚めるパワーを打ち消したけど、まだ残っていた。このままだとブイゼルが！

「今だブイゼル！しっぱで打ち返せ！」

『ブッブイ！』

まさかのリュウタの指示にブイゼルも驚いていたけど、とにかくリュウタの指示通りしっぱで目覚めるパワーに対抗し、なんと跳ね返した。リュウタってなんでもありね……

「うまくいったぜ！」

「リュウタ凄ーい」

確かに凄いけど、ブイゼルにも少しダメージがあるみたい。でも今の攻撃でアンノーンを何体が倒した。多分これならリュウタ達は大丈夫ね。私も出来ることをしないと。私に出来ることはエイト君の援護。

「いくよエイパム、ヒメグマ！」

『ウキー！』

『ヒメー！』

二匹は元気よく答えた。さあ頑張っていくよ！

「僕もやるよ」

エイト君がそう言った。考え事があるって言ってたけど……なにかわかったのかな？

「なにかわかったの？」

「まだ確信はないけど、バトルの中で確信に変えるよ」

なにかあるみたいね。私も頑張らないと……

「エイパムはスピードスター！ヒメグマは……」

『ヒメー！』

ヒメグマは私の指示を聞く前にオムナイトに、自分の爪を硬質化して攻撃した。あれは……メタルクロー？ヒメグマってメタルクローが使えるんだ！

「ヒメグマ凄いいね！ヒノアラシ、僕達も負けていられないよ！」

『ヒノー！』

「よし！ヒノアラシ、あそこのアンノーン達に火の粉だ！」

えっ！？さっきから綺麗にならんでいるアンノーン？そういえばさっきから光っているし、攻撃もしてこない……まさか。

「まさかあのアンノーン達がカブト達を出現さてるの？」

「おそらくね」

なるほどね。でもヒノアラシの火の粉は、カブトのバブル光線で消されてしまった。やっぱりそう簡単にはいかないね。

「私がかブトとオムナイトを引き付けるから、エイト君はアンノーン達を！」

「任せて！」

これならうまくいくはず……きっと大丈夫！

「エイパムはカブトに引っかけ！ヒメグマはオムナイトにメタルクロー！」

『ウキッ!』

『ヒメー!』

二匹はカブト達に攻撃した。エイパムの攻撃はあまり効果がないけど、ヒメグマのメタルクローなら効果はあるわね!

「今だ! ヒノアラシ、火の粉!」

『ヒノヒノー!』

ヒノアラシは火の粉をアンノーン達に放った。それをカブト達は阻止しようとした。そうはさせないよ!

「エイパム! スピードスター! ヒメグマはメタルクロー!」

エイパムとヒメグマが、阻止しようとしていたカブト達に攻撃した。邪魔しようたつてそうはさせないんだから!

「よし! 行っけー!」

エイト君がそう叫んだ。火の粉はアンノーン達に命中し、並んでいたアンノーン達はバラバラになった。それと同時にカブト達も光となって消えた。

「やっぱりね。あのアンノーン達が綺麗にならんでいたから気になったんだ」

「なるほどね」



これで一安心と言いたいけど、まだ安心はできない。まだリュウタとリナちゃんは戦っているしね。

「そっちは終わったか？」

リュウタが私達に話し掛けてきた。私がリュウタ達を確認すると、まだアンノーンは沢山いた。かなり苦戦しているみたいね……

「でもなんでこんなに沢山いるの？」

リナちゃんがそう呟いた。確におかしい。いきなり表れるし、この数。なにかあるよね。

「……………まさか」

エイト君はなにかに気づいたみたい。何に気づいたのかな？

「さっきレナちゃんとリナがバラバラにしまった石版……あれのせいかもしれない……」

うつ……………エイト君の言葉でさっきの失敗を思い出しちゃった……………でもそのせいかも……………なら原因は私達……………

「私達のせい！？」

リナちゃんも驚きを隠せなかった。私だってビックリだよ……………

「まだ可能性だし、リナ達のせいじゃないよ」

エイト君は私とリナちゃんに優しく言った。正直エイト君の心遣いは有り難かった。

「ならパズルを直せばいいんだな〜！」

「多分ね」

「ならオレはこいつらを足止めするぜ〜！頭を使うのは苦手だしな〜！」

「私も残るよ！」

リユウタとリナちゃんが残ると言い出した。二人ならきつと大丈夫ね。

「なら僕とレナちゃんがさっきの部屋に行くよ」

「わかったわ。エイト君、行こう！」

私達はさっきの部屋へと急いだ。なんとしてでも治さなくちゃ！

レナ編 第十一話 VS 古代のポケモン！（後書き）

レナ

「なんとか倒せたね」

お疲れ

リュウタ

「まだ終わりじゃないな」

まだ謎があるからね

レナ編 第十二話 石版の謎（前書き）

第十二話完成〜

レナ

「今回はどうなるの？」

まあ、それは見てのお楽しみさ

では第十二話をどうぞ〜

## レナ編 第十二話 石版の謎

私とエイト君は、リュウタとリナちゃんと別れ、さっきの石版のあった部屋に向かって走っていた。

「エイトくん、場所どこだったっけ？」

私は念のために、エイト君に石版の部屋の位置を確認した。ウツギ博士の時も聞き逃して困っちゃってから、なんでもしっかり確認するようになったみたい。

「ここから左に曲がったらすぐに着くはずだよ。」

「そっか、じゃあはやくいこう!!」

私はエイト君にそう言いながら、走るスピードを速めた。

数分後、私たちは石板の部屋に到着した。石板はバラバラになっていて、もとの形がよくわからなくなっている。あの時少しでも覚えておくべきだったわね……でも今は悔やんでる場合じゃないわね。

「……さっき私たちがばらまいたままになってるね。」

「そうだね。……いろいろ考えてないではやいところ片付けよう。」

「うん！」

こうして私たちは、石板をもとに戻す作業に取りかかった。

30分後、私達は途方に暮れていた。全然パズルが解けないの！

「……全ッ然分かんないよ！どうしよう……」

私は思わずそう言ってしまった。このパズルを前に完成させた人は、正直凄いと思う。あのエイト君もあんまりはかどっていないみたい

……

「とりあえず分かりやすい部品からはめていこう。」

エイト君はそう提案してくれた。

「……分かりやすいところって例えばどこ？」

私はこうというのが苦手なので、エイト君に確認を取った。

「端のほう分かりやすいと思うよ。」

成る程ね。確かに端っこは解きやすいわね。

「わかった！頑張ってみる！」

私はそう言って意気込んだ。はやく完成させないと……

さらに数分後。石板パズルの枠の部分はすでに埋まっていたが、もとに戻すまでに、まだ時間がかかりそう。はやくしないと、リュウタとリナちゃんが……

「……ねえ、リュウタたち大丈夫かなあ？」

私は二人が心配で、思わずエイト君に呟いた。

「……大丈夫だと思うよ。いや、あの二人のコンビなら何とかなるさ。」

エイト君はそう優しく言ってくれた。

「そうだよね！あつ私たちははやくパズルをもとに戻さなくっちゃ

「！」

「そうだね。リュウタたちの負担を少しでも減らさないよ。」

エイト君は、そう言い終わると、じつと石版を見はじめた。すると、なにか発見をした子供のような顔をした。なにかわかったのかな？

「レナちゃん、この石板パズルを解くヒントが分かったよ。」

「えっホント！？」

私は思わず驚いてしまった。私にはなにもわからないんだけどね。

「これをよくみてみてよ」

「うん、分かった！」

私は、エイト君に差し出された石版のかけらを見せて貰った。あれ？なにか文字みたいなものを書いてあるよ？

「あっ何かかいてあるね」

私はエイト君が言いたいことが、少しずつわかってきた。

「そう、この石板にはアンノーン文字が刻まれているんだ。だから、文字をたどっていけばもとに戻せる可能性があるよ。」

「へえー……エイト君ってすごいんだね。そうとわかったなら試さないよ！やってみようよ！」



私は思わずそう言ってしまった。いつも軽いリュウタを見ているから、エイト君みたいな頭脳派は凄いと思った。

「分かった！まずは文字があるものとなないものに分けよう。」

「ええ！！」

私達はまず文字の有無で石板を分類した。それから数分後、なんとか文字を解読できるように並べることに成功した。

「ここまできたらあとは大丈夫ね！」

「それじゃあ残りのパーツをはめ込んでいこう！」

「おー！」

私達は、最後の仕上げに取り掛かった。

「あれ？全然はまらないよ」

「このパーツはここでいいのか？」

私達はいつこうに進めることができず、だんだん不安な気持ちになってきた。残りの5つのパーツをいれるのには予想以上の時間がかかった。

そして、私達はなんとか石版をもとに戻すことに成功した。

「やったあ！！もとに戻ったよ！」

「ハアーツ何とかなってよかったよ。一時はどうなるかと思った。」

エイト君が思わずそういった。それよりはやくリュウタたちのところに急いでがないと！

「レナちゃん、リュウタたちのところへいこう！」

「ええ！もちろんそのつもりよ！」

私たちはリュウタとリナのところへ急いで向かった。二人共、お願いだから無事でいて……！

ちなみに石版にはこんなことが書かれていた。

『わたしたち いちぞく ことば ここに きざむ』

と書かれていたが、私達には意味がわからなかった。それに、この言葉の真の意味を知る者は、誰一人としていないだろう。

レナ編 第十二話 石版の謎（後書き）

レナ

「直ってよかった」

次回はリュウタ視点で話しを進めていきます

リュウタ

「まっかせろっ！」

……………（汗）

レナ編 第十三話 激戦（前書き）

第十三話完成！

リュウタ

「今回はオレ視点だぜ！」

その通り、今回はレナ達が石版を直しに行った直後から始まります  
では第十三話をどうぞ！

## レナ編 第十三話 激戦

オレとリナは、大量のアンノーン達とバトルをしていた。正直かなり苦戦している。一体一体は正直弱いんだけどよ、数が多すぎるぜ！あいつらにはフェアプレイってのはないのか？

「またくるよ！」

おっと！くだらないことを考えてる場合じゃねえな！こいつらは絶対に止めるってレナと約束したからな！

「ブイゼル！かわせ！」

『ブイ！』

ブイゼルは、右にステップし、アンノーン達の目覚めるパワーを回避した。そんな単調な攻撃は無駄だぜ！

「うっし！」

「リュウタ、このままだと防戦一方だよ。どうしよう？」

確かにこのままだとまずいよな。オレにまだポケモンがいれば良かったな……。まあ今更だし、オレはブイゼルを信じてるしな！

「リナ、ちょっと考えがあるんだ。ミズゴロウが巻き添いにならないようにしてくれ」

「わかった！」

リナはミスゴロウに少し下がらせた。これなら大丈夫だな。うつし！作戦開始だぜ！

「来た！」

リナはオレに合図を送ってきた。チャ～ンス！

「ブイゼル、かわせ！」

『ブイ！』

ブイゼルは、さっきと同じようにかわした。だけどそれで終わりじやね～んだぜ～！

「ブイゼル！回転しながらジャンプ！」

『ブ……？ブイ！』

どうやらブイゼルには、オレのやりたい事がわかったみたいだな！さすがオレのパートナーだな！

ブイゼルはオレの指示通り、回転しながらジャンプした。今だ！

「なにをするの？」

「見てなって！ブイゼル！そのまま水鉄砲！」

ブイゼルは、回転しながら水鉄砲を放った。回転しながらだから、いろんな方向に水鉄砲がいった。

「なるほどー！これならあちこちにいっぱいいるアンノーンに攻撃できるねー！」

「そゆこと」

そう、回転することで、いろんな方向にいるアンノーンに攻撃することに成功した。ブイゼルもよくオレの指示に答えてくれたな！

「ナイスだぜー！」

『ブイツー！』

オレの言葉に、ブイゼルは片手を上げて答えてくれた。今の攻撃で、だいぶアンノーンの数が減ったな！

「私だって！ミスゴロウ！水鉄砲！」

『ガヤー！』

ミスゴロウは、ブイゼルに負けじと水鉄砲を放った。リナもミスゴロウもやっぱやるなー！

「ブイゼル！アクア……」

ブイゼルにアクアジェットを指示しようとした刹那、アンノーン達が、一斉に目覚めるパワーで攻撃してきた。さすがにあの数はキツインじゃねーか？

「リユウタ！あれは無理だよ！」



だよね……ここは素直に回避した方が良いな。だがオレの楽観的な考えは消された。数匹のアンノーン達が光り出し、その光りは、一匹のアンノーンに向けていた。刹那、そのアンノーンは、特大の目覚めるパワーを放ってきた。

「ハアアアア!?!」

思わずオレはそう言ってしまった。あんなの企画外だったの! 大きさはブイゼルやミスゴロウの五倍ぐらいの大きさがあった。

「ミ、ミスゴロウ! 水鉄砲で迎撃して!」

『ガ、ガヤガヤ!』

さすがのリナもミスゴロウも驚いたみたいだな。まあ驚くなっとう方が無理だぜ! オレもなんとかしねえと!

「ブイゼル! 最大パワーで水鉄砲!」

『ブイ!』

ブイゼルは、今までで一番協力的な水鉄砲で反撃した。これでなんとか食い止めてくれよ!

『ブイ……』

『ガヤ!……』

やべえ! 二匹とも辛そうだ! このままだと破られる!

「ブイゼル！中断してかわすんだ！」

「ミズゴロウもかわして！」

二匹とも水鉄砲を中断し、目覚めるパワーをかわした。だが、直撃しなかったとはいえ、かなりでかいダメージを受けちまったみたいだ。これは……俗に言うピンチってやつか？！？

「ブイゼル！大丈夫か！？」

「ミズゴロウ！しっかりして！」

『ブイ……』

『ガヤ……』

二匹とも、なんとか立ち上がったけど、やっぱりダメージはでかいみたいだ。くそが！一体どうすりや良いんだ！

「このままだとやべえぞ！」

「あきらめちゃダメだよ！必ずエイト達がなんとかしてくれるよ！」

……そうだ。オレ達は、レナとエイトと約束したんだ。あいつらは必ず石版を直してくる。オレ達は、それまでこいつらをなんとかする。絶対にだ！！

「気合いだブイゼル！気合いで立て！」

『ブ……イ……』

「頑張つて！ミスゴロウ！」

『ガ……ヤー！』

二匹ともなんとか立ち上がった。オレ達はあいつらを信じている！オレ達はオレ達に出来ることをするんだ！

「ブイゼル！いくぜ！」

『ブイブイー！』

ん？ブイゼルは大きく息を吸い込んだ。いったいなにをするんだ？

『ブイー！ー！』

ブイゼルは、凍てつく光線をアンノーン達に放った。あれは冷凍ビームか！？

「ブイゼル凄い！ミスゴロウ！私達も！水鉄砲！」

『ガヤガヤー！』

ミスゴロウは、今までで一番大きい水鉄砲を放った。特性の激流か！激流は、ピンチになると水タイプの威力が上がる。これは心強いぜ！

「よっしゃー！」

「やったね」

今の一撃で、アンノーンの大半は倒した。これで終わりにしてやるぜ！

「ブイゼル！水……！？」

オレはブイゼルに水鉄砲を指示しようとした刹那、アンノーン達が光だし、綺麗な並んだ。それは『Y・U・R・E・I・D・O・R・U』と並んでいた。……まさか！？

「……嘘っ」

「……冗談だろ？」

オレ達前には、さつきレナとエイトが戦っていたカブト達のように、一匹のポケモンが現れた、図鑑を向けると、あいつはユレイドルというらしいな。とにかく……これは絶体絶命か？

「あきらめるかよ！ブイゼル！冷凍ビーム！」

『ブイー！……ブイ？』

あれっ？冷凍ビームが出ねえぞ？どういうことだ？

「ミズゴロウ！水鉄砲！」

『ガヤー！』

リナはミズゴロウに水鉄砲を指示した。とにかくなんとかしねえと！

「ブイゼル！アクアジェット！」

『ブーイ！』

二匹の技は、ユレイドルに決まったけど、まるでダメージはない。それにブイゼルもミスゴロウも限界だ。くそ……ここで終わりののか！？

「どうすりゃ良いんだよ……」

「エイト……はやく……」

リナはそう呟いていた。レナ……くそっ……

『ブイ！？』

ブイゼルはなにかに驚いていた。ユレイドルがなにか力を溜め始めていた。これで……終わりののか？

「エイト……え？リユウタ！」

「なんだ……はあ？」

オレは気の抜けるような声を出してしまった。アンノーン達と、ユレイドルが急に光り出した。刹那、ユレイドルは光となって消え、アンノーン達は、壁に吸い込まれ、アンノーン文字に戻った。これって……

「レナ……間に合ったんだな……」

「エイト……私、頑張ったよ……」

オレ達はその場に座り込んだ。ブイゼルもミズゴロウも頑張ったな……

「リュウター！リナー！」

ん？オレとリナが振り返ると、そこには、レナとエイトが走ってきた。やっぱり間に合ったんだな。

「リュウター！？こんなにボロボロになって！また無茶したんでしょ！？」

「痛い痛い！」

レナはオレの胸倉を掴んでブンブン振った。痛いって……

「もしものがあつたらどうするつもり！？」

「悪かったって！放せよ！」

「もう知らない！」

レナは頬を膨らみしながらそっぽ向いちまった。心配かけちまったみてーだな。

「エイト！遅いよ！」

リナはエイトをポカポカ叩いていた。オレからはリナの目に涙が溜まっているように見えるけど……気のせいかな？

「ごめんね、遅くなって」

エイトは、リナに優しい笑顔で言った。向こうも大丈夫みたいだな。

「とにかく外にしようよ」

「だな」

オレ達は、ポケモンをボールに戻し、激戦を繰り広げた大広間を後にした。

レナ編 第十三話 激戦（後書き）

リュウタ

「疲れたー！」

ブイゼル

『ブイ……』

レナ

「無茶しないでよ！」

リュウタ

「悪かったって」

今回のバトル、正直出来悪いです（泣）

リュウタ

「精進精進」

だね



レナ編 第十四話 激戦を終えて（前書き）

第十四話完成！

リュウタ

「もう少し休ませてくれ」

うるさい

では第十四話をどうぞ！

## レナ編 第十四話 激戦を終えて

私達は、アンノーン達と古代のポケモンとの激戦を終えた。まさかいきなり現れて襲ってくるとはね……。今だに信じることができない。まあ……。私達が悪いんだけど……。そして、私たちは今大広間から出たところ。

「そういえば、スタンプラリーは中止になっちゃったのかな……。」

リナちゃんがそういった。アンノーンたちの暴走でそれどころではなかったからね……。中止になっても仕方がないわよね。でも……。なんか大切なことを忘れてる気がするのよね……。

「あ ツー！」

私が少し考えていると、リュウタが突然叫びだした。いきなり大声出さないで貰いたいよ……。

「リュウタ、どうしたの？」

私は、少し驚きを隠せなかったけど、とりあえずリュウタに聞いた。いったいなにに気づいたの？

「スタンプラリーで一番だったらプレゼントもらえたのよー！」

あっ……！

確かにスタンプラリーで一番だとプレゼントがもらえた。けど、中止になってしまった以上だれもが受けとることが出来ない。せつかく頑張ったのに……。

「スタンプリーのプレゼントがもらえないなんてみんなが認めても、わたしは絶対認めないよ!!」

リナちゃんが怒り?をあらわにした。私から見た感じ、プレゼント系には弱そうだから、仕方がないのかな?

「プレゼント欲しかったねちょっと残念だなあ……」

私は思わずそう呟いていた。みんなもきつとガッカリしているんだろうな……

私の言葉を気に、四人はだんまりしてしまった。ううっ……余計なこと言っちゃったかな……

「おい、君たち!!」

それから数分後、私たちの沈黙を破ったのはツアーの係員のお兄さんだった。

……どうしたのかしら?少し急いでいるようにも見えた。

他の三人もけげんそうな顔をしていた。

「君たちに渡したいものがあるんだ!」

係員のお兄さんは、そういった。確かにお兄さんの手には小さな木箱を持っている。……それにしても、一体何なのかしら?

「ありがとうございます!!!!!!」

場の空気を破ったのは、リナちゃんだった。強引にお兄さんから木箱を受けとっている。やっとリナちゃんが元気になったね。

「なんかよく分かんねーけどいいんじゃない？」

リュウタはエイト君にそういった。とりあえず理由は聞いておいたほうがいいのかしら。

「あの…これは一体どういうことですか？」

エイト君は係員のお兄さんに向かっていった。やっぱりエイト君も気になったのね。

「君たちは石板のポケモンをとめてくれただろう？だから、お礼にツアーの景品をあげようってことになったんだよ」

お兄さんはそう説明した。……そういうことね。でも……アンノーンたちを暴走させたのは私たちなんだよね……そんなことを思っている、リュウタが私をジーツと見ていた。私だって反省してるんだから、そんな目で見ないでよ……

「今すぐ開けてもいいと思うけど、せつかくだからポケモンセンターでゆっくりしながらにしない？」

この申し訳ない気持ちに耐えられ無かった私は、そのように提案した。

ちょうど空も赤くなっていて、お日様も西に傾いてきていた。もうすぐ日が暮れそう。

「そうだね。そろそろ暗くなりそうだから、ポケモンセンターに戻って夜ごはんにしよう。」

エイト君は相づちをうつてくれた。良かった……私達のせいだってわかったらどんな顔をしたら良いかわかんないもの。

「うっし！そうと決まれば一番乗りだ！はやく戻ろっぜ！！」

「あ                      ツわたしが先だよ！！」

リュウタとリナは走り去ってしまった。あんな激戦を繰り広げたのに。本当にあの体力はうらやましいよ。

「エイトくん、私たちもいこう！」

私は二人の姿を見ながら、エイト君に言った。多分エイト君も呆れてると思う。

「急いでいるわけでもないし、僕たちはゆっくり行こうか」

まあ、あの二人のスピードは疲れちゃうもんね……ゆっくり行こう。私はそう思い、

「ええ！」

と答えた。こうして、遺跡探検ツアー……うっん、古代ポケモン大バトルは幕を閉じた。

「ポケモンセンター レストラン」

「うっめー！」

「おいしいー！」

私たちの今回の夜ごはんは、リッチなことにバイキング。……このバイキングにかかる膨大なお金を一人で払えといわれたらひとまりもないわね。もちろんお金は一人一人の自腹になっているから良いんだけどね。

「エイト、エビフライちょうだい！」

リナちゃんが、エイト君にフォークをつきだしながらいった。

「自分でとりにいけばいいだろ！それと、食事のマナーを考える！」

エイト君は行儀の悪いリナちゃんを注意した。リナちゃん……ご飯の頃くらい落ち着こうよ。

「エイトのケチ！」

リナちゃんはすねてしまった。

「…リナちゃん、それはちょっと違うんじゃない？」

私はエイト君をフォローした。多分今のは八つ当たりに近いものだと思うよ……

一方リュウタはというと、さっきからハンバーグばかり食べていた。

「リュウタ、ハンバーグがそんなに好きなのか？」

エイト君は少し驚いたような感じで、リュウタに聞いていた。

「ん？ハンバーグはうめえからな。それに、他のものも食ってるから大丈夫だぜ。」

……あれ？他になにか食べていたかなあ？

「そういえば、リュウタは昨日もハンバーグ食べてたわ」

私は昨日の食事のことをエイト君とリナちゃんに話した。リュウタはそれを聞いて苦笑していた。

「…細かいことは気にすんなよ！！」

細かいことって……まあいいかな。

結局、食事だけで、二時間くらい時間がたってしまった。

「ポケモンセンター 宿泊施設」

「ハアーツ！ここのベッドは最高！！」

リナちゃんは部屋につくなり、ベッドに横たわった。確かに寝心地の良さそうなベッドね。

ちなみに今回はエイト君たちもいるため、四人部屋をとっているのよ。

「そういえば、ツアーでもらったプレゼントまだみてないよな。」

リュウタはリナちゃんをみて、思い出したかのようにいった。私も忘れてたよ。

「あつ、忘れてた！」

リナちゃんは、プレゼントの入った木箱を持ってきた。

「開けるよ！！」

リナちゃんがそういつて木箱を開けると、綺麗な宝石のようなものが四つ入っていた。凄い綺麗……

「うわあ、綺麗！」



「すげえものもらったな」

私とリュウタがそれぞれいった。本当、思わず口に出してしまっぐらい綺麗だった。

「だれがどの種類をもらうのか決めないとだな」

エイト君がそういった刹那、リナちゃんが一番に出た。

「わたしこれがいい!」

リナちゃんはそう言いながら、ぴよんぴよんはねていた。

リナちゃんが持っている石は、クリーム色をしていて、中は黄金にまばゆく光っている。

「……ということらしいけど、大丈夫か？」

「いいぜ!……強いていうなら俺はコイツだな。」

リュウタが選んだものは、エメラルド色をしていて、稲妻の柄が中央にかかれていた。

「エイトくんはどうするの?」

私はエイト君に聞いた。正直私は全部綺麗だからどれでも良いのよね。

「レナちゃんの好きな方を選んでいいよ」

エイト君は少し遠慮がちにいった。なら遠慮なく選ばせてもらおうかな？

「……そっか。じゃあ私はこれにしようかな。」

私がつかんだ石は、アクアブルー、つまり海の色をしていた。その輝きは、サファイアみたいだった。

エイト君がもらうことになった石は、トパーズのような黄色い輝きをしている。そして、炎をおもわせる赤い模様が刻まれている。

「エイトくん、なんでこっちの石を残したのか分かる？」

私はエイト君に聞いた。エイト君はよくわからないといったような表現を浮かべていた。

「……何か意味があったの？」

エイト君はわからなかったみたいで、私に聞き返した。

「私はエイトくんはいつもは大人っぽいけど、炎のように情熱的なところも一緒に持っているんだなーって思うの。この石の雰囲気ピッタリね。」

私は、エイト君にそう説明した。エイト君は、なるほどと言ったような顔になった。

「そっかいわれてみると、リナやリュウタがなぜそれぞれの石にひかれていったのか、分かったような気がするよ。リナはいつもハイテ

ンションで光のように明るいやつだし、リュウタは少し軽いけど、稲妻のように一直線に前をみている。」

確かにエイト君の言っていることは的を射ていると思うね。

「確かにそうだね。エイトくんという通りかも！」

「あつ！……レナちゃんはサファイアの石言葉を知ってる？」

「石言葉……？」

石言葉かあ……私そういうのってあんまり知らないのよね……キョウコなら知ってるかな？

「サファイアには『慈愛』という石言葉があるんだ。分かりやすくいうと、いつくしむこと。つまり、大切にかわいがること」

「『慈愛』かあ……」

「レナちゃんはポケモンのことをそして、みんなのことを大切に思っている。この石は、その象徴なのかもしれないね。」

私は、エイト君に言われたことを考えていた。『慈愛』かあ……そんなこと考えたことなかった。私はただみんなと仲良くしたかっただけなもの。それが『慈愛』なのかな……？

それからしばらくして、私達は眠りについた。私達が寝てしまった頃、外には満天の星空が広がっていた……

レナ編 第十四話 激戦を終えて（後書き）

レナ

「綺麗……」

リュウタ

「不思議な石だな！」

良かったね

そろそろコラボも終わりです

レナ

「寂しいね……」

出会いがあれば別れもあるのさ

リュウタ

「作者に似合わねー言葉だな」（笑）

シクシク……（泣）

## レナ編 第十五話 別れ（前書き）

第十五話完成！

リュウタ

「コラボも終わりか〜」

その通りさ。なんだか淋しいな……

レナ

「暗い雰囲気にならないの」

リュウタ

「なに言ってるんだ〜！オレはいつでも元気だぜ〜」

ある意味うらやましいよ

リュウタ

「褒めんなよ」

とにかく、第十五話をどうぞ！

## レナ編 第十五話 別れ

次の日、私は一番最初に目が覚めた。時計を見ると朝の6時。ちょっと早く目が覚めちゃった。

「どうしようかな……？」

あんまりにも早くに目が覚めてしまい、私はみんなが起きるまですることがなかった。

「うーん……天気もいいし、お散歩にでも行こうかな」

私は、ジャージから普段着に着替えて、部屋を出た。

「静かね……」

ポケモンセンターを出ると、まだ時間が早いからか、ほとんど人は歩いていなかった。

「そうだ、出ておいでエイパム、ヒメグマ」

『ウキ』

『ヒメー』

私はボールからエイパムとヒメグマを出した。まだ二人とも眠そうね。

「天気がいいから一緒にお散歩しよう？」

『ウキー』

『ヒメー』

私の提案に、二人とも嬉しそうに返事した。

「じゃあ行こう」

私達は、朝のキキョウシティをお散歩し始めた。

「気持ちいいね」

『ウキー』

『ヒメー』

二人とも楽しそうに私の後をついて来ていた。なんだか和むわね。

「あつ……あれはなにかしら」

私達の前には、大きな塔がそびえ立っていた。そういえばキキョウ



シティには、マダツボミの塔って呼ばれる塔があるって聞いたことがある。これがそうなのかしら。

「おっきいね」

『ヒメー』

ヒメグマもそう思ったのか、私に相槌を打つように鳴いた。……あれ？エイパムは？

「エイパム？」

『ウキウキー』

私は、エイパムの声を見ると、エイパムはすぐ近くにあった木で木登りして遊んでいた。

「ほらっ。行くよエイパム」

『ウキッ』

エイパムは木から下りてきた。ホントに素直でいい子ね。

「さてと、そろそろみんな起きたかな？」

私は時計を見ると、もう少しで7時。そろそろ戻らないとね。

「そろそろ戻ろうか」

『ウキッ』

『ヒメー』

私達は、お散歩を止め、ポケモンセンターへと戻って行った。

私が戻ると、既にリュウタとリナちゃんは起きていた。

「あつ帰ってきたよ！」

「どこ行つてたんだ？」

「ちよつとお散歩に行つてた」

私が説明すると、リナちゃんが、良いな〜と言っていた。そんな他愛ない会話をしていると、エイト君が起きた。

エイト君は、私達が起きているのを確認したからか、少し慌てながら身支度をしていた。

「さっエイトも準備ができたみたいだから、食堂で朝ごはん食べにいこー！ー！」

身じたくを終えたエイト君をみて、リナちゃんがそうつたあと、私達は部屋をでた。

朝ごはんはご飯に味噌汁に冷やつこという完全なる和食メニューだった。やっぱりキキョウシティはその町並みから和食が適しているのね。そつえばきちんと和食を食べたのは今日が初めてね。

「おかわり!!」

リナちゃんは朝からも食欲がすごい。正直私はあんなに食べられない。リュウタもリナちゃんに負けじと沢山食べている。大食い競争じゃないんだから……

エイト君も、なんだか呆れたような顔をしていた。

「ねえ、エイト君」

「ん？」

リナとリュウタの食べっぷりをみながらぼーっとしていたエイト君に、私は声をかけた。一つお願いがあったから。

「エイトくんたちはもうすぐ次の町に出発するんだつたよね」

「そのつもりだけど、どうしたの？」

「せっかくだから記念にバトルしない？」

そう、アルフの遺跡でのバトルを見ていて、私はエイト君とバトルしたくなっていた。

「いいよ」

エイト君の快く引き受けてくれた。断られたらどうしようかと思っ  
ちゃった。

「ありがとう！リュウタたちが食べ終わったらバトルフィールドに  
行こうね」

「……そうだね。まだ時間がかかりそうだけど」

私とエイト君がバトルの約束をしている間も、リナとリュウタの二  
人はまだ大食いバトルをしていた。

リュウタは結構食べるのは知っているけど、リナちゃんがどれくら  
い食べるか私は知らない。二人とも大丈夫かしら？

けど、私達は、二人を止めるほどの勇気がでず、ただただ眺めるこ  
としか出来なかった。

「エイトくん！さっそくバトルをはじめよう！」

「望むところだよ！」

私とエイト君は、それぞれの位置に着いた。いつでも始められるからね。

「エイトのバカーッわたしがバトルしたかったのに！！」

リナちゃん……そんなにバトルしたかったの？でもそれってエイト君への八つ当たりじゃないかしら……

「リナちゃん、次は相手になってあげるからガマンして」

思わず私は、リナちゃんを慰めた。そのおかげか、リナちゃんはおとなしくなった。

「うっし！俺が審判するからさっさとはじめようぜ！」

そう言いながらリュウタは審判に入った。リュウタ、気が利くね。

「リュウタ、助かるよ」

「ありがとう！」

エイト君と私はリュウタにお礼を言い、お互いにバトル体勢に入  
った。

「準備は出来てるな！ ルールは、使用ポケモン一体のシングルバ  
トルだ。……開始！！」

「エイパム、お願い！」

『ウツキー！』

私は、エイパムを繰り出した。やっぱりエイパムが一番頼りになる  
からね。

「いけ、ヒノアラシ！」

『ヒノヒノー！』

エイトはヒノアラシを出してきた。やっぱりヒノアラシね。

「エイトくん、先攻はもらうよ！エイパム、スピードスター！」

『エパー！』

エイパムは軽くジャンプし、しっぽを振った。それにより、無数の  
星がヒノアラシに向かって飛んでいった。

「ヒノアラシ、火の粉で応戦だ！」

『ヒノー！！』

ヒノアラシの背中から、激しい炎が出し、口からたくさんの小さな火の玉を放ち、エイパムのスピードスターに対抗した。

二つの技がぶつかり、小規模の爆発が起こり、煙りが立ち込めた。

煙りが晴れると、エイパムもヒノアラシも立っていた。さっきの攻撃は互角みたいね。

「レナちゃんやるね！今度はこっちから行くよ。ヒノアラシ、電光石火！」

『ヒノヒノヒノーツ！！』

ヒノアラシは、かなりの速さで、エイパムとの距離を詰めていく。でも黙ってやらせる訳にはいかないよ！

「エイパム、影分身！！」

『エパッ！エパッ！エパッ！』

エイパムは影分身を使い、分身を作りだし、その数は10匹くらいにまで増えた。

そのおかげで、ヒノアラシの電光石火は本体ではなく、分身のほうに当たってしまった。うまくいったわね。

影分身を使えば技が当たる確率は下がるんだから。

エイト君は悔しそうな表情を浮かべていた。

「エイトくん、なかなかいい考えでしょ？エイパム、ヒノアラシを囲んで一斉に引っかく攻撃！」

『ウツキーー!!』

私の指示で、エイパムは、分身とともにヒノアラシを囲んだ。一気にいくよ！

でも、それをやすやすと受けるエイト君ではなかった。

「ヒノアラシ、ジャンプして、回転しながら火の粉!!」

『ヒノーツ!!』

ヒノアラシは地面をおもいつきりけってジャンプし、空中で回りながら火の粉を放った。まさかそんな攻略方があったなんて！

『エパーツ!!』

分身は次々に消えていき、最後はエイパム本体にも当たってしまった。このままだとやばいよ。

「これって昨日リュウタがつかってた戦法じゃない？」

おとなしくなったりナちゃんが審判をしているリュウタにいう。どういうこと？

「おー……確かにそうだな。今度は炎のシャワーだぜ！」



リュウタも同じ戦法をとったことがあるのね。ってそんな呑気にしている場合じゃないわね。

「エイパム、大丈夫？」

私は、火の粉を受けて、ひざまずいているエイパムに声をかけた。

『ウッキー……』

このままだとまずい！どうにかして反撃しないと！

「ヒノアラシ、電光石火でギリギリまで距離を詰める！そして、体当たりだ！！」

『ヒノヒノヒノー！！』

ヒノアラシが盛んに炎をあげたあと、一気に加速し、エイパムに突撃してきた。どうしたら……そっか、これならいける！

私はそう判断し、ヒノアラシの攻撃がエイパムに当たる直前まで待った。

「エイパム、カウンター！」

『エパーツ！』

私の指示通り、エイパムは、ヒノアラシの体当たりが当たった直前に、協力なパンチを繰り出した。カウンター成功ね！

「カウンターか……そんな技が使えたなんて……」

「エイパムの切り札なんだから！」

私は、成功した嬉しさからか、力強く言った。

「次で決めるよ！エイパム、最大パワーでスピードスター！」

「エ……エパーッ！！」

エイパムは、つらそうにしながらも、とどめの一撃をヒノアラシに放とうとしていた。このまま行けば……いける！

「ヒノアラシ、最大出力で火の粉だ！！おもいつきりいけー！！！」

「ヒ　　ノ　　ッ！！」

ヒノアラシの背中からは、今までみたことのないくらい大きな炎があがっていた。これはガチンコバトルになりそうね！

二つの技はぶつかり合い、今までで一番大きな爆発音が、フィールド中に響き、黒い煙りが発生した。

「ゲホゲホ……」

煙りのせいで、思わず私とエイト君は咳込んだ。

私は、エイパムが無事なのを祈っていた。すると、だんだん煙りが晴れてきた。

私とエイト君は、それぞれ確認すると……そこでは、ヒノアラシもエイパムも目を回していた。

「ヒノアラシ、エイパム、両者戦闘不能。この勝負引き分けだぜ！」

リュウタのジャッジがくだる。引き分け……か。

「よく頑張ったな。戻れ、ヒノアラシ」

エイト君は、ヒノアラシを抱きながら、ボールに戻した。

「エイパム、お疲れさま。戻って。」

私も、エイパムをボールに戻した。よく頑張ってくれたね。その後、エイト君のところへ歩きだした。

「エイトくん、いいバトルだったね。ヒノアラシ強かったよ」

「レナちゃんのエイパムのほうがすごいと思うよ。僕もまだまだな」

私たちはそれぞれの思ったことを言った。楽しみバトルだったわね。

「次バトルする時は決着をつけよう」

「ええ。望むところよ！」

エイト君は私に向かって手を差しだしてきた。私はそれに答え、おなじように手を出し、握手した。

「エイト、俺のこと忘れてんじゃねーぞ！次は俺とバトルだ！」

「レナちゃん、わたしとバトルしてくれるんでしょ？」

リュウタとリナちゃんは、お互いに私たちに主張する。そんなこと  
言われても……

「そう急がずに次会ったときにとっておこうよ」

エイト君はとつさに提案した。なんとか助かったよ。

「それもそうだな。次会った時はもっと強くなってるから覚悟しと  
けよー!!」

「しょうがないかあ……わたしたちそろそろ次の町にいかなきゃだ  
しね」

リュウタもリナちゃんも納得してくれたみたい。ホント、エイト君  
に感謝ね。

「それじゃ僕たちはそろそろ行くよ。二人ともジム戦頑張れよ」

「ええ！もちろん！」

「俺が負けるとでも思つか？」

私もリュウタも気合がはいっている。でも相変わらずリュウタはニ  
ヤニヤしている。なにか策でもあるのかしら？

「じゃあ、元気でね！」

そう言い残して、エイト君とリナちゃんは、歩きだした。私とリュ

ウタは、見えなくなるまで手を振っていた。

「やっぱ寂しくなるな」

「そうね……でも私、次はエイト君に勝てるくらい強くなりたいよ」

そう、うかうかしていたら、エイト君にもリナちゃんにも追い抜かされちゃう。寂しいけど、今は頑張らないと！

「そりゃそうか。とりあえず、今の目標は打倒、キキョウジムリーダーだな」

「そうね、明日はジム戦だし、今日はポケモンセンターでゆっくりしよう」

「だな」

そう言っで、私とリュウタは、エイト君達との思い出を胸にしまい、ポケモンセンターに戻って行った。また、いつか会いたいな！

レナ編 第十五話 別れ（後書き）

レナ

「また会いたいな」

そうだね

次回は久しぶりにシヨウ達です

キヨウコ

「やった〜！」

シヨウ編 第十六話 撃退（前書き）

第十六話完成！

シヨウ

「……どれだけハイペースなんだ」

気にしない気にしない

では第十六話をどうぞ！

## シヨウ編 第十六話 撃退

「やったあゝ！」

俺達は、ラクリモーサのポケモンをなんとか撃破した。まあほとんどはケイタの活躍だったがな……

「ちっ！覚えてろ！」

そいつは、いかにも雑魚の台詞らしいことを言いながら逃げて行った。逃がしたか……まあいいか。

「博士、大丈夫ですか？」

「うむ、大丈夫だ」

ケイタが白髪のおっサンの心配をした。喋り方や風格から、かなり偉そうな感じがした。俺は正直いけ好かなかった。

「二人とも、手伝ってくれてありがとうございます！」

「ほえっ？気にしなくても良いよゝあとタメ口で良いよゝ」

……なんだか勝手に話が進んでいる気がする……まあ楽でいい。

「派手にやったわねゝ」

不意に俺達の後ろから誰かの声が聞こえてきた。振り返ると、そこには、俺達と同じか、少し年上な感じの女がいた。



「そう言わないでよヒカリ」

……ヒカリ？どこかで聞いたことあるな……俺がそんなことを考えていると、不意にキョウコが騒ぎ始めた。

「ふあゝ！あのグランドフェスティバルで優勝したヒカリさん！？本物だゝ！」

ああ……そういえばいつだったかは忘れたが、グランドフェスティバルで優勝したやつの名前にヒカリっていたな……俺はコンテストには興味が無いから、よくは知らないけどな。

「よろしくね。えつと……」

「アタシはキョウコヨロシク！」

「君は？」

ヒカリは俺に名前を聞いてきた。まあ名乗っておくか。

「……シヨウだ」

俺はそれだけを言った。すると、なぜかヒカリはクスクスと笑った。

「オホン！君達、私についてきたまえ」

キョウコ達が雑談をしていると、白髪のオッサンが俺達をあるところに連れていった。そこは、この町で一番大きい建物だった。

「ここは？」

「ここはポケモンの改造をするところよ」

キョウコの質問にヒカリが答えた……ん？改造をする場所？

「ふえっ！？ポケモンにそんなことしたら可哀相だよ！」

確かにポケモンにそんなことをするのはどうかと思うが……なぜかヒカリの顔は、悪戯をした子供のような笑みを浮かべていた。

「フフッ嘘だよ」

「ほえっ？嘘っ？」

キョウコは、現状を理解出来ていないような顔をしていた。

「騙された〜！」

まさかの嘘に、キョウコはかなり悔しがっていた。大体そんな危険な施設が、こんな田舎にあるわけないだろ……

「ここはナナカマド博士の研究所だよ」

ケイタが本当のことを話した。ここがそうなのか……

「では入りましたまえ」

俺達は、白髪のおっサン改めてナナカマド博士に、研究所の中に入れてもらった。そこは、いかにも研究所らしい感じがした。

「ほわあゝ 凄ゝい」

中に入って早々キョウコがはしゃぎ始めた。まったく……お前は餓鬼か？

「……博士、研究所に呼んで、俺達になにか用でもあるのか？」

俺はナナカマド博士に問い掛けた。なんの用も無いのに呼ぶはずがないからな。

「うむ、シヨウ、キョウコ、二人に頼みたいことがある」

そう言いながら、ナナカマド博士はある機械を俺達に渡した。確かこれは……

「ポケモン図鑑か？」

俺はそう言った。すると案の定、キョウコがはしゃいでいた。それをケイタが止めていた。

「君達には、シンオウにいろいろなポケモンを見てきて欲しいのだ。そしてその図鑑を完成させて欲しいのだ」

なるほどな……だがそんな大役を俺達に任せていいのか？

「私は君達に素質を感じた。やってくれるかな？」

「任せて〜！」

おいおい……勝手に話を進めるなよ……まあ便利な道具だし、構わないか。

「ではよろしく頼むぞ」

「……嗚呼」

俺達は図鑑を受け取り、研究所を後にしようとしたが、俺だけはナカマド博士に呼び止められていた。

「シヨウ、お前にはもう一つ頼みがある」

俺だけに頼み？面倒なのは勘弁してもらいたいかな。

「これを受けとって欲しい」

そう言うと、ナカマド博士はモンスターボールを差し出した。

「中にはヒコザルが入っている。こいつの面倒を見てやってくれ」

ヒコザルの面倒？なぜ俺に頼むんだ？

「こいつはちと訳ありだな。お前なら頼めるのじゃ」

まったく面倒なことを頼まれたものだ……だが戦力が増えるのはありがたい。

「わかった」

俺はヒコザルのモンスターボールを受け取り、研究所を後にした。

「やっと来たね」

研究所の前には、キョウコ達三人が待っていた。どうやら待たせていたようだな。

「待たせたな」

「いいのよ。所で博士となんの話をしていたの？」

ヒカリが俺に聞いてきた。二人も興味があるようだ。……正直説明するのは面倒だったが、とりあえず説明した。

「あのヒコザルを……そっか」

なんだ？ ケイタはこのヒコザルを知っているのか？

「……とりあえず出してみるか」

俺は、モンスターボールからヒコザルを出した。

『ヒコー!』

かなり元気がありそうだ。俺から見た感じ、訳ありには見えないがな。

「……よろしくな、ヒコザル」

『ヒコツ?』

どうやらまだ俺と旅することに気づいていないみたいだな。俺はヒコザルに説明した。

「……というわけだ。俺と旅に行くか?」

一応俺はヒコザルに確認をとった。旅が嫌で、先頭中に逃げ出すなんて勘弁だからな。

『ヒコツ!』

ヒコザルは元気よく答えた。どうやら異存はないようだな。それに俺はやりたいことがあった。

「ケイタ、頼みがある」

「僕に? なにかな?」

「……俺とバトルしてくれ」

そう、俺はさっきのケイタのバトルを見て、戦ってみたくなっていた。

「ほえっ？ ショウ、本気？」

キョウコはいつものしらないような、不安そうな表情になった。確かに勝ち目はゼロに近いかもしれない。だからこそ、俺がどこまで戦えるか試してみたい。

「僕はいいよ。なら早速ポケモンセンターのバトルフィールドに行こうか」

「わかった」

俺達は、ポケモンセンターにあるバトルフィールドへと向かった。

「ポケモンは何体にする？」

何体か……今俺の手持ちのポケモンは三匹。だったら……

「三対三で頼む」

俺にとってはフルバトルを、ケイタに申し込んだ。ケイタは快く承諾した。

「わかった。頼むよ！ペラップ！」

『バトル！バトル！』

ケイタは、ここに来る前に回復させておいたペラップを出してきた。相手にとって不足はない。

「ヒトデマン、頼む」

『デヤッ！』

俺はモンスターボールからヒトデマンを出した。ヒトデマンでのバトルは初めてだ。俺は事前に使い方を教えてもらった図鑑を使い、ヒトデマンの技を確認した。

「じゃあ私が審判をするわね。ではケイタ対ショウのバトル、開始！」

ヒカリの合図と共に、俺とケイタのバトルが始まった。



シヨウ編 第十六話 撃退（後書き）

キヨウコ

「なんだか予想外の展開だよ」

ヒカリ

「ケイタは世界一強いだよ」

キヨウコ

「本当に〜！？」

ヒカリ

「うんっ嘘だよ」

キヨウコ

「騙された〜！（泣）」

…………… やれやれ

レナ編 第十七話 新たな出会い（前書き）

第十七話完成！

レナ

「ジム戦ね！」

リュウタ

「燃えるぜっ！」

では第十七話をどうぞ！

## レナ編 第十七話 新たな出会い

エイト君達と別れてから次の日、私はリュウタより早くに目が覚めた。今は朝の8時。少し寝すぎたかな？昨日は早く目が覚めたのね。

「ううーん……よく寝た」

私は大きく伸びをし、ベッドから起きた。リュウタを起こさなくちや。

「リュウタ、起きて」

「……あん？朝か？」

私の呼びかけに、リュウタは寝ぼけながら答えた。

「今日はジム戦でしょ」

「……ジム？」

あれ？まだ寝ぼけているのかしら。リュウタがジム戦に反応しないなんて。

「そうだ！ジム戦だ！行くぞレナ！」

……とりあえず目が覚めたみたいね。リュウタが起きると一気に賑やかになるわね。

「ってちよつと待ってよ!」

リュウタは、いつの間にかいつもの服に着替えていた。どれだけ着替えるの早いのよ……

「待ってよ!」

「外で待ってるからな」

そう言いながらリュウタは部屋を出た。私は、リュウタが部屋を出たのを確認し、普段着に着替えた。

「おっ来たな」

「それじゃ行きましょ」

私達は、キキョウジムに向けて歩きだした。

「そういえばキキョウジムのリーダーってどんなやつだ?」

あれ? てつきりリュウタは知っていると思ってたのに、知らなかったのね。

「確か名前はハヤト、飛行タイプのエキスパートね」

「よっしゃ！それだけわかれば十分だぜ〜！」

そう言いながらリュウタは走り出した。私はそれを急いで追いかけた。

「ここか〜」

私達の前には、和風な感じの大きい建物が佇んでいた。ここがキキヨウジムなのね。

「入るか〜」

リュウタは、私より先にジムの中に入って行った。私もリュウタの後に続いた。

ジムに入ると、そこには受付があった。ここで手続きをするのかしら？

「挑戦者ですか？」

「そうです」

「ではトレーナーカードを見せてください」

トレーナーカードは、トレーナーに持つことを義務付けられているカード。いわゆる身分証明書みたいなものね。

「確認しました。ここは使用ポケモンは二匹です」

「……二匹？」

「はい。二匹いないと挑戦できませんよ」

受付の女の人がそう言い終わると、リュウタはその場に固まった。そういえばリュウタはブイゼルしか持ってないわね。

「しまった〜！一匹しかいね〜！」

リュウタは頭を掻きまくりながら歎いていた。どうするのよリュウタ……

「今日は既に挑戦者が入っていますので、明日の挑戦になります」

受付の人の話を聞いて、リュウタの顔はパツと明るくなった。

「それなら早くゲットに行くか〜！」

「その前に受付済ませるよ」

そう言いながら、私は受付を済ませた。時間は、私は明日の午後2時、リュウタは3時ね。

「ただいま挑戦者がリーダーとバトルしていますが、ご覧になりますか？」

今バトルしているんだ。これはリーダーのバトルの癖を知るチャンスね。

「お願いします」

私がそう答えると、受付の人は、バトルフィールドの観客席に案内してくれた。リュウタも渋々ついて来た。そんなにゲットしに行きたいのね。

「やってるね」

調度バトルは一対一になっていた。挑戦者は、見た感じ私より幼い女の子だった。リーダーのハヤトさんは鳥のようなポケモン、女の子は、妖精のようなポケモンだった。

「あのポケモンは……」

私は図鑑を二匹に向けた。鳥みたいなポケモンはピジョン、妖精みtainなポケモンはピッピって名前なのね。

「ピジョン！風起こし！」

『ピジョー！』

「かわしてはたく！」

『ピーー！』

ピッピはピジョンの攻撃をかわし、はたくをピジョンに決めた。ピジョンは限界だったのか、その場に倒れた。

「ピジョン戦闘不能、ピッピの勝ち。勝者、ユリノ！」

このバトル、挑戦者の勝ちね。あのユリノって女の子強いね……

「んじゃゲットに行くぜ！」

そう言い残してリュウタは走り去ってしまった。本当走るの早いね。

「私はポケモンセンターに戻ろうかな？」

私はジムを出て、ポケモンセンターに戻る途中、さっきの女の子、ユリノを見かけた。

「こんにちは」

私はユリノに声をかけると、ユリノはビクツとした後、後ろを振り向いた。

「あつ……さっきボクのジム戦見てた……」

「私はレナ。よろしくね」

私は、ユリノに自己紹介をした。そういえばユリノって自分をボク



って言うのね。

「……ボクはユリノ」

ユリノは、少しもじもじした様子で自己紹介をした。ダメ……なんかかわいい！

「ポケモンセンターに行くの？」

「っん」

ユリノは首を縦に振りながら短く答えた。

「なら一緒に行こう？」

「えっ？」

ユリノは少し困ったような顔になってしまった。あれ？迷惑だったかしら？

「嫌かな？」

「……うつん」

「じゃあ行こう」

私は微笑みながらユリノに言うと、ユリノはニッコリ笑った。私達はそのままポケモンセンターに向かった。

私達は、ユリノがポケモンセンターにポケモンを預けている間、食堂でパフェを食べていた。

「ユリノはどこ出身なの？」

「エンジュシティ。あそこのジムは強いからここに来たの」

ユリノも、私と同じパフェを食べながら答えた。同じパフェなのに、ユリノのは大きく見えるのはなぜかしら。

「そっか」

「……ねえ、レナ」

「なあに？」

「その……レナって誰かと旅してるの？」

ユリノは、少しもじもじしながら聞いてきた。そういえばリュウタの紹介をしていなかったわね。

「うん。リュウタっていうの」

「……そっか」

「どうしたの？」

ユリノは、なにか言いたそうな顔をしていた。どうしたのかしら。

「えっと……その……」

ユリノは、顔を赤らめながら、なにか言いたいけど、言えないような感じになっていた。すると、ユリノはなにか決意したような表情になった。それまでゆっくり十を数えるぐらいだった。

「その……ボクも一緒に旅していいかな？」

私は、思わぬユリノの申し出に、耳を疑ってしまった。私は構わないんだけどね。

「……えっと、ボク、レナとリュウタって人の邪魔をするつもりはないけど……」

「ちょっ！？ユリノなに言ってるの！？リュウタとはただの幼なじみよ！……えっと、私はユリノと行くのはいいんだけど、リュウタに聞かないと……」

「……うんっ。そうだね」

ユリノは、嬉しいのか、ニッコリ笑っていた。まあリュウタならダメとは言わないと思うけどね。

「とりあえず部屋に行こう」

「んっ」

ユリノは軽く頷き、私とリュウタの部屋に向かった。

部屋に入ると、ユリノは部屋にあった椅子にちょこんと座った。

「ユリノ、なんで私と行きたいの？」

「その……レナなら一緒にいても大丈夫かなと思ったから」

「どういうこと？」

「ボク、誰かと旅をしたかったんだけど……ボク、初めての人って苦手で……でもレナならボク、大丈夫だと思って……」

そっか、人見知りのせいで、なかなか信用できる人が見つからなかったのね。でも人見知りだけでそんなに旅をしてくれる人が見つからないかしら。

「そっか。とりあえずリュウタが帰ってくるのを待ってようよ」

「うんっ」

私とユリノは、ポケモンをゲットしに行ったりリュウタを待ったために、部屋でのんびりした。

レナ編 第十七話 新たな出会い（後書き）

新キャラのユリノです！

ユリノ

「その……よろしくお願いします」

レナ

「ジム戦は延期になっちゃったわね……」

我慢してね

レナ

「ところでリュウタはどうなったのかな？」

それは次のレナ視点で明かすよ

シヨウ編 第十八話 強敵（前書き）

第十八話完成！

シヨウ

「……遅いな」

テスト期間だから許して（泣）

では第十八話をどうぞ！

## シヨウ編 第十八話 強敵

「先攻は譲るよ」

なかなか余裕があるな。当然か。向こうはポケモンリーグに出る程の実力者。だが俺は負けることなど考えていない。勝ってみせる。

「ヒトデマン、水鉄砲」

『デヤッ!』

ヒトデマンは、星型の体の一番上にある突起から、勢いよく水鉄砲を放った。

「ペラップ! 電光石火でかわすんだ!」

『かわす! かわす!』

ペラップは、目にも留まらぬ速さで水鉄砲を回避した。やはりそう甘くはないようだ。

「燕返しだ!」

ペラップは、空中で一回転しながら、ヒトデマンに突っ込んできた。だがこちらもただで喰らうつもりはない。

「硬くなる!」

ヒトデマンは、体を硬くし、ペラップの燕返しダメージを減らし、

更にペラップにも少量のダメージを与えた。さすがに固い相手にぶつかったら痛いよな。

「やりますね！ ペラップ、目覚めるパワー！」

『パワー！ パワー！』

ペラップの周りには、黒いエネルギー弾が何個も発生し、それをヒトデマンに放ってきた。目覚めるパワーは使うポケモンによってタイプが変わる。色からしておそらく悪タイプか？ こちらも反撃しなくちゃな。

「スピードスターだ」

『デヤッ！』

ヒトデマンは、星型のエネルギー弾を作り、目覚めるパワーにぶつけた。だが向こうの方が威力が高いのか、だんだん押され、ついには突き破られた。だがここまで時間を稼げばいい。

「かわせ」

『デヤッ』

ヒトデマンは左にステップし、目覚めるパワーを回避した。目覚めるパワーは地面にぶつかり、そこには大きめの穴が出来ていた。かなりの威力のようだ。

「長期戦は無理だな……ヒトデマン、怪しい光」



『デヤッ』

ヒトデマンは、中心にある赤いコアから、怪しい光をペラップに向けて放った。それはペラップに命中し、ペラップは変な動きをしていた。どうやら混乱しているみたいだな。

「仕留める！ 水鉄砲！」

「させないよ。とんぼ返り！」

とんぼ返りだと？ 確かダメージを与えた後、ボールに戻る技のはず。なるほど、混乱は不利だと踏んだのか。だが混乱している場合攻撃を失敗することもある。ある意味賭けに出たのか。

『……とんぼ！』

ペラップは、ヒトデマンの水鉄砲をかわし、とんぼ返りを決めた。ちっ、ペラップの奴、とんぼ返りを決めやがったか。あの場面で自分を攻撃しなかったのは運が良かったみたいだな。

「ありがとうペラップ。なかなかやるねショウ！ でもそろそろ本気でいくよ！ エレキブル！」

『レー！！』

ケイタは一匹のポケモンを繰り出した。そいつは黄色い体に、所々に黒い模様が入っていた。なっなんだあいつは……とんでもない気迫を感じる。俺はとっさにポケモン図鑑を向けた。名はエレキブルというのか。見た感じ電気タイプか？

「なんか強そう」

キョウコがそう呟くと、審判をしているヒカリが反応した。

「そりゃそうよ。エレキブルはケイタのポケモンの中でも一、二を争うポケモンなもの」

「……………」

マジかよ、強そうなはずだ。だがキョウコはヒカリを怪しそうな目で見ていた。

「……………本当に？」

「本当よ。こんなことで嘘つかないよ」

まあどうでもいい。とにかくどうにかしないと一瞬で倒されそうだ。

「エレキブル！ 雷！」

『エレー！…！』

エレキブルは、電気タイプ最強の技、雷でヒトデマンに攻撃してきた。マズイ、あんなの喰らったら一撃で倒されるな。

「かわせ！」

『デヤッ！』

ヒトデマンは、後ろにステップし、雷をかわすことに成功した。俺

はかわすことに成功したことにより、少し安心感を抱いた。だがそれが甘かった。既にエレキブルはヒトデマンの目の前に迫っていた。

「なにっ!？」

「チェックメイトだ! 雷パンチ!」

エレキブルは右手に雷を溜め込み、そのままヒトデマンのコアを殴りつけた。ヒトデマンは地面にたたき付けられた。

「ヒトデマン!」

俺はヒトデマンを確認すると、ヒトデマンのコアが点滅していた。どうやら戦闘不能みたいだな。

「ヒトデマン、戦闘不能。エレキブルの勝ち!」

ヒカリのコールを合図に、ヒトデマンの負けが確定した。

「まさかあの雷はフェイクだったとはな……」

「そういうとき。次はなにを出すんだい?」

どうする……やはりここは一番信頼出来るポケモンでいくか……? ならこいつしかないな。

「頼むぞ、ラクライ」

『ガウッ!』

ラクライは元気よくボールから出てきた。やる気は十分みたいだな。

「一気にいくぞ、ラクライ、スパークだ」

『ガーウ!』

ラクライは、自分の体に電気を運びさせ、エレキブルに突進した。

「受け止めるんだ!」

エレキブルは、ラクライのスパークを片手で、いともたやすく受け止めてしまった。だがその後不思議なことが起こった。ラクライに帯びていた電気が、エレキブルに吸い寄せられていつてしまった。

「なにっ?」

「エレキブルの特性しってるかい?」

エレキブルの特性……確か電気エンジンだったはず……しまった。電気エンジンは電気タイプの技を受けるとスピードが上がる。敵に塩を送ってしまったということか。

「雷パンチ!」

「電光石火でかわせ!」

『エレー!』

『ガウッ!』

ラクライは、エレキブルの雷パンチを電光石火で右にステップすることで、かわすことに成功した。だがどう反撃すればいい。電気タipesの技は意味がない。なら他の打撃でいくしかないな。

「ラクライ、電光石火でエレキブルを攪乱しろ！」

『ガウッ！』

ラクライは電光石火でエレキブルの回りをグルグル回り始めた。電気エンジンで速くなっているとはいえ、スピードはラクライの方が上みたいだな。

「雷パンチ！」

『エーレー！』

エレキブルは、両腕に雷を溜め込み、ラクライを殴ろうとした。だがラクライのスピードに追いつけず、空振りを連発していた。このままうまくいけば……

「なかなかのスピードだね。エレキブル、地震！」

エレキブルは、右足で地面を思い切り揺らした。そのせいでラクライはバランスを崩し、転倒してしまった。

「チェックメイト！ 雷パンチ！」

『エーレー！』

『ガウッ！？』

エレキブルは、倒しているラクライに、雷パンチをぶつけた。ここまでなのか？

「ラクライ！」

俺はラクライの安否を確認した。だがラクライはあまり傷を負っていないかった。一体どういうことだ？

「効いていない……しまった。ラクライの特性を忘れていた！」

ラクライの特性……確か避雷針だ。避雷針は電気タイプの技を自分に向けさせ、無効化させるはず。なるほど、それで雷パンチを喰らってもダメージがなかったのか。

「なら攻め方を変えよう。エレキブル！ 穴を掘る！」

『エレッ！』

穴を掘るだと？ くそつどこから来るかわからない。ケイタは次で決めるつもりだ。一体どうしたらいい……

「チエツクメイト！ 炎のパンチ！」

「っ！？ ラクライ！ 後ろだ！」

『ガウツ！？』

俺はとつさにラクライにエレキブルの場所を示したが間に合わず、炎を帯びたパンチ、炎のパンチをともに受けてしまった。

「ラクライ！」

ラクライは俺の呼びかけに反応を示さなかった。どうやら気絶しているみたいだ。

「ラクライ、戦闘不能！ エレキブルの勝ち！」

ヒカリのコールが入った。俺はラクライをボールに戻した。

「お疲れ様。頼むぞヒコザル！」

『ヒコーー！！』

俺は最後のポケモン、ヒコザルをボールから出した。俺はヒコザルのバトルは初めてだから、ポケモン図鑑で使える技を確認した。

「準備はいい？」

ヒカリはそう俺に聞いてきた。ケイタも待っていてくれていたみたいだな。

「嗚呼。待たせて悪かったな」

「ショウー！！ 頑張ってー！！」

キョウコはバトルフィールドの外から、大声で声援を送っていた。やかましいが……まあ悪い気はしない。

「じゃあヒコザル対エレキブルのバトル、開始！」

ヒカリのコールが入った。ここからどこまで食らいつけるか……だが全力で戦うまでだ！



シヨウ編 第十八話 強敵（後書き）

シヨウ

「強い……」

まあポケモンリーグに出るくらいだからね

キヨウコ

「次回は？」

ポケモンをゲットしに行ったりリュウタの話だね

シヨウ

「……そうか」

レナ編 第十九話 力の証明（前書き）

第十九話完成！

リュウタ

「今回はオレ視点だな」

そういうことさ

では第十九話をどうぞ！

## レナ編 第十九話 力の証明

オレはポケモンをゲットするために、キキョウシティの隣にある3番道路に来ていた。

「ここにはどんなポケモンがいるんだろうな」

オレは周りをキョロキョロしながら呟いた。その時オレはあることに気がついた。

「……一人ってつまんね」

そう、今オレは一人だ。いつもレナがいたけど、正直一人というのは退屈だと気がついた。

「そうだな！ 出てこいブイゼル！」

『ブイ！』

オレはモンスターボールからブイゼルを出した。これで退屈にならないな。

「新しい仲間と一緒に探してくれ」

『ブーイ！』

ブイゼルは片手を上げながら返事をした。オレもなにかいいポケモンがないか探し始めた。

「なにかいねえかな」

『……ブイ?』

ブイゼルが、なにかに気づいたみたいで、向いてる方を指差していた。なにがあるんだ??

「おっ?」

ブイゼルの指差す方を見ると、そこにはジュンサーさんがいた。ジュンサーさんはこの世界の警察の人だ。でもよ……ジョーイさんと同じで、ジュンサーさんも同じ顔だし同じ声なんだよな。不思議だぜ!

「どうかしたんですか?」

オレはいつも使わない敬語で、ジュンサーさんに話し掛けた。見た感じなんか困っているみたいな様子だったしな。

「あら、君は?」

「オレはリュウタ。こいつは相棒のブイゼル」

『ブイ!』

「リュウタ君ね。調度いいわ。あなたにお願いがあるの」

頼み? やっぱりなんか困っていたみたいだな。でもなんかあったのか?

「さつきコガネシティの育て屋さんの所からポケモンが逃げ出したと通報があつたのよ。良かったら一緒に探してくれないかしら？」

ポケモンが逃げ出した？ 確かにそれは心配だな。でもコガネシティに育て屋があるのは初耳だな。

「今コガネシティからここに普通の人はこれないのよ。私だけだと時間かかるし……」

確かに一人は大変だな。でもなんでコガネシティからここにこれないんだ？

「どうしてこれないんですか？」

オレはどうしても気になり、ジュンサーさんに聞いてみた。

「人が通れる道に変な木が邪魔していて通れないのよ。でもポケモンは通れるみたいなの。その子はそれを通して来たみたいなのよ」

なるほど。随分好奇心旺盛なんだな。オレも気になるし、手伝うかな。

「いいですよ」

「ありがとう。そのポケモンはヒトカゲという名前よ」

そう言いながら、ジュンサーさんはヒトカゲの写真をを見せてくれた。初めてみるポケモンだな。

「じゃあお願いね！」

そう言いながら、ジュンサーさんは搜索を始めた。オレも探すかな。

「行くかブイゼル」

『ブイ?』

ブイゼルは、ポケモンゲットはいいのか? と言っているような顔をしていた。まあポケモンは逃げないし、大丈夫だろ! いや、逃げるポケモンもいるか。

「大丈夫だろ。行くぜ!」

『ブイ!』

ブイゼルは元気よく返事した。オレはブイゼルと共にヒトカゲ搜索に乗り出した。

ヒトカゲを探して数十分後、オレはブイゼルと少し休憩していた。実はさっきまで走りっぱなしだったよな〜!

「疲れたな……」

『バイバイ!』

バイゼルはまだ元気みたいだな。やっぱりポケモンの体力はすごいや。

『バイ!』

「どうした?」

バイゼルはなぜか騒いでいた。なにかと思い、バイゼルの見ている方を見ると、そこからは煙りが昇っていた。

「なにかあったのか? バイゼル、行ってみるか!」

『バイ!』

オレとバイゼルは、煙りのあった方に駆け出した。何事もなけりやいいんだけどな。

オレとブイゼルは、さっき煙りが昇っていた場所に着くと、そこには、一人のトレーナーとそのポケモン、そしてさっき写真で見たポケモン、ヒトカゲがいた。こいつもヒトカゲの搜索をしているのか？ いや、そんな風には見えねえな。

「グライガー、電光石火」

『ガー！』

『カゲツ！』

なっ！？ まさかあいつヒトカゲをゲットするつもりなのか！ そんなことさせないぜ！

「止める！ ブイゼル、水鉄砲！」

『ブーイ！』

ブイゼルは、目の前のトレーナーのポケモンに、水鉄砲を放った。そのポケモンは水鉄砲をまともに喰らい、少し驚いていた。

「誰だ？」

トレーナーは、俺を睨みつけながらそう言った。見た感じオレと年はさほどかわらないみたいだな。

「なにしているんだ！」

「あいつをゲットしようとしている。トレーナーがポケモンを捕ま



えてなにが悪い」

なんだこいつ……気に入らねえな！ 普通に話しただけでイライラするぜ！

「そいつは育て屋さんのポケモンだ！」

「育て屋？ くだらん嘘は止める。お前もこいつを捕まえたいんだろ？」

「てめえと一緒にするな！ オレはヒトカゲを育て屋さんに返すんだ！」

「なんだ？ 百歩譲ってそうだとして、それで英雄気取りか？」

こいつ！ ダメだ、もう耐えらんねえ！こいつはオレがぶっ倒してやる！

「ブイゼル！ 水鉄砲！」

『ブーイ！』

「グライガー、かわせ」

『ガー！』

グライガーと呼ばれたポケモンは、ブイゼルの水鉄砲を安々とかわしてしまった。かなりのスピードだな……

「ブイゼル！ もう一回水鉄砲！」

『ブーイ!』

えっ? ブイゼルは、グライガーに水鉄砲をせず、違う所に水鉄砲を放った。おいおいブイゼル、なにやってんだ?

「どうしたんだよ?」

『ブイブイ!』

ブイゼルは、向こうの木を指していた。なるほど、さっきの煙りはあの木から出ていたのか。多分ヒトカゲの火で少し燃えていたんだな。

「どこをみている。グライガー、切り裂く」

『ガッ!』

『ブー!』

ブイゼルは、グライガーの切り裂くを右腕に喰らってしまった。こっちも反撃してやるぜ!

「ブイゼル、冷凍ビームだ!」

『ブー!……ブー?』

あれっ? やっぱり出ねえぞ!この前のはまぐれだったのか?

「ぶざけてるのか? グライガー、切り裂く」

『ガッ!』

「かわせ!」

「ブイツ!」

ブイゼルはグライガーの切り裂くを、左にステップしてかわした。  
オレのブイゼルの回避力を舐めんなよ!」

「アクアジェット!」

『ブーイ!』

『グラッ!?!』

ブイゼルは自分の身を水で包み込み、そのままグライガーに突っ込んだ。グライガーは耐えられなかったか、その場に倒れた。よっしゃ! オレの勝ちだぜ!

「やったなブイゼル!」

『ブイ!』

ブイゼルは片手を上げてオレに答えた。一方のやつはなんの言葉もなくグライガーをボールに戻した。普通ご苦労様の一言ぐらいあるだろ!?

「フンッ仕方ない。そのヒトカゲは諦めるか」

そう言いながらそいつはどこかに行こうとしたが、オレはそいつを止めた。

「お前、なんでポケモンと一緒にいるんだ？」

「……自分の力を証明するためだ」

くっ……なんだこいつから感じるこの威圧感は……一体こいつはなんなんだ……

「オレはリュウタ。お前は？」

「……リュウタか。俺はダイキだ。また会えるのを楽しみにしている」

そう言い残し、ダイキは去っていった。なんでオレは名前なんか名乗ったんだ？ それに、あいつはなんでまた会うのを楽しみにしているなんて言ったんだ？ オレは会いたくないっての！ ってそんなことよりヒトカゲは！？

「大丈夫か？」

オレはヒトカゲに声をかけた。オレは、ヒトカゲは怯えているかと思ってた。だけどヒトカゲは、目をキラキラさせながらオレを見ていた。

「大丈夫そうだな。それよりどうやってジュンサーさんに知らせるか……そうだ！ ブイゼル、上空に水鉄砲！」

『ブーイ！』

ブイゼルはオレの指示通り、上空に水鉄砲を放った。これでジュンサーさんが気がつけばいいんだけどな。

それから約五後、ジュンサーさんがやって来た。どうやら気がついたみたいだな。

「リュウタ君！ ヒトカゲを見つけたのね」

「はい」

オレは軽く返事をし、ヒトカゲをジュンサーさんに渡そうとしたけど、ヒトカゲはオレから離れようとしなかった。

「とりあえずポケモンセンターに行つて、育て屋さんに連絡しましょう」

「わかりました」

オレとジュンサーさんは、育て屋さんに報告するために、キキヨウ

シティのポケモンセンターに戻っていった。

「無事にヒトカゲを保護しました」

『おお、ありがとうジュンサーさん』

今オレ達は、ポケモンセンターのテレビ電話で、育て屋さんのじいさんと話しをしている。

『ところでリュウタ君といったな。ヒトカゲの様子はどうじゃ？』

「それが……」

オレは足元にいるヒトカゲをちらっと見た。オレから全く離れる様子がないんだよね。

「ほらヒトカゲ。育て屋さんの所に帰るんでしょ？」

『カゲ〜！』

ヒトカゲは、ジュンサーさんの言うことを聞かず、オレの足にしがみつきながら泣き出してしまった。おいおい……オレはどうしろっというんだよ。

『リュウタ君。ヒトカゲは君と離れたくないみたいじゃ。良かったら君がヒトカゲの面倒を見てくれないか？』

「オレが？」

オレがヒトカゲの面倒を見る？ 確かに仲間が増えるのはありがたい話だな。でももとヒトカゲは育て屋さんのポケモンだろ？

「でも育て屋さんのポケモンじゃ……」

『もともとその子は捨てられていたポケモンでの。ワシ達が面倒をみていたんじゃないよ』

捨てられていた？ なんて酷いことしやがんだそのトレーナーは！でもそれならオレが引き取ってもいいのか？

『一応ヒトカゲに確認を取ったらどうじゃ？』

「……ヒトカゲ、オレと来るか？」

『カゲッ！』

ヒトカゲは笑顔を浮かべながら首を縦に振った。

『リュウタ君。ヒトカゲをよろしく頼むぞ』

「わかりました。ヒトカゲ、よろしくな」

『カゲ〜!』

オレは育て屋さんから送られてきたモンスターボールを使って、ヒトカゲをボールに戻した。新しい仲間が増えたぜ〜!

「リュウタ君。協力感謝するわ。ヒトカゲをよろしくね」

「はい!」

ジュンサーさんはそう言い残し、ポケモンセンターを後にした。オレは満面の笑顔を浮かべながら、レナのもとに戻っていった。



レナ編 第十九話 力の証明（後書き）

リュウタ

「なんか前の目的からずれちゃったけど、無事に仲間を増やせたぜ」

ヒトカゲ

『カゲ』

今回はシヨウVSケイタ決着ですね

リュウタ

「シヨウのやつバトルしてんのか」

そうだよ

シヨウ編 第二十話 決着（前書き）

第二十話完成！

リュウタ

「バトル決着だな」

ちなみに今回は短いです（泣）

では第二十話をどうぞ！

## シヨウ編 第二十話 決着

ヒカリのコールが入り、俺はいち早くヒコザルにポケモン図鑑を向け、技の確認をした。よし……いくか。

「ヒコザル、火炎車」

『ヒコー！』

ヒコザルは自分の体に炎を纏い、エレキブルに突っ込んでいった。

「エレキブル、雷パンチ！」

『エーレー！』

エレキブルもヒコザルに反撃するために、右手に雷を溜め込み、ヒコザルを殴りつけようとした。だがそんなことは想定内だ。

「ヒコザル、かわせ」

『ヒコッ！』

『ブルッ！？』

ヒコザルはエレキブルの虚をつき、エレキブルの攻撃を回避した。作戦通りだな。

「ヒコザル、火炎車を中断して火炎放射！」 『ヒコー！』

俺は、図鑑で調べた時に見たヒコザルの最強の技、火炎放射でエレキブルに攻撃した。灼熱の炎はエレキブルに直撃した。

「エレキブル！」

『エレッ……』

エレキブルの体からは、体の所々が火傷していた。火炎放射の追加効果で火傷状態になったみたいだ。火傷状態になると、徐々にダメージを受け、攻撃力も下がる。これは運が良かったな。

「これはまずいね。戻れエレキブル！」

なにっ？ エレキブルを戻した？ ケイタ、なにを考えているんだ？

「ケイタ、自主的に戻すのは棄権になるけど？」

「わかってるよ。あのままだとやられかねないからね。これ以上エレキブルに無理させたくなかったんだ」

「わかった。エレキブル棄権でヒコザルの勝ち！」

……棄権勝ちか。あまりすすきりしないが、とりあえず一匹倒したな。だがおそらく次でケイタは決めてくるはずだ。

「やるねシヨウ。僕も敬意をもって最強のポケモンで挑むよ！ ガブリアス！」

『ガアア……！』

ケイタは、紫色をした、鮫のようなポケモンを繰り出してきた。俺はポケモン図鑑をそのポケモンに向けた。名はガブリアス。タイプはドラゴンに地面。タイプはわかったが、なんだあの威圧感は……

「ケイタ本気ね……ヒコザル対ガブリアスのバトル、開始！」

「とにかくいくぞ！ ヒコザル、火炎……」

『ヒコー！』

なにっ？ ヒコザルは俺の指示を聞かず、火炎車でガブリアスに突撃した。なにやってんだ？

「やっぱりそうなっちゃったか……でもバトルでは関係ない。ガブリアス、流星群……」

『ガアアアア……！』

なっ……ガブリアスはエネルギー弾を発生させ、上空に放った。刹那、それは上空で小型のエネルギー弾に分散し、まるで流星のようになっていた。

「ヒコザル！ かわせ！」

『ヒコー……！』

流星群はヒコザルに直撃し、大爆発が起こった。煙りが晴れると、そこにヒコザルが倒れていた。

「ヒコザル戦闘不能！ ガブリアスの勝ち！ この勝負ケイタの勝

ち！」

ヒカリのコールが入った。負けた……か。

「ショウー！」

キョウコが俺も所に一直線に走ってきた。そんな急ぐ必要ないだろ。

「ショウ凄かったよ！ アタシそう思ったよ！」

「正直ガブリアスを出させられるとは思わなかったよ」

そう言いながらケイタとガブリアスが俺に近づいてきた。こう見るとガブリアスはかなりでかいな……

「ケイタ、ヒコザルのことを知っていたな。ならヒコザルはなにがあっただんだ？」

「……ヒコザルはあなたを認めてないのよ」

俺を認めてない？ ヒカリの言葉に俺は少し戸惑った。だがヒカリはすぐにあの悪戯っ子のような顔になった。

「嘘だよっ」

「……こんなときにそんなものはいらない」

俺は少し声を上げてそう言った。俺としたことが騙されかけたな……

「ヒコザルはバトルが大好きでね、ヒートアップするとトレーナーの指示が耳に入らなくなっちゃうんだ」

……それはかなりきついな。だからナナカマド博士は訳ありと言っていたのか。

「でもシヨウ凄いのと思うわよ。ケイタはそうそうガブリアスは出さないのよ」

「……嘘か？」

「嘘じゃないよ！」

……正直俺の中でヒカリの言葉イコール嘘と違ってきているな。まあ自業自得か。

「これからどうしようか？」

「ふわぁ〜アタシお腹すいたよ〜」  
今の時間はもうすぐ夕方。確かにそろそろ腹が減るところだな。

「じゃあ僕の家に来る？」

「いいのか？」

「うん。父さんは研究で忙しいから、家は今僕一人なんだ」

一人か……俺と同じだな。だが母親はいないのか？ 俺は疑問に思ったが、ケイタのことを考え、深く詮索しなかった。

「じゃあいこうか」

「レッツゴー！」

キョウコは俺の手を引っ張りながら歩きだした。そんなに引っ張らないでもらいたいんだが……

「私達もいこう」

「だね」

その後から、ケイタとヒカリが歩きだした。俺とキョウコは、ケイタの家で、ケイタとヒカリの料理をおいしく頂いた。この時ケイタもヒカリも料理が出来るということを知った。

その日の夜、ポケモンセンターにある男がいた。実はこの男は、俺達のバトルを見ていた。

「あいつが俺達の邪魔をしていたやつらか……あゝ俺だ。マルクだ。とりあえずミッションは終わった。今からそっちに戻る」

そう言いながら、マルクと名乗った男は携帯電話を切った。



「まあいい。俺を楽しませてくれよ……小僧」

そう言いながら、マルクは黄色い体に、緑色の翼をもつドラゴンのようなポケモンに乗り、その場を後にした。

シヨウ編 第二十話 決着（後書き）

シヨウ

「強いな……」

だよね

ただいま記念企画実施中です！詳しくは誓いのSPで

リュウタ

「よろしくな」

予断ですが、最後のマルクという男、若本規夫さんの声をイメージしました

リュウタ

「誰だそれ？」

声優さん。この人好きなんだ

シヨウ

「……………」

レナ編 第二十一話 信頼（前書き）

第二十一話完成！

リュウタ

「ジム戦」

テンション高い……では第二十一話をどうぞ！

## レナ編 第二十一話 信頼

オレは新しい仲間、ヒトカゲを連れて、ポケモンセンターのオレ達の部屋に戻った。早くヒトカゲを見せてやりたいぜ

「ただいまー！ 見てくれレ……ナ？」

オレはレナともう一人、見たことのない女の子がいて、思わず言葉が詰まった。いや、どこかで見たことあるような……

「あっおかえりリュウタ。ちょっとお願いがあるんだけど」

「なんだ？」

「あっあの……ボクも二人と一緒に旅したくて……ダメかな……？」

女の子は、今にも泣き出しまいそうならい不安そうな顔でオレに頼んできた。そんなこと別にオレに頼む必要ないのにな

「仲間？ 大歓迎だぜ！」

「ほっ本当に？」

「おう！」

「ありがとう！ ボクはユリノ。よろしく！」

ユリノ……あっ思い出したぜ！ オレ達より先にジム戦してたやつ

か！

「オレはリュウタ。よろしくな〜ってなあ見てくれよ！ ジャーン！」

『カゲ〜！』

オレはヒトカゲを抱き抱えて、レナとユリノに見せ付けた。

「ヒトカゲ？」

「この子どうしたの？」

ユリノ、レナの順でオレに質問してきた。オレはさっきあったことを説明した。

「そんなことがあったのね」

「まあ仲間が増えたから結果オーライだけだな」

『カ〜ゲ』

オレがレナと話していると、ヒトカゲはユリノと遊んでいた。ヒトカゲのやつ、ユリノといつの間に仲良くなったんだ？

「いや〜今日から両手に花状態だな〜ぶほっ！！」

オレが軽く冗談を言ったら、どこから出したのか、レナがハリセンでオレの頭を叩いた。地味に痛い……

「もうっ！ 明日はジム戦なんだからね！」

「そりゃそうか。とりあえず今日は早めに休むか」

オレは痛む頭を抑えながら、三人で食堂に向かい、オレは食い終わると、すぐに寝てしまった。

～ R e n a   s i d e ～

私は、晩御飯の後、ポケモンセンターのテラスに来ていた。もう、リュウタったら明日ジム戦なのにいつもどおりなのよね……私なんか緊張しっぱなしだよ……

「私がちゃんとしなくちゃいけないのにね……」

『ウキッ？』

『ヒメ？』

私の足元にいたエイパムとヒメグマは、私の方を向いて首を傾げて

いた。

「ううん。なんでもない」

私はそう答えたものの、やっぱり落ち着くことは出来ずにいた。こんなじゃ明日のバトル勝てないよ。

「どうしたの？」

「えっ？」

突然後ろから声がして、私はとっさに後ろを振り向くと、そこにはユリノがいた。

「帰ってくるのが遅いから……」

「ごっゴメンね。心配かけて。そろそろ戻るから」

私はとっさに笑顔を浮かべたが、ユリノの表情は曇ったままだった。

「トレーナーに気持ちに迷いがあると、ポケモンにも迷いが出ちゃうよ……ってこんなこと言ったら余計焦っちゃうよね……ゴメンね」

迷い……か。確かに私が迷っていたら、エイパムもヒメグマも不安になっちゃうよね。

「……ありがとうユリノ。少し落ち着いたよ」

「そっそう？ ボク余計なこと言っちゃったかも……」

ちよっ！ ユリノは悪くないのに、目がウルウルしてきてる！ ユリノって泣き虫なのかな？

「大丈夫よ。おかげで少し楽になった」

「本当？」

「うん。そろそろ戻ろうかな」

「うんっ」

私は、まだ収まらない不安な気持ちを残したまま、ユリノと部屋に戻っていった。

「ううん……」

私は、朝日を目覚ましに目を覚ました。結局昨日はあんまり寝れなかったな……

「遅いぜレナ」



「おはよう」

あれ？ 私より先にリュウタとユリノが起きていた。もしかして私最後？

「ゴメン！ 今すぐ用意するから！」

「じゃあ先に食堂に行ってるなー」

そう言い残し、リュウタとユリノは先に行ってしまった。うう……一人だとなんかモヤモヤしちゃう……

「とにかく早く準備しないと……」

私は待たせちゃ悪いと思い、急いで身支度をし、リュウタとユリノが待つ食堂へと急いだ。

「……ハア」

私は、リュウタとユリノと合流し、キキョウシティ特有の和風料理を食べていた。でも私は緊張していて、ろくに喉を通らずにいた。

「大丈夫？」

「うっうん。大丈夫よ」

「……………」

ユリノは、昨日の私を知っているからか、私の心配をしていた。一方リュウタは、私の事をジーツと見ていた。私、なにか顔についてるかな？

「…………少しは肩の力抜けよな」

それだけを言うと、リュウタは食事に戻った。あれ？ 私が緊張してるのばれてるのかな？

「さて、まだ時間あるし、部屋でのんびりするか？」

「そうね」

時間はまだ朝、ジム戦の時間までまだある。私達は、少し部屋で時間を潰してから、私達はジムを目指してポケモンセンターを後にした。

「さて、腕がなるぜー！」

「……………」

リュウタはいつも通り、明るくジムに向けて歩いていただけ、私は無言で歩いていた。

「なあユリノ、ハヤトは飛行タイプの使い手だよな」

「うっうん。ボクの際はポップとピジョンを使ってたよ」

リュウタとユリノがなにか話していたけど、私は緊張していて、全く耳に入っていなかった。そんな調子で、私達はジムに着いた。

「あの……ジム戦を予約しているレナですけど……」

「レナさんですね？ ジムリーダーがお待ちです。お連れの方は2階へどうぞ」

うっっ……ここからは私一人なのね……本当に勝てるかな……

「レナ」

「なっなに」

私は急にリュウタに話し掛けられ、声が裏返ってしまった。

「大丈夫だって。オレがついてる」

「リュウタ……」

「お前なら出来るって信じてるからな。じゃあ2階に行ってるな」

そう言いながら、リュウタは2階へ向かう階段に向かった。そして最後にリュウタはこう呟いた。

「……頑張れよ。レナの勝利を信じてるぜ」

リュウタ……うん、私頑張るよ。私は少し落ち着いた気持ちで胸に、バトルフィールドの扉を開いた。

「チャレンジャーだね」

バトルフィールドの向こうには、和服を来た男の人がいた。あの人  
がハヤトさんかしら。

「はい」

「じゃあ始めようか。ルールは二対二のシングルバトルだ」

「わかりました」

ハヤトさんは飛行タイプの使い手よね……本当は電気タイプがいたら楽だけど、そんなこと言ってられないわね。リュウタとユリノが見ている前で情けない姿は見せられない。うつ……なんかまた緊張してきちゃった……

「リュウタ、レナ勝てるかな……リュウタ？」

「……頑張れ……」

「リュウタ！」

「ん？ 大丈夫だ！ あいつなら勝てるって！」

「じゃあいくよ！ ポッポ！」

『ポー！』

ハヤトさんは、ボールからポツポを出した。やっぱり飛行タイプね。

「お願いヒメグマ！」

『ヒメー！』

私は、一番手にヒメグマを選んだ。うん、ヒメグマはバトルする気満々みたい。

「ではジムリーダーのハヤト対チャレンジャーレナのバトル、開始！」

レナ編 第二十一話 信頼（後書き）

レナ

「落ち着かなくちゃ……」

ユリノ

「レナなら大丈夫だよ」

リュウタ

「オレも気合い入れるぜ」

みんな頑張れ

シヨウ編 第二十二話 対峙（前書き）

第二十二話完成！

キヨウコ

「そろそろジム戦したい〜！」

我慢我慢

では第二十二話をどうぞ！

## シヨウ編 第二十二話 対峙

「ふわぁ〜！ はやーい！」

俺とキョウコは、炎の鬣たてがみが印象的なポケモン、ギャロップと、三つの頭を持つ鳥のようなポケモン、ドードリオに乗り、最初のジムがある、クロガネシティに向かっていた。

「これならすぐ着くわよ」

「本当に〜？」

「本当よ！」

ギャロップの方に乗っていたキョウコは、ドードリオに乗っているヒカリと話していた。俺はギャロップに乗っている。何故こんなことになっているかと言うと、時は数時間前に遡る。

「ふわぁ〜！ 大都会〜！」



俺とキョウコ、ケイタ、レナは、バトルをした次の日、マサゴタウンから、隣町の大都会、コトブキシティにやってきた。

「シヨウ達はこれからどうするんだい？」

どうするか……か。とりあえず俺はジムのある町に行きたい。

「この近くにジムがある町はどこだ？」

「クロガネシティだね。ここからちよつと距離あるかな？」

「アタシも早くジム戦したいーいー！」

キョウコが一人で駄々をこねていた。焦った所でどうにもならないだろ。

「なら私もクロガネシティに一緒に行こうか？」

「レナも？」

「私のポケモンなら早く着くわよ」

そういえば、ヒカリのポケモンは見たことないな。まあここは好意に甘えるか。

「じゃあ僕はミオシティに用があるから。ジム戦頑張ってね！」

「嗚呼」

「まっかせて」

そう言い残し、ケイタは、俺達が向かうクロガネシティの逆方向に歩きだした。

「ねえレナ、ケイタは何しにミオシティってとこに行ったの？」

「ミオシティには大きい図書館があるの。ケイタはそこに用があるって言ってたわよ」

「本当に」

「ここで嘘ついてどうするのよ！」

ヒカリはブンブンしながら、クロガネシティ方面の道へ歩きだした。

「ゴメンってば」

その後を、キョウコが謝りながら、ヒカリの後を追って行った。

「まったく……くだらない……」

俺は軽くぼやきながら、二人の後を追いかけた。

「じゃあ行くわよ。お願い、ギャロップ、ドードリオ」

『ヒヒーン!』

『ギャギャ!』

ヒカリは、モンスターボールから、見たことのないポケモンを出した。こいつらに乗っていくのか？

「ふわあゝ！ カッコイイ！」

そう言いながら、キョウコは二匹にポケモン図鑑を向けていた。…俺か？ 俺は面倒だからやらなかった。

「じゃあ二人とも、クログネシティまでよろしくね」

そう言いながら、ヒカリはドードリオに乗り、俺とキョウコはギャロップに乗った。

「じゃあ出発！」

ヒカリが号令をかけると、二匹は一斉に走り出した。

そして現在に至るといっわけだ。正直ギャロップもドードリオもかなりスピードがあるな。

「えへへ」

「……なんだ？」

後ろで変な笑い方をしていたキョウコに、俺は問い掛けた。

「なんかシヨウが王子様みたい」

「……ハア」

俺は片手で頭を抱えながら、思わずため息をした。こいつの夢見る乙女みたいな思考は、いつになったら変わるんだろうな。

「二人とも、あれ見て」

そう言いながら、ヒカリは前を指差していた。そこには、かならず大きい山がそびえ立っていた。

「テンガン山よ。あの山の先にクロガネシティがあるのよ」

「あの高い山を登るの！？」

確かにキヨウコの言うこともわかる。あれを越えるとなると、二、三日じゃ無理な話になる。

「大丈夫。ふもとの洞窟を通ればいいのよ」

「なら安心だね」

まあそうだろうな。じゃなきゃケイタが最初に言っているはずだ。

「ほら、あの洞窟よ」

ヒカリの指差す方に、確かに洞窟があった。あそこを抜ければクロガネシティか……

「ありがとう。ゆっくり休んで」

俺達はギャロップとドードリオから降り、ヒカリは二匹をボールに戻した。

「さて、行こう」

俺達は、テンガン山の洞窟に入った。

中は薄暗く、大小様々な岩があった。その他には、これといった特徴はなかった。

「早く行こうよー！」

俺達より先に歩いていたキヨウコが、ピョンピョン跳ねながら俺とヒカリを呼んでいた。あいつは餓鬼か……

「ふえっ？ ショウ〜ヒカリ〜あれ見て〜」

なんだ？ キョウコがなにかを指差しながら、俺とヒカリを呼んだ。確認すると、そこには、見たことのある服装の男がいた。

「もしかして……」

「嗚呼……ラクリモーサだ……だが一人だけなにか変だな……」

そう、あいつらは、全部で三人。身長は体格からして、恐らく男だろう。だが一人だけ、普通のやつとは違っていた。やつらは、制服や髪型はほぼ統一している。だが、一人だけ、それこそ制服は一緒だが、髪型は、男の割に長く、なにより雰囲気違っていた。

「誰だあ？ そこにいるのは？」

その男は、俺達の方を見ながらそう言った。どうやら気づかれたみたいだな。

「お前達、なにをしている？」

「あん？ お前は確か……ショウとか言ったな？」

こいつ……俺の名前を知っている？ どこかで会ったことがあるのか？

「なに、お前と赤い帽子の小僧とのバトルややり取りを見ていたにすぎねえ」

「随分といい趣味しているな」

「まあ、お前達はラクリモーサのブラックリストに乗っている……逃がしはしねえぜ」

いつのまにか、他の二人の戦闘体制に入っていた。逃がしはしないというわけか。

「ヒカリ、キョウコ。やるぞ」

「わかったわ」

「任せてー！」

そういいながら、二人は雑魚二人組とバトルを始めた。俺は目の前の長髪男と対峙していた。

「俺様はラクリモーサ幹部のマルクだあ！ 軽く遊んでやるよ」

「戯れ事はいい。さつさとしろ」

「口の減らねえ餓鬼だなあ！ やれヨノワール！」

『ヨノー』

マルクと名乗った男は、黒い体に、貫禄のある体をした、一つ目のポケモンを出した。図鑑を向けると、そいつはヨノワールという名で、タイプはゴーストのみ。かなり強敵だと俺は判断した。

「頼むぞ、ヒコザル」

『ヒコー!』

俺はボールから、ヒコザルを出した。ヒコザルは途中で俺の言うことを聞かなくなるかもしれない。だが俺はヒコザルにあることを言い付けていた。だから俺はヒコザルでも大丈夫だと踏んだ。

「さあ、俺様を楽しませてくれよお!」

「いくぞ、ヒコザル!」

この瞬間、俺とマルクとのバトルの火蓋は切って落とされた。絶対に勝って見せる!



シヨウ編 第二十二話 対峙（後書き）

シヨウ

「まだジム戦できないのか……」

すねないの

キヨウコ

「ジム〜せん〜！」

やかましい！

レナ編 第二十三話 初めてのジム戦（前書き）

第二十三話完成！

レナ

「やっとジム戦ね？」

まあね

ユリノ

「頑張ってね」

レナ

「任せて！」

では第二十三話を……

レナ

「どうぞ！」

## レナ編 第二十三話 初めてのジム戦

「先攻は譲るよ」

「わかりました。ヒメグマ、メタルクロー！」

『ヒメー！』

私は、一気に決めるべく、ヒメグマにメタルクローを命じた。ヒメグマは自分の爪を鋼のようにし、ポツポに攻撃しようとした。

「上昇してかわせ！」

『ポー！』

ポツポは、上に上昇し、ヒメグマのメタルクローをかわした。やっぱり単調な攻撃はダメね……

「レナ！ 落ち着け！」

リュウタが二階にある観客席からアドバイスしてくれている。そうよね、いつも通りにしなくちゃね。

「ポツポ！ 風起こし！」

『ポー！』

ポツポは、一生懸命羽を羽ばたかせ、強い風を起こしていた。大変！ ヒメグマが飛ばされちゃう！

「ヒメグマ！」

『ヒ……メー！』

ヒメグマは、最初はなんとか堪えていたけど、吹き飛ばされてしまった。

「決めるぞ！ 電光石火！」

『ポー！』

ポップは、目にも留まらぬ速さで、ヒメグマに突撃してきた。でも、これは逆にチャンス！

「ヒメグマ！ 受け止めて！」

『ヒメ！』

「なにっ！？」

ヒメグマは、がっちりとポップを受け止めた。パワーならエイパムやリュウタのブイゼルより自信があるんだから！

「ヒメグマ！ そのままポップを下にたたきつけて！ メタルクロー！」

『ヒメッ！』

『ポー！？』

「ポッポ！」

ヒメグマは、受け止めてすぐに、ポッポをたたきつけ、メタルクローをポッポに決めた。ポッポはその場で目を回していた。

「ポッポ戦闘不能！ ヒメグマの勝ち！」

「よっしゃー！」

「やった！」

なんとかポッポを倒せた……観客席でもリユウタとユリノが喜んでた。このまま上手くいけば良いけど……

「やるね。でも次は上手くいくかな？ ヨルノズク！」

『ホー！』

えっ！？ ハヤトさんは、フクロウに似たポケモンを出してきた。私はてっきりピジョンで来ると思っていたから、少し驚いてしまった。

私は咄嗟にポケモン図鑑を向けた。そのポケモンの名前はヨルノズク。少しでも光があれば周りが見える目を持っているみたい。まあ、あまり関係無いわね。

「一気にいくわよ！ ヒメグマ、乱れ引つかき！」

『ヒメー！』

「催眠術！」

『ホー』

しまった！ ヨルノズクは、乱れ引つかきをしようとするヒメグマの目を見た。刹那、ヒメグマの動きが鈍くなり、ついには眠ってしまった。

「ヒメグマ！ 起きて！」

『止めだ！ ゴッドバード！』

『ホー！！』

ヨルノズクは一度上昇した後、力を溜め始めた。ゴッドバードは、力を溜めて、強力な一撃を放つ技。このままじゃやられちゃう！

「お願い、起きてヒメグマ！」

私の必死の呼びかけも虚しく、ヒメグマは可愛い寝顔で、スヤスヤと寝息を立てていた。

その間にも、チャージが終わり、ヨルノズクはヒメグマに迫って来ていた。

「ヒメグマー！」

ヨルノズクのゴッドバードは、ヒメグマに決まり、その衝撃で砂煙りが起こった。

煙りが晴れると、目を回しているヒメグマの姿があった。

「ヒメグマ戦闘不能！ ヨルノズクの勝ち！」

「お疲れ様、ゆっくり休んで……」

私はヒメグマをボールに戻した。既に私には余裕がなく、切羽詰まった状態になっていた。

「レナ！ 頑張って！」

「負けんじゃねーよ！ お前は本当にオレの知ってるレナか！？」

ユリノがいつもとは考えられないくらい大声で応援してくれていた。リユウタも負けじと応援してくれている。そうよ、勝ってリユウタとユリノと一緒に笑顔で喜びたいもの。頑張らないと。

「私は負けないわ！ お願いエイパム！」

『ウッキー！』

エイパムはボールから元気よく出てきた。私はエイパムを信じるわ！

「いくよ！ 突進だ！」

ヨルノズクは勢いよくエイパムに突進してきた。そんな単調な攻撃当たらないわよ！

「避けて引つかく！」

『ウキッ！』

エイパムは左にステップし、ヨルノズクをかわし、隙だらけになったヨルノズクに引っかけを決めた。

「ヨルノズク！ 催眠術！」

「同じ手は通用しません！ エイパム、砂かけ！」

「エイパッ！」

「ホー！？」

私は、催眠術をしようとしていたヨルノズクの動きを止めるために、エイパムに砂かけを指示した。ちよつとした賭けだったけど、目に直接砂が入ったヨルノズクは、動きが止まった。

「スピードスター！」

エイパムは至近距離で、ヨルノズクにスピードスターを決めた。あまり威力が高くないが、至近距離で当たっているからか、ヨルノズクは苦悶の表情を浮かべていた。

「ヨルノズク！ 高速移動で距離を取るんだ！」

ヨルノズクはハヤトさんの指示通り、高速移動で上空に距離を取った。多分使ってくる技は一つしかない。

「ゴッドバード！」

やっぱり！ 上空ならエイパムの攻撃はスピードスターしか届か



ない。しかもかなり距離があり、スピードスターも間に合わない。  
なら……私はエイパムを信じるしかない！

「エイパム！」

『ウキッ！』

どうやらエイパムも、私の考えがわかったみたい。さすが私のパートナーね。

「行け！」

『ホー！』

ヨルノズクは、凄まじいスピードで、エイパムに突っ込んできた。

「エイパム！ 受け止めて！」

『ウキー！』

「なにっ！？」

私は捨て身の戦法を、エイパムに託した。私にはこれしか思い浮かばなかった。

当然、ゴッドバードの威力は高く、どんどんエイパムは押されてきた。

「今よ！ カウンター！」

『ウキー！！』

『ホー！！』

エイパムは、空いているしっぽを使って、ヨルノズクの顔を殴った。カウンターは受けた物理ダメージを倍返しする。これはかなりのダメージのはず……

「エイパム！　大丈夫！？」

『パツ……』

エイパムは、フラフラしながらも、片手を上げて答えた。なんとか大丈夫みたい。

一本ヨルノズクは、カウンターのダメージに耐えられず、その場に倒れていた。これって……

「ヨルノズク戦闘不能！　エイパムの勝ち！　よって勝者、レナ！」

「やったー！！」

私は、エイパムを抱き上げながら喜んだ。エイパムも凄く喜んでた。

「よつつしゃー！！」

「レナ凄い！」

観客席から、リュウタとユリノが祝福してくれた。勝てて良かった……

「参ったよレナちゃん。これがキキョウジムを勝ち抜いた証、ウイングバッジだ」

私は、ハヤトさんからウイングバッジを受けとった。バッジは私の手の中で輝いていた。

「やったよリュウタ！ ユリノ！」

私は急いでジムのロビーに戻った。そこには既にリュウタとユリノがいた。

「凄いよレナ！」

「なんとか勝ったよ！」

私は、ユリノとはしゃいでいると、いつもなら大騒ぎするリュウタが、今はおとなしかった。

「オレも……続くぜー！！　しゃあー！！」

リュウタは気合いを入れ直し、バトルフィールドに入って行った。

「上に行こう、ユリノ」

「うんっ」

私達は、リュウタのバトルを見るために、上に向かった。リュウタのバトルは、ブイゼルとヒトカゲを繰り出し、苦戦しながらも、ハヤトさんのホーホーとピジョンを倒し、バッジを獲得した。

レナ編 第二十三話 初めてのジム戦（後書き）

レナ

「やったー！」

リュウタ

「なんでオレカットされてんだー！」

いや、全員分書いたらかなりの話数になるじゃん。ジム戦は、代表がバトルをし、残りは今回みたいな感じになりそうです。ご了承ください（泣）

リュウタ

「じゃあ次のジム戦はオレか？」

かもしれないし、ユリノかもよ？

ユリノ

「ボッボク？」

まだ未定だからなんとも言えないけど……

シヨウ編 第二十四話 謎の女性（前書き）

第二十四話完成！

キヨウコ

「バトルバトル」

シヨウ

「なんでそんなハイテンションなんだ……」

いつものことでしょ？ では第二十四話をどうぞ！

## シヨウ編 第二十四話 謎の女性

「さっさと終わらせてやるかぁ！ シャドーパンチ！」

ヨノワールは、両手から影で作り出した手を、ヒコザルに向けて放ってきた。確かシャドーパンチはかわすことは出来ない。なら真つ向から受けてたつまでだ。

「ヒコザル、火炎放射」

『ヒコー！』

ヒコザルは、シャドーパンチに向けて火炎放射を放ち、相殺することに成功した。こちらからも攻めていくか。

「ヒコザル、火炎車」

ヒコザルは、俺の指示通り、自分の体を炎に包み込み、回転しながらヨノワールに突撃していった。

「シャドーボール！」

『ヨノツ！』

ヨノワールは漆黒の球体を作り出し、ヒコザルに放ってきた。そんな単調な攻撃は無意味だ。

「かわせ」

ヒコザルはシャドーボールを左にかわし、そのままヨノワールに突撃した。直撃したが、ダメージは？

「弱え……弱すぎるぜ！ 雷パンチ！」

『ヨノー！』

『ヒコー！』

「ヒコザル！」

ヨノワールは右手に雷を溜め、ヒコザルの顔面を殴りつけた。このままだとマズイ……どうする。

「いけるか？」

『ヒ……コー！！』

なんだ？ ヒコザルの尻の所にある炎が、急に激しく燃え上がっている。もしかしたら、特性の猛火か？ 猛火は体力が無くなると、炎タイプの技の威力が上がる。さすが負けず嫌いだな……

実はヒコザルはかなり負けず嫌いだ。ケイタとのバトルの時もかなり悔しがっていた。だから俺は、ヒコザルに一匹で戦うよりも、トレーナーと戦った方が良いことを教えた。その時に俺はヒコザルの熱意を感じた。そう、こんな所で負けられない。

「ヒコザル、火炎放射！」

『ヒーコー！！』

ヒコザル、は今までに見たことのないぐらいの火炎放射を放った。  
これなら……いける。

「調子にのんじゃねえぞ餓鬼があ！ 守る！」

ヨノワールは淡い緑色をした壁を、自分の周りに作り出して火炎放射を防いだ。守るか……厄介だな。

「餓鬼に俺様は倒せねえよ！ お前の仲間もピンチみたいだぜ？」

俺はキョウコとヒカリの安否を確認した。確かに押されていた。  
このままだとマズイ。

「隙ありだぜ！ ギガインパクト！」

『ヨノー！！』

なにっ！？ ヨノワールは凄まじいエネルギーを身に纏い、ヒコザルに向かってきた。あれはかなりヤバいな。

「ヒコザル、穴を掘るでかわせ」

『ヒコッ！』

「甘いんだよ！ 地震！」

『ヨノッ』

しまった。ヨノワールは思い切り地面を叩き、激しい地面を激しく揺らした。地震は穴を掘るを使ったポケモンにもダメージを与え



る。マズイ……ヒコザルは？

『ヒコーー！！』

ヒコザルは地面がたたき出された。しかもダメージが大きいのか、目を回していた。

「くそっ……戻れヒコザル」

俺は力無くヒコザルをボールに戻した。俺の判断ミスだ……すまないヒコザル……

「弱すぎるぜ！　なんでこんな餓鬼がブラックリストに載っているんだあ？」

「まだだ。ラクライ！」

『ガーウ！』

俺は、ボールから相棒のラクライを出した。絶対に俺は負けるわけにはいかないんだ。

「まだやんのかよ？　ヨノワール、ギガイン……」

「そこまでにしなさい、マルク」

なんだ？　マルクの後ろから、長い青い髪をした女が立っていた。その服装はラクリモーサの制服だった。こいつも敵か？

「ボスから召集がかかってますよ。早く戻りなさい」

その女は優しく、尚且つ厳しい雰囲気を纏いながら言った。

「やれやれ……餓鬼！ 次はボコボコにしてやるからな！」

そう言い残し、マルクは部下と共に去って行った。

「キョウコ、ヒカリ、大丈夫か？」

俺は、ホツとしながら座り込んでいたキョウコと、ギャロップを心配していたヒカリに声をかけた。

「なんとか……」

「大丈夫よ……」

二人共声に元気が無かった。かなり疲れているようだ。

「あなたが、私達ラクリモーサに敵対する子供ね……」

「それがなんだ？」

「あなた達なら……フツツ期待してるわよ」

なんだ？ こいつはなにが言いたいのか、俺には理解出来なかった。

「私はラクリモーサ幹部のツカサ。また会いましょ。ショウ君、キョウコちゃん」

「待て。お前はなにが目的だ？」

この女には、謎がかなりある。あんな都合良くボスとやらの召集がかかると思えない。ならこの女は何がしたかったのか、俺は知りたかった。

「フフツ、あなた達と、レナちゃん達には期待してるのよ……私の目的にも協力してくれそうだしね」

「目的？ それにレナ達を知っているのか？」

「質問したい気持ちもわかるわ。でもそれは私からは教えられないわ。あなた達が確かめて。じゃあね」

ツカサと名乗った女は、謎めいた言葉を残して去った。残された俺達は、無言でその場に佇んでいた。

「なんとか助かったね……」

「あたし疲れた……」

二人共かなり疲れたみたいだな……だが俺は、疲れよりも、ツカサが言った言葉が気にかかっていた。

「あの綺麗なお姉さんに助けられたね」

「でもあの人もラクリモーサの人よね？　なんで助けたのかしら？」

助けた理由……察するにその目的とやらを果たすためだろうな……だがツカサからは悪意が感じられなかった……一体何者なんだ？

「でもボコボコにされちゃったね……」

「まだまだ強い人はいるのね」

俺は……まだ強くなる。いや、強くならなくてはいけない……俺はこのバトルでそれを痛感した。

「ヒカリ、出口はもうすぐか？」

「ええ、もう出れるわ」

「……行くぞ」

「ほえっ？ 待ってよー！」

俺は二人より先に歩きだした。歩いている時に、キョウコがなにか言っているみたいだったが、俺の頭の中は、どうすれば強くなれるか？ その事しか頭に無く、あまり会話のないまま、クロガネシティへの道を歩いて行った。

シヨウ編 第二十四話 謎の女性（後書き）

シヨウ

「……………」

キヨウコ

「……………」

ヒカリ

「……………」

なんだこの居づらい雰囲気は！？

キヨウコ

「だつて〜！」

プリンあるよ？

キヨウコ

「わ〜い」

ヒカリ

「単純でつらやましいわね」

なんか軽く酷い発言だな……

レナ編 第二十五話 再会（前書き）

第二十五話完成！

レナ

「このタイトルなに？」

今回から第二回目コラボです！

キョウコ

「あたし達は？」

ゴメン、またしばらく休み

ショウ

「……………」

怒るなよ！ では第二十五話をどうぞ！

## レナ編 第二十五話 再会

私達は、無事にジムバッジを貰い、次のジムがあるヒワダタウンに向かうために、つながりの洞窟と呼ばれる洞窟を抜けようとしていた。

今はつながりの洞窟の入口の近くにあるポケモンセンターで休んでいた。

「二人共どこにいつちゃったのかな……」

私が起きた時には、二人とも部屋にはいなかった。一体どこに行ったのかしら？

「とりあえずロビーに行こうかな」

私はとりあえず部屋を出て、ポケモンセンターのロビーに向かった。

「おうレナ！ 聞いてくれよ！ 面白いこと聞いたんだよ！」

ロビーに入ると、リュウタが私のもとに駆け寄ってきた。なんだ、こんな所にいたのね。

「どうしたの？」

「つながりの洞窟あるだろ？ 金曜日に珍しいポケモンが現れるらしいぜ！」

リュウタの説明だと、つながりの洞窟には、金曜日になると、どこからか歌声が聞こえてくるみたい。リュウタはそのポケモンを見つけに行こうと言っていた。

「でもどんなポケモンなの？」

「知らね〜」

ハア……そんなことだろうと思ったよ……まあそこまで調べていたらリュウタらしくないわね。

「ところでユリノは？」

「さつき木の実を取りに外に行つたぜ〜」

外？ 今日雨が降っているのに、ユリノってば……

「そろそろ帰ってくんじゃね〜か？」

「あつ噂をすれば」



ポケモンセンターの入口には、外から帰ってきたユリノが立っていた。

「お帰りユリノ」

「あ……レナ」

ユリノは、ピカチュウをモチーフにしたレインコートを着ていた。正直かわいい！

「木の実取れたか？」

「うんっ。いっぱい取れたよ」

そう言いながら、ユリノは、手に持っていた袋の中身を見せてくれた。そこにはオレンの実や、モモンの実などが入っていた。

「ところでユリノ、さっきリュウタから聞いたんだけど……」

私は、さっきリュウタから聞いた話をユリノにした。

「へえ……そんなポケモンがいるんだ」

「探しに行ってみようぜ！ 今日金曜日だよー！」

確かに今日は金曜日。行ってみるのも面白そうだけど……

「でもなにがあるかわからないよ？」

「なんとかなるっしょ！ ユリノはどうする？」

まさか急に自分に話しを振られるとは思ってなかったのだろう、  
ユリノはあたふたしていた。

「ボッボクは……行ってみたいかな」

ユリノ……完全にリュウタに流されたわね。まあ今のリュウタになに言っても無駄かしら。

「わかったわよ。じゃあ行きましょ」

「っしやー！ 早速行こうぜ！」

そう言いながら、リュウタはダッシュでつながりの洞窟に向かって走り出した。

「待ってよ！ 朝ごはん食べてからよ！」

「そっぴや飯食ってなかったな！ ハハハッ！」

リュウタは笑いながら、今度は食堂に向かって走り出した。ホント落ち着きがないんだから。

「ボクもお腹すいたよ。行こうレナ」

「その前にユリノ、そのかわいいレインコート脱いできたら？」

そう、ユリノはまだレインコートを着たままだった。ユリノはこくと頷き、部屋に戻って行った。

「早く行かないとリュウタに怒られるわね」

私は少し急ぎ足で、リュウタの待つ食堂に向かった。

「んじゃ出発！」

リュウタはポケモンセンターを出て、いきなり大声で掛け声をかけた。今は調度雨が止んでいる。タイミングが良いわね。

「あてはあるの？」

「その……聞いた話だと、歌声は地下から聞こえてくるらしいよ」

ユリノは恐る恐るリュウタに言った。

「なるほどな！　じゃあ地下に行けばいいんだな！」

リュウタの顔はパアツと明るくなり、今にも走り出しそうな感じになっていた。

「一日なんて短かいからな！　早く行こうぜ！」

そう言いながらダッシュでつながりの洞窟に入っていた。私とユリノも急いでその後を追った。

つながりの洞窟は、薄暗くて、しかもジメジメしていた。まあさつき雨が降ったからってのもあるけど……

「ジメジメだぜ」

リュウタは一人で喚いていた。まあそう思う気持ちもわからないけど。

「でもそのポケモンってどんなポケモンなんだろう？」

「楽しみだぜー！」

リュウタはおもちゃを与えられた子供のような顔をしていた。正直私も、少しワクワクしていた。でもそのワクワクはいつしか消えていた。

「今……どこ歩いてるんだ？」

そう、完全に迷子になっていた。このままだと私達マズイわよね？

「レナ、なんとかなんねーか？」

「ならないわよ。リュウタが一人で先走るからでしょ」

「オレのせいだよ！」

「ケンカしないでよ！」

私とリュウタが言い合いをしていると、いつも大人しいユリノが声を荒げた。いつも見ないユリノの態度に、思わず私もリュウタも黙り込んでしまった。

「……そうだ！ 出てきてマリル」

『リルー』

いつもの調子に戻ったユリノは、ボールから一匹のポケモンを出した。体は青くて真ん丸、かわいらしい丸い小さな耳がついていた。私はポケモン図鑑に向けた。名前はマリル。凄く耳の良いポケモンみたい。

「マリル、なにか聞こえるか聞いてみて」

『リルー』

マリルは返事をする、目を閉じて、音を聞き取るために、集中

し始めた。

『リルリル!』

マリルはなにか聞き取ったみたいで、音のした方を指差していた。

「あっちか？」

「行ってみましょ」

私達は、マリルを先頭に走り出した。しばらくすると、誰かの話し声が聞こえてきた。

「もうっ！　ここどこよ！」

「リナが勝手に行くからだよ……」

「エイト酷い！　わたしのせいなの!？」

「お前ら、ケンカしてる場合か？」

私達は、急いで声のする方に行った。そこには、私達が見覚えのある姿があった。

「……？　エイト君？　リナちゃん？」

「まったく……えっ？　レナちゃん？」

そう、私達が出会ったのは、アルフの遺跡で出会ったトレーナー、エイト君とリナちゃんだった。

## レナ編 第二十五話 再会（後書き）

というわけで、今回からのコラボは、\*s n o w w h i t e\*さんの作品、『ポケモン ジョウトADVENT』とコラボです！

リュウタ

「っしゃー！」

凄いテンション……ちなみに今回のコラボも数回続くので、その間シヨウ視点はお休みです

キヨウコ

「ふえ〜ん……（泣）」

泣くなよ（汗）

レナ編 第二十六話 団結（前書き）

第二十六話完成！

ユリノ

「あの人達……誰？」

そんな怯えたような顔するなよ

では第二十六話をどうぞ！



## レナ編 第二十六話 団結

「レナちゃん、それにリュウタ！ 久しぶりだね」

エイト君が、笑顔で私達に近づいてきた。

「エイトくん、リナちゃん元気だった？ ここにいたのがエイトくんたちでよかった！」

私もエイト君につられて笑顔になりながら、エイト君に挨拶した。

「先にいつちまってしばらく会わねーだろうと思ってたけど案外早く追いついたぜ！」

リュウタも、エイト君達と会えて嬉しいみたい。私も嬉しいんだけどね。でも、ユリノは私の後ろに隠れてしまった。

「リュウタ、それは私たちが釣りをしたりバトルしたりしてたからだよ！」

「まあそういう訳なんだよね。」

エイト君は苦笑いしながらいう。だから私達が追いつけたのね。

「ハハッ……そんなこというなよ！ せっかく会えたんだしよ！」

リュウタがいつものニコニコ顔ではしゃいでいた。リナちゃんとリュウタがいると、旅が楽しくなるわね。

「なあエイト、単刀直入にいうけどよ……あいつら誰だ？」

私達より、少し年上な感じの男の人がエイト君に耳打ちすしていた。その声は私にも聞こえた。まあ、私達とは初対面だから仕方ないわね。

私はそれに気づき、ユリノの手を引きながら、その男の人の前に行った。

「私はレナ。ワカバタウン出身のトレーナーよ」

「俺はリュウタ。よろしくな」

「……ボクはユリノ。会うのは初めてだけどよろしくね」

私とリュウタは、いつも通りの感じで、男の人に自己紹介をした。一方ユリノは、エイト君とリナちゃんを見て、私の後ろに隠れ、モジモジしながら自己紹介をした。相変わらずの人見知りね。

「ユリノ、この二人はエイトさんとリナちゃん。私たちとはアルフの遺跡であつたトレーナーよ。二人とも話しやすいから大丈夫！」  
私は、後ろに隠れているユリノに、そつと耳打ちをした。

「……うん、レナがそういうなら……改めてよろしく。エイト、リナ……」

ユリノは、なんとか私の後ろから出てきて、小さな声でそう言った。

「こつちこそよろしくね。……えっと、ユリノちゃんでもいいかな？」

エイト君の申し出に、ユリノは、んつと言いながら、首を縦に振

った。

「ゴホンゴホン……最後になったけど俺はユウヤ。一応ホウエンリーグベスト4の経歴はもってるぜ。まあよろしくな」

ユウヤと名乗った男の人は、そう自己紹介をした……えっ？ リーグでベスト4！？

「リーグでベスト4！？それってすげーことだよな！！」

私は声には出さなかったけど、さすがのリュウタもかなり驚いてる。そんなこと聞いたら、誰だって驚くよ。でもリュウタ……そんなに凄い人にタメ口って……

「ねえ、リュウタ。ユウヤさんには敬語を使った方がいいんじゃない？」

「ボクもそう思う」

私はたまらずリュウタを注意した。ユリノもそう思っていたのか、私に賛同した。

「私たちは敬語で話してるよ！！　ねっエイト！」

「うん、なんたってすごい人だからね」

エイト君達も敬語で話しているのね。なら私達もそうした方が良いのは目に見えてるわね。

「やっぱりそうした方がいいわね。……じゃあ、ユウヤさん、改めてよろしくお願いします！」

「ユウヤさん……よろしく……」

私は元氣良く挨拶し、ユリノはまでもじもじしていたけど、しっかり挨拶できた。

「おう！レナ、ユリノ、よろしく頼むぜ！！」

ユウヤさんって気さくな人なのね。一方リュウタは、なにかぶつぶつ呟いていた。それが終わるといきなり騒ぎはじめた。

「たあ　　ッ！　敬語なんてめんどくせー！！　タメ口じゃさすがにまずいよな。でもよ……あ　　ッわかんねー！！」

リュウタは頭を思い切りかきながら喚いていた。そこまで苦労することかしら……でも、リュウタって敬語で話したこと無かったよ  
うな……？

「リュウタ、そんなに焦るなよ。別にタメ口でもいいからよ」

ユウヤさんがそう言うと、リュウタはパアッと明るくなった。でも、その頭は、いわゆるアホ毛大増殖みたいになっていた。

「まじでか！　じゃあそういうことで頼むぜ！」

「おう！　分かった」

思ったより自己紹介で時間がかかったわね。私達はあまりここで油を売ってる場合じゃないので、とりあえず先に進むことにした。

しばらく歩いていると、隣を歩いていたエイト君が、私に話し掛けてきた。

「レナちゃんたちはつながりの洞窟には何か目的があつてきたの？」

あつ、そういえば、エイト君には教えてなかったわね。

「エイトくんはラプラスっていうポケモンを知ってる？」

私は、事前につなかりの洞窟を調べ、金曜日のポケモンは、ラプラスだと調べてきていた。

「いや……聞いたことないな。ユウヤさん、ラプラスって知ってますか？」

エイト君は、ラプラスを知らないみたいで、年長者のユウヤさんに聞いていた。

「ラプラス？……ああ、何度か見たことはあるぜ。水タイプでけっこう大型でキレイなんだけどよ、珍しいポケモンで生息地は分かってないんだ」

ユウヤさんは、大雑把にラプラスについて、エイト君に教えていた。でもなんだかわかりにくいわね。

「生息地が分かってないのか？ 今日、ラプラスがここで出るらしいけどな」

リュウタが即座にそう言った。もう、調べたのは私なのに……

「えっ！ それホント！？」 リナちゃんが、リュウタの話に一番に飛びついてきた。

「ああ、ホントだぜ。金曜日につながるの洞窟でラプラスが出るって聞いたんだ。なあ？」

「うん……ボクは直接は聞いてないけど、ラプラスを見てみたいんだ……レナもそうでしょ？」

「ええ。ユリノがいうとおりよ」

私達は、ラプラスについて、エイト君達に説明した。三人共興味あるみたい。

「ラプラスかあ！ 私も見たい！！ 皆でラプラス探そうよ！」

リナちゃんは凄い興奮していた。やっぱりリナちゃんがいると賑や

かね。

「うん！六人いればきつと大丈夫よ」

私も、リナちゃんに釣られて、少し大きい声を出した。あれっ？私ってこんなキャラだったかな？

「……でも、ラプラスがいそうなところ……探さないと……」

遠慮がちにユリノがそう言った。確かにラプラスがどこにいるかわからないからね。

「さつきもいったけど、ラプラスは水タイプ。あたり前だが水辺にしか生息できない。つまり、洞窟内で水があるところを探せばいいってことよ」

ユウヤさんはそういった。まあ、確かに水タイプのポケモンなら、水のある場所にいるわよね。

「よし、とりあえず近くに水がないか探そうぜ！」

『オ            ツ！』

リュウタの掛け声で、ユリノ以外の全員が、一斉に声を出した。やっぱりまだこういう雰囲気慣れてないみたい。でも、とにかく私達は団結した。

私は、なにごともなく、無事にラプラスを見つけられることを祈りながら、さらに奥へと歩きだした。





レナ編 第二十六話 団結（後書き）

レナ

「ラプラスどこかな？」

ユリノ

「どこかな……？」

リュウタ

「どこだ〜！」

みんなして同じようなことを言っなよ（汗）

レナ編 第二十七話 二人組（前書き）

第二十七話完成！

リュウタ

「やたら時間かかったな」

風邪引いてたから……では第二十六話をどうぞ！

レナ編 第二十七話 二人組

エイト君達と合流してから数十分後、まだラプラスを発見するこ  
とが出来ずにいた。

「地下にいるしか情報がねーからな」

「ま、気長に探そうぜ」

さすが年長者のユウヤさん。みんなをまとめるのが上手ね。

「……暗いね」

さすが地下に来ているだけあって、ライトがないと暗いわね。ま  
あ歩くのに問題はないんだけどね。

「そつえばさ、なんでラプラスを探す気になったの？」

首を傾げながら聞いてくるリナちゃん。まあ私は、ただラプラス  
が見ただけだったんだけど。

「私はラプラスが見たいから……かな」

「ボクも」

「オレはもちろんゲット！」

見ただけという理由の私とユリノとは対称的に、リュウタはゲ  
ットが目的だったのね。まあ珍しいポケモンは、ゲットしたくなる

気持ちもわからなくはないわね。

「そんなこと言うと、私も欲しくなってきたよ!」

ピョンピョン跳ねながらリナちゃんが言う。

「まあとりあえず見つけなきゃ話にならないよ」

リナちゃんを言葉で抑えるエイト君。リナちゃんの抑え方がうまくなってる気がするわね。

「とりあえず行こーよ!」

「え、え?」

なぜかリナちゃんは、ユリノを連れて先に行こうとした。なんでユリノを連れていったのかしら。

「リナのやつ、なに考えているんだ?」

うーん、さすがのエイト君も、リナちゃんのことを完璧に知っているわけじゃないのね……って当たり前かな。私だって、ずっと一緒のリユウタのことが、時々わからなくなるしね。

「どこかなー?」

先を歩いているリナちゃんが言った。水辺と言っても、かなりの数があるから……それに加えて、ラプラスの個体数も少ない……いつ見つかるかな。

「あれっ？ リナ、うつ上……」

「どうしたのユリノちゃ……ん!?」

どうしたの？ と聞こうとした刹那、ユリノとリナちゃんの動きが止まった。なにかなと思い、二人の視線の先をみると、そこには沢山の、コウモリのような生き物が天井に張り付いていた。

『キャー――!!』

二人の絶叫が、洞窟に響き渡った。それと同時に、そのコウモリのような生き物、多分ポケモン達が驚いて、そこら中をバサバサと飛び回りだした。

「うおっ！」

「キャッ！」

「こいつは……ズバットか！ 悪く思っなよ！ キノガッサ、マッハパンチ！」

ユウヤさんは、ボールからキノガッサという名前のポケモンを出した。キノガッサは目にも留まらぬ速さで、ズバットにマッハパンチを決めた。それを見て、ズバット達は驚き、その場から逃げ出した。

「みんな、大丈夫？」

エイト君がみんなの安否を気にする。一応私は大丈夫だけど、みんなは大丈夫かな？

「リナ、大丈夫？」

「うわーん！ エイトー！」

騒ぎながら、リナちゃんはエイト君の所に駆け寄った。あの調子なら大丈夫だと思うけど……

「ユリノ、大丈夫」

「大丈夫か？」

「ひつく……レナア……リュウタア……」

地面に座り込んだまま、ユリノは目に涙を溜めていた。

「ケガはない？」

「……うんっ」

「なら安心だな」

ケガがなくて良かった。リナちゃんも大丈夫だったし。

「そっちも大丈夫か？」

三人が私達に近づいてきた。リナちゃんもピンピンしている。

「なんとか大丈夫みたい」

「なら良かった。あまり時間もないし、早く行こうか」

エイト君の言う通りね。あまり長い間いることも出来ないしね。

「じゃあ行きましょ……!？」

行きましょと言おうとしたら、私の背中になにか冷たい物が当たった。えと……なに……？

「キヤアアアア!」

私は思わず絶叫を上げてしまった。さっきのこともあり、みんな一斉に私に近づいてきた。

「レナ!? どうした!」

「レナちゃん、大丈夫かい？」

リュウタとエイト君が私の心配をしていた。うう……今のなんなの？

「レナちゃん、首筋が水滴が流れてるよ？」

すい……てき? じゃあさっきのは……首に水滴が落ちた……だけ?

「まったくよく! 人騒がせだな〜!」

うう……リュウタの言うことに反論出来ない……みんなに心配かけちゃった……

「……なありユウタ、レナって抜けてる所があるのか？」

「おう。ドジだし抜けてるし、しっかり者に見えるけど、実際は……ぐほっ！」

私はとっさにハリセンを取り出し、リュウタの頭を叩いた。えっ？　どこからハリセンを出したかって？　それは……秘密よ。

「リュウタひどい！」

「悪かったって。ちょっとしたいたずら心ってやつ……ぐはっ！」

私はもう一回リュウタの頭を、ハリセンで叩いた。これぐらいやらないと、リュウタは堪えないからね。

「一体どこからハリセンだしたんだろう……」

「さあ……」

エイト君とリナちゃんがなにかボソツと言っていたけど、私の所までは聞こえなかった。

「とつとにかく、ラプラス探しにレッツゴー！」

リナちゃんが元気よく言い、私達の最前列を歩きだし、私達もそれに続いて歩きだした。



まさか、この会話を聞いている存在がいたとは、まだ私達は知るよしもなかった。

しばらく歩いていると、目の前から話し声が聞こえてきた。

「この辺りのはずですが……」

「気長に待つんだな」

その声の主は、すぐに私達の目に入った。一人は身長が高く、長髪で眼鏡をしていた。もう一人は、縦横共に大きく、貫禄のある体をしていた。

「どうしたんですか？」

私はその二人組に声をかけると、長身の方が反応した。

「おや、あなた達は……？」

「あつ私はワカバタウンのレナです」

「僕はエイト。同じくワカバタウン出身です」

私に続いて、エイト君も自己紹介をした。それに続いて、みんな自分の自己紹介をした。

「私はシン。ポケモンレンジャーをしています」

「オイラはヨウヘイなんだな。オイラもポケモンレンジャーなんだな」

長身の方はシンさん、貫禄のある方がヨウヘイさんね。声の質からして、シンさんは男の人みたい。まあ、ヨウヘイさんは、言わずもがなって感じ。

それにしてもポケモンレンジャーなんて初めて見たわね。でも、こんな所で、ポケモンレンジャーがなにをしているのかしら。

「ここでのなにを？」

エイト君がそう聞いた。私と同じことを思っていたのかしら。

「最近このラプラスを狙っているハンターがいるんですよ」

「そこで、オイラ達がラプラスの保護をしに来たんだな」

シンさん、ヨウヘイさんの順に説明する。まさかラプラスを狙ったハンターがいるなんて……

「そうだ、見た所あなた達は腕が立ちそうだ。よろしかったら、私達の手伝いをしてくれないでしょうか？」

「もちろん!!」

一番に反応したのはリナちゃん。正義感が強いだね。まあ私も断る理由がないしね。

「ありがたい。ラプラスの居場所はわかっているから、一緒に行こうか」

「だな」

先に歩いて行ったシンさんを、リュウタが追い掛けて行った。

「じゃあオイラ達も行くんだな」

「そうですね……ほら、ユリノ」

「うつ……うつ」

私の後ろに隠れているユリノの後押しをしながら、私達は更に向へと進んで行った。

レナ編 第二十七話 二人組（後書き）

レナ

「同行者が増えたわね」

ユリノ

「……………そうだね」

あんまりユリノは嬉しそうじゃないな……………当たり前かな？

レナ編 第二十八話 レンジャーの力（前書き）

第二十八話完成！

リュウタ

「八人か」

レナ

「多いね……」

気にしない気にしない

では第二十八話をどうぞ！

## レナ編 第二十八話 レンジャーの力

私達は、先に行ってしまったシンさんとリュウタのあとを歩いていた。最初は、ただ黙々と歩いているだけだったけれど、やっぱり知っている人といると、気が楽になるわね。

「エイトはポケモントレーナーなんだな〜？」

エイト君と、ヨウヘイさんは、楽しそうに会話をしていた。

「ところでシンさん、ラプラスがいるところまでどのくらいかかるのか分かりますか？」

私は、さっきから気になっていたことを、シンさんに問い掛けた。

「それなんですけどね……思ったよりも時間がかかりそうなんですよ。ラプラスが生息している部屋はここからは遠いですからね」

「ええー！……じゃあまだまだ歩かなきゃってこと！？」

そのように言ったのはリナちゃん。まあそう思うのもわからなくはない。正直私もそう思ったから。

「リナ、しょうがないだろ……というか旅は基本徒歩だ！ ちゃんと心得とけ」

ユウヤさんから、多分リナちゃんにとっては、キツイ一言が飛んできた。

「リナ……ユウヤさんのいうとおり……」

それに加えて、ユリノもユウヤさんに同意していた。

「……はぁい」

一応リナちゃんは返事をしたけど……多分反省はしていないんだろ？なぁ……多分だから実のところはわからないけど。

「とりあえず、先に進もうぜ！」

リュウタが、場の流れを変えるように、そう号令をかけた。いつもこういう場面では空気の読めない言動をするのに……珍しいわね。

「そうね、行きましょう！」

「おう！行こーぜ！」

「うん……！」

「行こう行こう！！」

「行くんだな……」

みんなそれぞれの反応を示したけど、エイト君だけは黙ったままだった。いつもこういう場面ではきちんと反応するのに……

「さあ、行きましょうか……？」

「あっ……はい！」

シンさんが、見た感じ落ち込んでいたエイト君に、優しく声をかけた。シンさんって気配り上手なのね。

「ちょ……なんだよこれは!!」

順調に歩いていた私達だったが、急に先を行っていたリュウタ達の足が止まった。

「……どうしましたか？」

シンさんがそれに気づき、リュウタ達の所に一目散に駆けつけた。

「岩があるからこれじゃあ先に進めないよー……」

リナがちゃんが、私達に状況を説明する。確かに、目の前には、大きな岩が道を塞いでいた。

「困ったわね……」

私は小首をかしげながらいった。これだと通れないわね……どうしよう……



「ユウヤさん、なにか方法はありませんか？」

エイト君は、ユウヤさんに助け船を流した。

「ちょ……なんで俺に話を振るんだよ！　ここは普通あつちの二人にいうべきだろ……！！」

ユウヤさんは、まさか自分に話が振られるとは思っていなかったのか、焦りながら言った。その視線の先にいるのは、シンさんとヨウヘイさん。

「みなさん、安心して下さい。私達はポケモンレンジャー、ターゲットクリアはお手のものですよ……ヨウヘイ！！」

「ここはオレに任せるんだな……！！」

ヨウヘイさんは、ズボンに付いている小型の機械を外す。なんの機械なんだろう……

「ねえ、あれ……何？」

ユリノも、不思議そうな顔をしてその機械を見ていた。私と同じ事を思ったのかな。

「あれは、おそらく『キャプチャ・スタイラー』だ。ポケモンレンジャーの必需品ってとこだな」

「へえーキャプチャ・スタイラーかあ……」

あれがキャプチャー・スタイラーかぁ……初めて見るわね。リナちゃんも興味津々みたい。

「みなさん、辺りにポケモンがいないか探してもらえませんか？」

シンさんが、私達に呼びかける。見た感じ、この辺りにポケモンはいない。ポケモンがいないと、キャプチャ出来ないものね。

「うっし！ みんな探そうぜ！！」

「ええ！」

私達は、一斉にポケモンを探し始めた。簡単に見つければいいけど……

「ポケモンー！ でてこーい！」

リナちゃんが、大声で叫んでいるが、当然ながら、ポケモンは寄ってこない。あんな大声だと、怯えて出てこないよ。

「リナ、ちょっとは静かにしろ！」

思った通り、リナちゃんはユウヤさんに注意されている。

しかも、どうやらシンさんもイライラしているみたい。リナちゃん……もう少し周りの状況を考えようよ。

「レナ、ポケモンいない……」

「確かにいないわね……エイトくん、そっちはどう？」

「うーん……全然見つからないよ」

エイト君に聞いてみるも、返事はいないとのこと。この調子で見つかるのかなあ？

「なあ、ユウヤさんよ、これ怪しくないか？」

「ん……？ リュウタ、どれのことだ？」

「これだよこれー！」

「！ー！」

リュウタがユウヤさんに何かいつているみたいだけど、私達のいる場所までは、声は届かなかった。

「お　い、ポケモン見つかったぞ　　！ー！」

ユウヤさんが一人、凄いスピードで、私達のところに走ってきた。一方のリュウタは、なにか意外そうな顔をして駆け寄って来た。

「ユウヤさん、どこにポケモンがいるんですか？」

エイト君が尋ねる。確かにポケモンのようなものは確認できなかった。

「まあ、とにかくこっちに来てみるよ」

ユウヤさんは、さっきまでいた場所に、私達を連れて行った。

「ねえリュウタ、なんか意外そうな顔してたけどどうかしたの？  
いかなかったらハリセンで叩くわよ？」

私は、手にハリセンを用意しながら言った。えっ？　ハリセンはどこから出したって？　……それは……女の子の秘密

「ちょ……ハリセンは勘弁してくれよ。で、なんでかって？……それは見ればわかる！！」

リュウタは、シュピッと私に親指を立てながら、そう言った。一体なにを見つけたのかしら……

「……………なにこれ……………」

最初に言葉を発したのはリナちゃんだった。

周りを見てみると、当の本人であるユウヤさん、それにシンさん、ヨウヘイさん以外は、みんな啞然としている。

だって、ユウヤさんが”ポケモン”だというのは、私にはただの少し小さめの岩にしか見えなかったから。

「ユウヤさん、これのどこがポケモンなの？」

私は、とっさにユウヤさんに聞いた。

「……まあ、確かにこれはポケモンには見えないよな。でも、これは真正銘ポケモンだ！……そうだろ？ レンジャーさんよ」

得意気にユウヤさんはそう言った。シンさんは、フムと頷き、

「……お見事ですな。あなたは観察力がよろしいようです。この岩は”ゴローン”というポケモンなんですよ」

と言った。これが……ポケモン？ 岩にしか見えないけど……

「ユウヤのいうとおりなんだな……」

「おお、ビンゴー！ お前らちょっとは尊敬しろよ！」

一人で喜ぶユウヤさん。もしかして……リウタやリナちゃん見たいにお調子者なの……？

「さすがです。ポケモンリーグベスト4は嘘ではなさそうですね」

「お……おう……」

シンさんから出た言葉からは、あまりユウヤさんを信用していなかったらしく、ユウヤさんは結構落ち込んでしまった。

「……コホン 本題に戻りますが、この中で水タイプを持っているかたはいませんか？」

「はいはい！！わたしもってますよ……」

「……ボクも持つてるよ」

対称的な二人が、順番に名乗り出た。ユリノはマリルがいるし、リナちゃんにはミズゴロウがいたから適任ね。

「ならばそのポケモンを出して、水タイプの技でゴローンに攻撃してみてください」

「わかりました！ ミズゴロウ、お願い！」

『ガヤガヤー！！』

「出てきて、マリル！」

『リルー！』

ユリノとリナちゃんが、一斉にポケモンを出した。二匹とも異存はないみたいね。

「「水鉄砲！！」」

『ガヤー！』

『リルー！』

リナちゃんとユリノは、一斉に同じ技を指示した。初めてなのに、二組共息がピッタリ。ちょっとビックリしちゃった。

水鉄砲は、ゴローンに直撃した。

動くそぶりは無かったから、まあ当たり前と言ったら当たり前ね。

『……ゴローン!!』

弱点の水鉄砲が効いたのかゴローンが今にも暴れそうにしている。  
わわっ！ こっちに来そう！

「リナさん、ユリノさん、ありがとございます……ヨウヘイ、頼みますよ！」

「了解なんだな……キャプチャ・オン！ ……なんだな……」

ヨウヘイさんの、少しのんびりした声と同時に、こまのような機械が、キャプチャ・スタイラーから出てきた。

「行くんだな……！」

ヨウヘイさんは、キャプチャ・スタイラーをグルグルと回している。一方ゴローンは、さっきからこまのようなものから発せられている光の線で囲まれている。あれはなんなのかしら……

「これで終わりなんだな……！」

ヨウヘイさんがさういって、ゴローンは、こまのような機械から発せられていた光に包まれた。すると、だんだんおとなしくなっていくた。

「キャプチャ完了なんだな……ゴローン、さっそくあの岩を壊すんだな……！」

『ゴローン!!』

ゴローンは、ヨウヘイさんの指示を聞き、岩に向かってものすごいスピードで転がっていった。

ゴローンが岩にぶつかった瞬間、凄まじい爆発が起きた。

「みなさん、大丈夫ですか？」

ケムリが充満していて、みんなの顔は見えない。それを見越してか、シンさんがみんなの安否を心配した。

「……ゲホゲホ、なんとか大丈夫よ」

「どうってことねーな」

どうやらみんな無事みたい。ケガが無くて良かったわ。

しばらくすると、ケムリがはれて視界が開けてきた。

「おー！岩が粉々だぜ！」

「すごいすごい!!」

リュウタとリナちゃんが、砕け散った岩を見てはしゃいでいた。

『ゴローン!!』

そんなとき、ヨウヘイさんがキャプチャしたゴローンは、鳴き声を上げながら、奥のほうへいつてしまった。



「ゴローン！ 待つんだな~~~~!!」

ヨウヘイさんが、大慌てでゴローンを追いかける。って、キャプチャしたポケモンって追い掛ける必要があるのね。

「リュウタ、私たちも行こうよ!」

「うっし！ 行くぞ!」

さっきまではしゃいでいたリナちゃんとリュウタもヨウヘイさんを追いかけて行った。もうっ！ また勝手な行動して!

「リュウタ！ 待ちなさいよ!!」

とっさに止めようとしたけど、二人の耳には入らなかったみたい。

「リュウタたち大丈夫かな……?」

ユリノも二人の心配をしている。確かにあの二人だと……二人には悪いけど、不安しかないわね……

「……あいつらだけだと心配でたまんねーから俺が追いかける。お前らはあとからゆっくりこい!」

ユウヤさんが、なにかを決断したかのようないい方をして、三人の後を追いつけて行った。ユウヤさんがいれば、多分大丈夫だと思うけど……

私は何事もなければ良いと思っていたけど、ちらつと見えたエイ  
ト君の不安そうな顔が、私の頭から離れなかった……

レナ編 第二十八話 レンジャーの力（後書き）

レナ

「リユウタ達大丈夫かな……」

ユリノ

「心配……」

きつと大丈夫……だよ？

レナ

「なんで疑問形？」

レナ編 第二十九話 逃げろ！（前書き）

第二十九話完成！

リュウタ

「今回はオレ視点だな」

まあそういうことさ。では第二十九話をどうぞ！

## レナ編 第二十九話 逃げろ！

オレとリナは、ゴローンを追い掛けていったヨウヘイを追い掛けていた。

「どこまで行っただ？」

「もう少し先かも？」

そうだなとオレは判断し、もう少し奥に走っていった。

しばらく走っていると、オレ達の前にしょんぼりとしているヨウヘイを見つけた。

「ヨウヘイさん」

「あつりユウタはリナなんだな」

「急に走るなよ」

「悪かったな」

右手で頭をかきながら謝った。まあ……反省しているのか？

「でもなんで追い掛けたんですか？」

確かにリナの疑問もわかるな。別に逃げられても、新しいポケモンをキャプチャすれば良い話だもんな。

「この辺りにはあまりポケモンがないんだな」だからもう少し手

持ちに残しておきたかったんだな」

あゝなるほどな。確かにそれはさっきの搜索で実証済みだからな。手元に残したいのもわかるな。

「ハアハア……おい……」

ん？ 誰かの声がしたな。後ろを振り向くと、かなり疲労したユウヤさんが走ってきた。

「ハア……やっと……追いついたぜ……」

「ユウヤさん疲れすぎ」

「お前達が速いんだよ！」

声を荒げながら反論するユウヤさん。まあオレは足には自信あるぜ！

「それより……ヨウヘイさんよ。随分……ハア……走ってきたけど……ラプラスの場所は……ハア……わかってるのか……？」

息が絶え絶えながらも、とりあえずラプラスの場所を確認するユウヤさん。うゝん……尊敬するぜ……！

「任せるんだな。ここからほとんど一本道なんだな」

そういえばここに来るまでに、曲がり道はなかったな。まああったら全員合流なんてできないよな。

「そういえばレナ達は？」

そう、ユウヤさんが来たなら、レナ達も来ているはずだ。だけど、そこにはレナ達の姿はなかった。

「あいつらにはゆっくり来るように言った。そのうち来るだろうよ」

随分大雑把だな……あいつら、ちゃんとオレ達に追いつくか？  
レナはドジだしな。

「とりあえず待つてるのもなんだしな。先に進むんだな」

ヨウヘイの、のんびりした声が洞窟に響いた。まあ待つのはオレの性に合わないからな！

「じゃあ行くかー！」

オレが歩きだすと、なにか固いものを踏んだ。んっ？ なんなんだ？

その様子を見て、ヨウヘイが苦笑いしながら、オレの足元を指差した。

「アハハ……リュウタ、それ……ポケモンなんだな」

「はっ？」

恐る恐るしたを見ると、さっきのゴローンに似たポケモンがいた。まさか……これは……マズインじゃね？

『イツシー!!』

オレの足から、鳴き声を上げながら移動した。とっさにポケモン図鑑を向けた。名前はイシツブテ。洞窟に多く生息するポケモンらしい。ちなみにゴローンの進化前みたいだ。

「ちっ！　また追ひ払ってやるぜ！」

「私も手伝うよ！」

ユウヤさんとリナが意気込む。だけどそれはすぐに無くなった。さっきまでいたイシツブテの数が、一匹から、それこそ数十匹単位になっていた。

「……あつれー？」

オレは思わず気の抜けるような発言をしてしまった。なんせ全部のイシツブテが、怒りに満ちていたからな……とっさにオレは判断した。逃げるが……勝ちだ！

「これはマズイんだな～！　逃げるんだな～！」

ヨウヘイもオレと同じことを考えていたんだな。それを合図に、オレ達は一斉に駆け出した。

「うおー！　連続でダッシュはキツイなー！」

そういえばユウヤさんは、さっきまで走ってたからな……でもそんなことを言ってる場合じゃないぜ～！

「とにかく走れ～!!」



「疲れたよー!!」

リナが早くもギブアップ宣告。このままだとかなりマズイ！――  
か八かやるか！

「リナ！ あいつらには悪いが、追い払うぞ！」

「任せてー！ ミズゴロウ！ もう一回お願い！」

『ギャー!!』

「頼むぜブイゼル！」

『ブーイ!!』

「「水鉄砲!!」」

オレ達は、一斉に指示を出した。ブイゼルとミズゴロウはそれに  
答え、勢い良く水鉄砲を発射した。

「どうだ？」

オレはイシツブテ達を確認すると、まだ何匹かは立っていた。残  
ったイシツブテ達は、突然体が光始めた。

「なんなのこれー！」

「マズイんだなー！」

「だな……やつら自爆するつもりだ！ 早く逃げるぞ！」

じ・ば・くだと〜！？ そりゃマズすぎだろ！！ 自爆は自分が戦闘不能になる代わりに、相手にダイダメージを与える。生身のオレ達が喰らったらケガじゃすまねーぜ！

「走るんだな〜！」

オレ達はヨウヘイの言う通りに走り出す。だけど走り出してすぐに、道が二手に別れていた。

「どうするの？ どっちに行くの？」

「確か……左のはずだな〜！」

ヨウヘイの指示通りに、左に行くオレ達。それからすぐに爆発音が聞こえた。なんとか間に合ったみたいだな。

「逃げ切れたな……」

「疲れたよ……」

ユウヤさんもリナも声に元気がない。正直オレもかなり疲れたな。

「ってあれ？」

疲れながらも、先頭を歩いていたリナが足を止めた。

「どうしたんだな〜」

「行き止まり〜！」

リナの言う通り、オレ達の前には、頑丈そうな岩の壁が行くてを阻んでいた。

「おっおかしいんだな……ちょっとシンに連絡を入れるんだな〜」

ヨウヘイは、ポケットから、多分トランシーバーか？ それを使って連絡を取ろうとしていた。

「……？ 電波が届いていないんだな〜。ちょっと電波が届く場所まで戻ってくるんだな〜」

そう言いながら、ヨウヘイはもと来た道に戻っていきこうとした。

「すぐに戻るからここで休んでていいんだな〜」

それだけを言い残し、ヨウヘイは走り出した。

「どうするよ?。」

「お言葉に甘えさせてもらおうぜ」

「私疲れたよ〜……」

オレが二人に聞くと、二人共休む気満々みたいだな……まあいいや。お言葉に甘えんとするか。

「フウ……」

オレ達は手頃な岩を椅子にして、とりあえず休むことにした。

レナ編 第二十九話 逃げろ！（後書き）

リュウタ

「……………疲れた」

いつもの元気はどうした？

リュウタ

「……………無理だ」

仕方ないな。せつかくレナとユリノを誘ってご飯食べに行こうしたのにな。

リュウタ

「うっし！ 行くぜ」！

単純だな。まあいいや

レナ編 第三十話 真実（前書き）

第三十話完成！

リュウタ

「レナ達大丈夫か？」

まあお前が会つのはまだ先だね

では第三十話をどうぞ！

レナ編 第三十話 真実

なんとか道をふさいでいた岩を壊すことが出来たのまではよかった。でも、ヨウヘイさんは、逃げたゴローンを追って、一人で洞窟の奥へと走って行ってしまった。

その直後、ヨウヘイさんを追いかけて、リナちゃんとリュウタが先に行ってしまった、ユウヤさんまでもが先に行っちゃった……

ユウヤさんは、『俺が三人を追いかけるから後からゆっくりこいていったのけど、私には、不安な気持ちしかなかった。』

「リュウタたち大丈夫かしら……？」

私はそう呟いた。なぜだかわからないけど、言いようのない不安感が、私の心を支配していた。

「……ボクたちが早く追いかけないと！」

普段おとなしいユリノも、三人が不安なのか、いつもより声を上げている。

「皆さん、不安になるのはよく分かりますが落ち着いて下さい！」

私達を落ち着かせるために、シンさんが言う。さすが年長者のシンさん。やっぱり年長者にそう言われると、少し落ち着くわね。

エイト君とユリノを見ると、二人の表情はさっきより穏やかになっている。ここはシンさんに感謝ね。

「ここから先はほとんど一直線です。なので、余程の事が無い限りすぐに追いつくことができると思います。焦らずに前に進みましょう」

一本道？　ならいやがおうでもみんなと合流できるね。安心したわ。

「シンさんのいう通りね。行きましょう！」

「……うん！」

シンさんの言葉を信じ、相槌を打った。ユリノも私に続いて返事をした。

一方エイト君は、どこかぼーっとしているようだった。

「エイトくん、ボーツとしてるみたいだけど大丈夫？早くリュウタたちを追いかけましょー！」

少し不安になり、エイト君に声をかけると、ハッとしたあと、

「そうだね」

と少し素っ気ない感じで、エイト君は答えた。やっぱりリナちゃんの事が心配なのね。少しそっとしておこうかな。私はそう判断し、シンさんの後を追いかけた。

でも、一本道なのに不安そうなエイト君の顔が、私の心から離れなかった。



私達は、しばらくたわいもない話をしながら歩いていると、道が二手にわかれている。さっきシンさんが、”ほとんど一直線である”とあえていった意味はこういうことだったのね。でもどっちに行けば良いのかしら……？

「シンさん、どっちに行くんですか？」

とつさに私はシンさんに聞いた。

「地図を確認するので少し待っていて下さい……えー……この分かれ道は”右”へ行くようです」

地図を取り出し、地図とにらめっこしながら、私達に教えてくれた。

「……右にいきましょうですね」

なぜか、エイト君が再度確認を取る。シンさんの言葉が信用できないのかしら……

「間違えありません。ここをしばらく行くとラプラスの部屋へたどり着けるようです。ヨウヘイたちも到着しているかもしれません」

「リュウタたち、ラプラスの前でギャーギャー騒いでないかしら？  
ユウヤさんが止めてくれたらいいけど……」

リュウタ達の行動を、さきよみするように私は言う。自分で言うてなんだけど、ありえるから怖い。それにリナちゃんと一緒に騒いで、水に落っこちちゃうかもしれない……考えれば考えるほど不安になる。

「じゃあ、右に行くわよ」

私はそうそう言いながら、分かれ道の右の方へ歩いていった。シンさんも、私の後に続いて歩いていった。

「……ねえ、エイト……」

後ろを振り向くと、ユリノとエイト君が話をしていた。ユリノが私達以外の人に、自分から話し掛けるなんて珍しいわね。

「……ここ周辺、何かおかしいって思わない？」

ユリノとエイト君が、なにか話をしているのはわかるけど、私の場所までは、二人の声は届かなかった。

「……この辺りには、大きな石や岩がたくさん落ちてる。それに、よく見たら少し天井が崩れてるような気がする」

少し近づくと、ユリノとエイト君は上を見上げていた。  
うーん……なにを話しているのかしら……私は少し気になって、二人の方に近づいた。



その歌声を聞きながら、私はエイト君達に言う。

「……もしかして、ラプラス？」

首を傾げながら、ユリノはシンさんに問い掛けた。

「その可能性はきわめて高いです」

「「えっ！！」」

シンさんの言葉に驚き、私とエイト君は同時に驚いた。ユリノも声には出していないけど、やっぱり驚いているみたい。

「皆さん、前をよく見てください。少し明るいのが分かりますか？  
……あそこにラプラスが生息しているのでしょうかね」

シンさんのいう通り、奥のほうは明るみがある。外から光でも差してるのかしら？ なんとなくだけど、私には、あそこにラプラスがいるような感じがした。

「早くいこう！」

ラプラスがいるかもという可能性がそうさせたのか、エイト君は興奮しながら、私達の前を走り出した。残された私達も、その後を走り出した。

「わあ…キレイ…!!」

ユリノが思わずそう言う。多分ユリノが言わなかったら、私が言っていたと思う。

ラプラスのいた部屋は、まるで湖のような場所だった。水が透き通っていて、とても神秘的な感じがした。

そして、その歌声の主、つまりラプラスと思われる一匹のポケモンがいる。

「~~~~~」

そのポケモンは、私達の前でも、美しい声で歌いつづけている。

私はポケモン図鑑を、ラプラスと思われるポケモンに向けた。名前はラプラス。人を乗せて泳ぐのが好きで、人の言葉を理解するみたい。へえ……人の言葉を理解できるんだ……お利口さんなんだね。

「……シンさん、早くラプラスを保護しないと!」

少し焦りながら、私は言う。早くしないとポケモンハンターが来ちゃうよ!

「……………そうですね……さっそく保護しましょうか!」

いつもより強く、どこか怖いような雰囲気を感じながら、シンさんは言い放ち、ベルトからモンスターボールを取り出した……あれ

？　なんでポケモンレンジャーのシンさんが、モンスターボールを持っているの？

「ドラピオン、破壊光線」

「ドラ　　ッ！！」

シンさんは、ドラピオンというサソリのようなポケモンを出して破壊光線を指示する。たしか……破壊光線は、凄い威力の高い技のはず。保護するのが目的なら、いくらなんでもやり過ぎよ！

「……ラプーッ！」

突然の攻撃に、ラプラスは、反応することが出来ず、破壊光線が直撃し、苦しそうに悲鳴をあげた。ラプラスが！　なんでそんな酷いことを……

「シンさん、今のはひどいと思いますよ！！」

私は、シンさんに、会ってから初めて反発する。だって今の行動は、どう見ても保護には見えない。

ふとユリノやエイト君を見ると、ユリノはとても苦しそうな顔をしている。ラプラスが心配なのね。一方エイト君は、私と同じ気持ちなのか、顔を歪ませている。

それ以前に、本当に、シンさんはポケモンレンジャーなの？　エイト君やユリノを見ると、少し疑問があるような顔をしていた。この時、私の中に、あることが浮かんた。

シンさんは、本当にポケモンレンジャーなの？

「フフフフ……ハッハッハッハッハッ……！！」

シンさんは、今までなかった、不気味な笑い方をしていた。その表情からは、なにを考えているか、私には判断出来なかった。ううん、一つだけわかる。シンさんは……ポケモンレンジャーじゃない。

「……シンさん、あなたはいったい何者なんですか？」

私達を代表して、エイト君が、シンさんに聞いたのだす。少し声は奮えていたけど、表情から、怒っていることはわかった。

「……あなたたちはここにくるまで気づかなかったのですね……そこまでバカな連中だとは思っていませんでしたよ。もちろん、私はレンジャーではありません……『真正正銘の』ポケモンハンター」なのですよ」

シンさんは、ニヤリと不適の笑みを浮かべながら、私達が最も聞きたくなかったことが、シンさんの口から語られる。

シンさんはポケモンレンジャーじゃなく……ハンター……そう、私達は……騙されていた……

レナ編 第三十話 真実（後書き）

レナ

「……………」

ユリノ

「……………」

なんか前にもこんな雰囲気があったような……………デジャヴュ？



レナ編 第三十一話 ピンチ（前書き）

第三十一話完成！

ユリノ

「ラプラスが……」

レナ達はラプラスを守れるのか！？ では第三十一話をどうぞ！

## レナ編 第三十一話 ピンチ

シンさんはハンター……その事実をたたき付けられた私達は、その場に呆然としたまま立ち尽くしていた。

「なら……ハンターが狙っていて、保護するって話も……」

「ふむ、半分正解で半分ハズレというわけですね」

私の言葉に、シンさんが答える。

でも、私の中で、何個かふに落ちないことがあった。

「そんな……いや、なら何故レンジャーしか持っていないスタイラーを持つている！それに、何故ラプラスを捕獲するのだけが目的なら、僕達と一緒に行動したんだ！」

声を荒げながら、言葉をぶつけるエイト君。いや、ここはたたき付けていると言った方が的確かもしれない。

「なら順番に答えるところか……まず一つ目の質問だが……私はスタイラーなど持っていない」

「で……でもキャプチャしていた……」

ユリノの言う通り、ヨウヘイさんはスタイラーを使い、ゴローンをキャプチャしていた。なのにシンさんはレンジャーじゃない……？ 一体どういうこと？

「わからないようですね。なら……」

「オレが説明するんだな」

私達の後ろから、貫禄のある体つきの男の人がいた。ヨウヘイさんだ。

「オレはもととレンジャーだったんだな」だけど、任務に失敗してクビにされたんだな。自暴自棄になっていたオレはシンと一緒にハンターになったんだな」

「まあもと私はハンターでしたし、元レンジャーがいると、なにかと都合がよろしいんでね」

ヨウヘイさん、シンさんと私達に説明する。でも、レンジャーがクビになったらスタイラーを没収されるはずじゃ？

「まあオレはスタイラーを無事に確保したまま、ハンターになれたんだな」

「……でも、向こうでなにかしらのプロテクトが掛けられるんじゃないかな」

エイト君の言う通りだ。レンジャーのスタイラーは重要なアイテムだから、悪用されないようにされてるはずなのに……

「まあその辺は、私の頭脳でどうにでも出来ますよ」

トントンと、自分の右のこめかみ辺りを触りながらシンさんが言う。わかってはいたけど、本当に頭良いのね……

「二つ目の質問だが……お前達に会う前、お前達の会話を聞いていてまして、ラプラスを探しているとか言っていたじゃないですか。さすがにあの時に邪魔されるのは面倒でしてね、お前達の通るルートで待ち伏せし、レンジャーのフリをして、お前達を信用させたのですよ」

まさか……最初からはめられていたということ……私達は、シンさんの手の平で踊らされていたということ？

「まあとりあえずラプラスは確認できた。捕獲に入る。ヨウヘイ、時間を稼げ」

「任せるんだな」ヒポポタス、行くんだな」

ヨウヘイさんは、モンスターボールから、黄土色をした、カバのようなポケモンを出した。

私は図鑑をそのポケモンに向けた。名前はヒポポタス。乾燥地帯に住むポケモンで、汗の代わりに砂を分泌するポケモンみたい。

「さて……捕獲するか」

そう言いながら、シンさんは右腕に付けていた機械のような物をラプラスに向けた。

「させない！ ヒノアラシ！ 火の粉だ！」

「毒針」

エイト君はヒノアラシをとっさに出し、火の粉を指示する。シン

さんはその機械を向けるのを止め、ドラピオンに技を命じる。

二つの技はぶつかりあったが、だんだんヒノアラシの攻撃は押されてきた。

「ユリノ、私達もやるよ！ エイパムお願い！」

「うっうん！ 行ってマリル！」

『ウキー！』

『リル！』

二匹は元気良くボールから出てくる。準備は出来たわ。私はちらつとラプラスを確認する。破壊光線のダメージが大きいのか、その場で苦しんでいる……いま助けてあげるからね。

「スピードスター！」

「水鉄砲！」

二匹は私達の指示通りの攻撃をする。エイパムは星型のエネルギー弾、マリルは勢いのある水を、毒針に向けて放った。そのおかげで、三匹の攻撃は毒針を破り、ドラピオンに向けて迫っていく。

「ほっ……ミサイル針」

冷静に、尚且つ的確に技を指示するシンさん。ドラピオンのしつぽから、たくさんのミサイルを連想させるようなエネルギー弾を放

ち、私達の攻撃をすべて相殺してしまった。

「ラプラスは僕達が守る！ シン！ あなたには絶対に渡さない！」  
今までとは違う呼び方で言うエイト君。騙されたことや、ラプラスを狙うシンさんに対しての怒りがそうさせてるのかしら？

「ヒポポタス！捨て身タックルなんだな！」

『ヒポー！』

凄い勢いで突進してくるヒポポタス。捨て身タックルは、自分に反動が返ってくるけど、凄い威力の高い技。まともに受けたらマズイわね。

「マリル、アクアジェットっ迎え撃って！」

『リルー！』

えっ？ 相性が良いとはいえ、無謀すぎるよ！ 私はそう思ったけど、だんだんとマリルが押してきて、最後にはヒポポタスは吹き飛ばされてしまった。

「凄い……」

私は思わずそう呟く。エイト君もこっちを見ながら驚いていた。

「一気にいつて！ 水鉄砲！」

『リルー！』

マリルは体制を立て直し、ヒポポタスに向けて水鉄砲を放つ。それはヒポポタスに直撃した。ヒポポタスはその場で目を回していた。

「やられたんだな〜！」

「ふむ……まあヨウヘイは戦闘は専門外だし、まあ上出来でしょう。では……お前達を倒し、ラプラスの捕獲をしましょう」

そう言い放つシンさん。その目からは、凄い威圧感を感じる。うん……気持ちで負けてられない。

「エイパム、スピードスター！」

「ヒノアラシ、火の粉！」

エイパムはジャンプし、軽くしっぽを振る。そこから星型のエネルギー弾が発生し、ドラピオンに向かって飛んでいく。その後を追うように、ヒノアラシの火の粉も飛んでいく。

「シャドーボール」

ドラピオンは、漆黒の球体を作りだし、私達の攻撃に向けて放つ。たった一発の攻撃で、私達の攻撃は打ち消されてしまった。

「くっ……」

「レベルが違うのですよ。クロスポイズン」

たじろいでいる私達に、ドラピオンは両腕を交際した。すると、そこから×の形をした紫色のエネルギーが、エイパムとヒノアラシ

に向けて放った。

「マズイよ!」

「電光石火で避けるんだ!」

エイト君は危険と判断し、電光石火を指示する。私もつさに同じ指示をエイパムにした。それが上手くいき、完全には回避出来なかったけど、直撃は免れた。

「強い……」

「気持ちで負けちゃだめだよ……マリル、アクアジェット!」

『リルー!』

「私達だって……エイパム、乱れ引つかき!」

「ヒノアラシ、電光石火!」

ユリノに続き、私達は指示を出す。それぞれの技でドラピオンに突進していった。

「やれやれ……受け止めろ」

えっ? 三匹の攻撃を、ドラピオンは易々と受け止めてしまった。

「毒針」

『ウキー!』



『ヒノー！』

『リルー！』

しまった！ 至近距離でエイパム達は毒針を受けてしまった。威力はそこまで高くなかったからやられはしなかったけど、確実にダメージは受けていた。

「マリル、捨て身タックル！」

『リルー！』

「学習しないですね……受けとめなさい」

マリルの必死のタックルも、簡単にドラピオンに防がれてしまった。でも、なぜか、だんだんドラピオンの体が後ろに下がってきている。もしかして、マリルがドラピオンにパワーで勝ってるの？

「なるほど……特性の力持ちですか」

力持ち？ 確かもとのパワーが高くなる特性よね？ だから見た目よりパワーがあるのね。

「雷の牙」

「っ！？ マリル、一回引いて！」

ユリノのとつさの判断が上手いきき、ドラピオンの攻撃は空を切

る。なんとか大丈夫だったみたいね。

「甘いですよ。クロス……」

「させない！ 煙幕だ！」

ヒノアラシは黒い煙を口から出した。これで少し時間が稼げるわね。

「ふむ……なら……」

一方、シンさんはなにか考えているような発言をし、なにか技の指示をしていたけど、私達の所までは届かなかった。

「どっ……どうするの？」

「この煙幕を上手く利用して、一気に攻め込むよ」

「でもどうするの？」

「マリルに、煙幕の中にいるドラピオンの場所を、音で感知してもらうんだ。わかったら一気に技を叩き込むんだ」

作戦の内容を教えてくれるエイト君。なるほど、それなら上手くいくかもしれないわね。

「ユリノちゃん。頼めるかな」

「うっうん！ マリル、お願い！」

『リル！』

頷きながら、マリルは周りの音に集中し始めた。

『……リルリル！』

目を開けると、マリル音の聞こえてきた方を指差した。

「よしつ。ヒノアラシ、電光石火！」

「マリル、アクアジェット！」

「エイパム、乱れ引つかき！」

それぞれの技の指示を受け、煙幕の中に入っていく三匹。そこま  
では良かったけど……

『ウキー！』

『ヒノー！』

『リルー！』

急にみんなの悲鳴が聞こえてきた。煙幕のせいで、なにが起きた  
か、私達は判断出来なかった。

「なにがあつたの！？」

いきなりのことだったからか、ユリノは少しパニックになる。  
煙が晴れると、その場で苦しむみんなの姿があつた。一体なにが

あつたの!?

「フフツ……」

「なにをした!？」

「なに……煙幕の中にいる時に毒びしを使ったのですよ」

毒びし……？ 確か交代するポケモンに毒のダメージを与える技のはず。そっか……あの煙幕を逆に利用して、周りに毒びしを仕掛けていたのね……

「これで終わりにしますか。毒々の牙」

『ドラー!~!』

口に毒を沢山溜め込み、一気に攻撃を仕掛けて来るドラピオン。このままだとみんなやられちゃう！……そんなの嫌……だから私は覚悟を決める。

「エイパム！ みんなをかばって！」

『ウキツ!』

エイパムも、私がなにを指示するかわかっているみたい。でもユリノとエイト君は驚き、戸惑っていた。

「レナちゃん!？」

「レナ、無茶だよ!」

「大丈夫……エイパムを信じて」

「愚かな……ドラピオン、お望み通りにしてやれ」

ドラピオンはエイパムの右腕に毒々の牙を決める。当然ダメージは半端じゃない。でも……もらったわ！

「エイパム！ カウンター！！」

『ウーキーー！！』

「なっ！？」

痛みに耐えながら、エイパムは、しつぽでドラピオンを殴りつける。ドラピオンは攻撃の反動で吹き飛ばされ、壁にたたき付けられた。これならかなりのダメージが期待できるはず……

「ドラピオン！？」

『……ドローラー！！』

大声を上げながら立ち上がるドラピオン。そんな……今の攻撃でも駄目なの？

「そんな……エイパム！？」

今の攻撃に耐えられず、エイパムはその場に倒れる。そんな……どうしたら良いの……

「くっ……ヒノアラシ！ レナちゃんが作ったチャンスを無駄にするな！ 火の粉！」

「マリルも！ バブル光線！」

『ヒノー！』

『リルー！』

ヒノアラシは小さい火の玉を、マリルは今まで見たことのない、沢山の勢いのある泡を、ドラピオンに向けて放つ。

「シャドーボールで相殺しなさい」

『ドラッ！』

せっかく作ったチャンスも、簡単に潰されてしまう。どうすれば勝てるの……私の心は折れ始めていた。エイト君もかなり追い詰められていた。ユリノもおたおたしている。

「私に勝つなど不可能ですよ」

シンさんがそう言っている間にも、ドラピオンは私達に迫って来る。ここで終わりなのかな……

「クロスポイズン」

ヒノアラシとマリルの目の前に迫ってきたドラピオンは、技のチャージをする。私は恐怖で、もう駄目だと直感し、目を閉じた……

レナ編 第三十一話 ピンチ（後書き）

レナ

「もうだめ……」

おいおい、主人公が諦めるなよ

レナ

「……………」

次回レナ達は無事なのか？ 次回も楽しみにしててくださいね！

レナ編 第三十二話 休息（前書き）

第三十二話完成！

リュウタ

「遅い！」

長らくお待たせしてもうしわけありません……では第三十二話をど  
うぞ！



## レナ編 第三十二話 休息

ゴローンを何とか退けることができたオレたちは、疲れがたまつたため、洞窟の行き止まりで休憩している。一時はどうなるかと思つたけどな。

「はあ~~~~生き返るよーっ!」

リナが、カイスジュースを飲みながらいう。

カイスジュースってどんな味なんだろうな……今度飲んでみるか。

「それにしても、何とかなってよかったぜ。もう少し遅かったら俺たちは……」

少し真顔になりながら、オレは言った。あ？ 真顔は似合わない？ ほっとけての！

「そんなこというなよ。助かったんだから、よかったじゃねーか！……ヨウヘイが来るまでゆっくりしようぜ」

場の空気を明るくしようとしているのか、ユウヤさんが軽口を言う。そういえばユウヤさんが一番走ってんだよね。大変だったんだな。

「ユウヤさんのいう通りだよ！ リュウタ、ここはいつときのんびりしようよー!」

リナが、ピヨンプヨンはねながらいう。こいつの体力にはオレも驚かされるぜ。

「二人もそういうんだし、ヨウヘイが来るまでのんびりするか」

まあオレも休みたかったし、すぐに承認した。

「うんうん、そうしよう！……でも、ただ休むだけじゃ面白くないよね」

リナは小首を傾げながら言う。まあオレも楽しい方が良くいけどな  
！

でもそうなる話題は……あ……よし、これでも聞いてみるか  
。

「なあ、リナはどうやってエイトと知りあったんだ？」

しばらく沈黙が続いたが、オレは前から気になっていたことをリナに聞いた。

「えっ？ エイトとどんな風に出会ったかって？……確かヨシノシティでぶつかったんだっと思ったよ！」

たまたまぶつかって、それで一緒に旅……？　なんかよくわからん理由だな。

その時、何故かユウヤさんが、いたずら小僧みたいな笑みを浮かべていた。

「ぶつかったってどっちがだ？ ……どうせ、リナのほうだろ？」

ユウヤさんは、少しニヤニヤしながら言った。リナには悪いが面白そうだから、オレは止めなかった。

「ユウヤさん！ それはヒドイよ！ ぶつかったのはエイトの方だったもん！！」

少しムキになりながらリナは弁解する。ヤベッおもしろ。

「それウソらしいよなー」

ユウヤさんに同意するような言葉を言うオレ。最近リナの性格もわかってきたからな。

「リュウタまでヒドイよ！！ わたし本当のことってるのに……」

必死に弁解を続けるリナ。おいおい、目がウルウルしてきてるぜ。さすがにイジメ過ぎたか？

「悪い悪い、冗談だ。でも、あのエイトがぶつかるってのは意外だな」

ユウヤさんは、反省しているのか、頭をポリポリかきながら言った。

「冗談なら先にいってくださいよ！！ 本気にしちゃうんだから…」

…。エイトがぶつかってきたこと、あの時は全く知らない人だったけど、今思えばホント意外だよ！」

ユウヤさんが謝ると、すぐに明るくなったりナは、ユウヤさんの言葉に反応する。そのポジションにはオレも負けるぜ。

そんな話をしていると、ユウヤさんはオレの方を向いてきた。

「なあ、リュウタはレナやユリノとはどうやって出会ったんだ？」

まさかの展開に、オレは少し驚いた。

「今度はオレか!？」

さっきリナをからかっていた時みたいに、ユウヤさんはニヤニヤしながら聞いてきた。絶対さっき反省してねえ……！

「レナとは幼なじみだからワカバタウンから一緒に旅を始めたんだぜ」

「リュウタとレナって幼なじみだったんだな」

ユウヤさんは少し驚いているような顔をしていた。

「私も初耳だよー！ 知らなかったー!!」

ユウヤさんが知らないのは当たり前として、そういえばリナ達にも話してなかったな。まあ話す必要もなかったしな。

「それで、ユリノとはどうやって会ったの？」

少し目をキラキラさせながらリナは聞いてきた。やれやれ、教えるとするか。

「ユリノを初めて見たのはキキョウジムだな。オレ達よりも先にバツジをゲットしてたんだぜ」

「へえ〜〜〜……でも、私たちのほうが先だよ！」

えっ へんと胸を張りながら言うリナ。なんか敗北感を感じるぜ……

……！

「……確かにリナたちはアルフの遺跡で会った時にはもうバツジ持ってたよなあ」

あゝ思い出すとさらに敗北感を感じる……あゝやめやめ！ 過去をうだうだ考えるのは性に合わねえぜ！

「……というかオレ何か忘れてないか？ ……なんかずっとベラベラしゃべってたからだと思うけどさ」

オレの言葉で、いったん場が静まりかえった。オレ達こんなのにびりしてて良いのか？

「ねえ、ヨウヘイさん遅くない？」

リナが深刻そうな顔をしている。そっぴやそっぴや……なにしてんだ？

「それに、レナたちもこないよな」

リナに続いてオレが言う。なんか嫌な汗が、オレの背中に流れ出す。なんだこの嫌な感じ……

「なあ、考えすぎじゃねーか？ ヨウヘイとか道に迷ってそうだし。あ……でも、シンと連絡をとるっていったからやっぱおかしいか……」

あくまで前向きに考えるユウヤさん。でもその明るさはすぐに消えた。

「リュウタ、ユウヤさん、私たちけっこう休憩できたし、いったん道を引き返そうよ」

リナがオレ達に提案する。確かにその方が良さそうだな。

「……そうだな、いこうぜ！！」

オレはそういって、さっき通った道の方に走りりだした。

「ユウヤさん、行こう行こう！！」

「そうだな」

その後を、ユウヤさんとリナも走って行った。

「……ここ、分かれ道だったね」

リナがポツリという。ここは見覚えがある。ゴローンに追われてひどい目にあっただしな。

「確かオレたちはあの時”左”にいったよな」

念のために、オレは二人に確認するようにいう。

「うん、たぶんそうだったよ……でも、どの道にいくつもり？」

リナが首をかしげながらいう。これ、もう一方の道に行つて良いのか？ まあ考えても仕方ないし、行くしかないなとオレは思い、

「そこでだ！ 左側は行き止まりだったから右側にいこうぜ！」

とオレは言った。

なぜかユウヤさんは感心したかのような目でオレを見ていた。なにかそう思わせることしたかオレ？

「うん！ ……じゃあさっそく出発しよう！」

「いっくぜ……！」

リナのかけ声で、オレ達は、左側の道に向かった。

しばらく左の道を歩いていると、だんだん明るくなってきているようだ。やっぱりこっちが正解だったのか？

「もしかしたらこの先にラプラスがいるかもしれないよね！」

リナがうれしそうな表情をしている。確かにそんな感じもするな。それにしてもラプラスってどんなポケモンなんだろう。

「うっし、ラプラス見つけたらさっそくゲットだぜ！」

オレは、両手でこぶしを作り、ギュツと力を入れた。もともとそのつもりで来たからな！

「ねえ、そろそろ出口じゃない？」

リナが前を指差しながら、オレ達に言った。目の前から、少し明かりが漏れていた。



「おお！ そうだな。早く行こうぜ！」

オレは早く行きたくて、早くするように催促する。楽しみだぜ！

「うん！」

リナとユウヤさんはオレに返事をし、歩みを早めた。

オレたち三人は、ついに水辺に到達したが、目の前で繰り広げられている光景を瞬時に理解することができなかった。

まず目に留まったのは、ラプラスと思われるポケモンが、かなりでかいダメージを喰らって苦しそうな姿。なんだ、あれはレナ達がやったのか？ ならやり過ぎじゃねえか？

オレは二人の方を見ると、オレと同じような雰囲気だった。動揺を隠せないみたいだな。

「クロスポイズン」

ちょうど後ろの辺りから、聞き覚えのある声がした。あれは……シンか？ オレは何故か嫌な予感がした。

ユウヤさんは後ろを向いていた。オレもそれにつられて見てみると、エイト、ユリノ、そしてレナがいることが分かった。三人を見つけたのは良かったことだ。だが、今はクロスポイズンに応戦出来ない状態に陥っているようだ。……ていうかなんでバトルしてんだよ！？

「いけ、ハッサム！ ラスターカノン！」

危機感を感じたのか、ユウヤさんは、モンスターボールを取りだ

し、ハッサムというポケモンにラスターカノンを指示した。

一体なにが起こっているんだ……とにかくエイト、ユリノ……レ  
ナ……無事でいてくれよ！！

レナ編 第三十三話 増援（前書き）

第三十三話完成！ あれ？ 誰もいないし……なんか最近多いな……  
まあいいや。今回はレナ視点で進めていきますね

では第三十三話をどうぞ！

レナ編 第三十三話 増援

もうダメだ……私は直感的に目を閉じた。だけど、いつまでたつても、ドラピオンの攻撃は来ない。私達は目を開けると、赤を基調とした体に、両手にハサミを持っているポケモンが、ドラピオンの攻撃を防いでいた。

「よう、三人共大丈夫か？」

私達に優しく声をかけてきたのは、ユウヤさんだった。それに続いてリナちゃん、そしてリュウタ。良かった、三人共無事だったのね。

「エイトー！ 大丈夫！？」

真っ先にリナちゃんはエイト君のもとに駆け寄った。やっぱり離れていると不安になるのかしら。

「ユリノ！ レナ！ 大丈夫か！」

すぐにリュウタも、私とユリノの所に走ってきた。リュウタも無事みたいで良かった。

「うん、なんとか……でもエイパムが……」

私の目の前でぐったりしているエイパム。でもなぜか顔色が悪い……まさか、ドラピオンの毒に……？

「毒にやられたな。レナ、これをエイパムに」

そう言いながら、ユウヤさんは、私に毒消しを渡してくれた。それを受け取り、すぐにエイパムに与えた。

「でもなんでシンさんが？」

リナちゃんが首を傾げながら、私達に聞いてきた。

「シンさんはポケモンハンターなの……」

信じられないのか、ユリノの言葉に、三人は驚きを隠せなかったが、ユウヤさんはなにかを決意したような顔をした。

「やるしかないな」

「レナ、ユリノは休んでろ。オレがやる」

「私だつてやるよ！ みんなを傷つけたなんて許せない！」

そう言いながら、リュウタはヒトカゲ、リナちゃんはミズゴロウを出した。

「リナ、あんまり無茶するなよ」

「私無茶なんてしないよ！」

……リナちゃんには悪いけど、どうしても無理してしまう絵が容易に浮かんでしまう。

「なんだリュウタにリナも。こいつは俺一人で十分だぜ？」

「ユウヤさん一人に任せたくないよ！ 私だつてやる！」

「大切な仲間を傷つけた代償は払ってもらつつもりだからな。オレもやるぜ〜！」

凄い意気込みのまま、戦闘体制に入る三人。ユウヤさんがいるとはいえ、シンさん相手にどこまで出来るかな……。

「レナ、エイト。きっと三人なら大丈夫……」

私とエイト君を見ながら言うユリノ。そうよね……あの三人なら絶対大丈夫よね。

「そうだね。リナ達を信じよう」

エイト君の言う通りね。リュウタもリナちゃんもユウヤさんも強いんだから、きっと勝てるよね。

「ふむ、なかなかの実力者がいるようですね……このままではきつい。行きなさい、テッカニン」

シンさんは新たに蝉みたいなポケモンを出してきた。私はポケモン図鑑を向けた。名前はテッカニン。凄い素早いポケモンみたいね……。

「こっちから行くぜ！ ハッサム！ シザークロス！」

ハッサムと呼ばれたポケモンは、ドラピオンに向かってシザークロスを放つ。ドラピオンも結構ダメージを受けているから、これが決まれば……！

「テッカニン、守る」

凄い速いスピードでドラピオンの前に行くと、テッカニンは緑色の壁を発生させ、ドラピオンを庇った。

「ちっ面倒な」

「ヒトカゲ！ テッカニンに火の粉！」

『カゲー！』

「ミズゴロウもドラピオンに水鉄砲！」

『ガヤー！』

ヒトカゲとミズゴロウは一斉に攻撃を仕掛ける。だがそれはシンさんは読んでいた。

「テッカニン、高速移動。ドラピオンはクロスポイズンで弾きなさい」

二匹は指示通りに動いた。結果的に、火の粉はクロスポイズンによって消され、水鉄砲はテッカニンの素早いスピードでかわされてしまった。でも……あれ？ テッカニンどこいったの？

「シザークロス」

いつの間にか後ろに回り込んでいたテッカニンは、ミズゴロウに

シザークロスで攻撃しようとした。

「ミズゴロウ！ 泥かけ！！」

リナちゃんうまい！ ミズゴロウは後ろ足を使って、テッカニンに泥かけを決めた。テッカニンの目に泥が入り、悶えていた。

「なるほど。ダメージはないとはいえ、泥が目に入れば、命中率は下がる……なら、剣の舞」

不思議な動きを始めたテッカニン。一体なにをしているのかしら？

「あれはマズイ！ ハッサム、シザークロス！」

「遅い、バトンタッチ」

ハッサムは急いで攻撃しようとしたが遅かった。テッカニンはシンさんのボールに吸い寄せられた。バトンタッチ……確か自分の能力変化を、次のポケモンに引き継ぐことが出来るはず。これはマズイかも……。

「行きなさい、サマヨール」

シンさんが出てきたのは、黒い体に、一つ目のポケモン。私は図鑑を向けてみる。名前はサマヨール。ゴーストタイプのポケモンで、体の中は空洞になっているらしい。

「二人共、サマヨールはオレがやる。ドラピオンは頼むぜ」

ユウヤさんは、多分ダメージを受けているドラピオンなら二人でいけるだろうと判断したのだろうと、私は判断した。



「任せろ！ ヒトカゲ、引っかく！」

「ミズゴロウも！ 体当たり！」

二匹は一斉にドラピオンに接近する。あっ！ いま近づいたら！

『カゲー！』

『ガヤー！』

やっぱり……二匹はドラピオンが使った毒びしの効果で、ダメージを受けてしまった。

「なんだこりゃ！」

「毒びし。お前達はドラピオンに近づけるかな？」

「関係ねえ！ かんばれヒトカゲ！」

「私達だって負けないよ！」

二人が意気込んでいる間、ユウさんはサマヨールと戦っていた。

「ちっ！ トレーナーの指示が無いのに技を出して来るとはな！」

そう、シンさんはドラピオンに指示を出している。だからサマヨールには指示をあまり出せないが、サマヨールは自分の判断で技を繰り出している。よほど戦い慣れていないと出来ないことね。

「ハッサム！ 剣の舞！」

ハッサムも、先程テッカニンが使った技を使う。ユリノから聞いたけど、剣の舞は、攻撃力を高める技なのね。

「よし、シザークロス！」

ハッサムにシザークロスを指示するユウヤさん。ハッサムは、サマヨールのお腹をクロスの形に切り裂いた。そのダメージで、サマヨールは怯んでしまった。

「チャンスだ！ ギガインパクト！」

えっ！？ なぜかユウヤさんは、ギガインパクトを指示する。ゴーストタイプのサマヨールに効果はない。なのになぜ……？  
その私の考えは違っていた。ハッサムの攻撃対象は、サマヨールではなく、ドラピオンだった。そっか、リュウタとリナちゃんのバトルに集中しているから、今なら決められる！

「雑魚のくせにしぶとい……」

「雑魚かどうかは自分で確かめろ！ 火の粉！」

「水鉄砲よ！」

二匹の技は、ドラピオンに命中したが、ダメージはほとんどないみたいだった。

「遊びは終わりです。クロス……なにっ！？」

シンさんは、迫り来るハッサムの存在に気づいた。あともう少し遅かったら決まったのに！

「気づかれたか！ 構わねえ！ やれハッサム！」

「返り討ちにしろ！ 炎の牙！」

ドラピオンは口に炎を溜め込み、ハッサムのギガインパクトに対抗する。確かハッサムのタイプは虫と鋼。炎タイプの技は凄く苦手……大丈夫かしら？

二匹の技はぶつかり合い、爆発が起こった。煙りが晴れると、倒れているドラピオンと、ボロボロのハッサムの姿があった。

「……………」

シンさんは無言で、ドラピオンをボールに戻す。やっと一匹倒したけど、ハッサムもボロボロ。これ以上バトルは出来なさそう。

「ご苦労さんハッサム。休んでくれ」

そう言いながら、ユウヤさんはハッサムを戻した。

「あと一匹だな！ 頼むぜキノガッサ！」

「キノー！」

ユウヤさんは、私が見たことのないポケモンを出した。図鑑を向けると、説明が流れ出した。名前はキノガッサ。ボクサー顔負けのテクニックを持つポケモンみたい。

「……私を追い詰めたつもりか？」

「どういう意味なの？」

「なに、お前達は六人、私は一人。圧倒的不利な状況ですが、私の最強のポケモン、サマヨールに勝つことは不可能だ」

クククツと不適な笑みを浮かべるシンさん。先程までの優しい笑顔を浮かべていた人とは、まるで別人のようだ。

「余裕こきやがって。いけるか？」

「おうよ！」

「任せて！」

元気よく返事をするリュウタとリナちゃん。情けないことだけど、私は疲労のせい、か、まともに立つのも困難になっている。

「ふむ、戦えるのは結局三人か……それで私に勝とうなど、愚かなことだ」

「うだうだ言っていないで行くぜ！」

リュウタが叫ぶと、みんな戦闘体制に入った。きっと三人なら勝てる。私はそう信じて疑わなかった。

レナ編 第三十三話 増援（後書き）

レナ

「ユウヤさんがいれば大丈夫ね」

リュウタ

「おいおいオレはどうしたんだよ」

ユリノ

「えと、リュウタもいるから……大丈夫だよね？」

リュウタ

「オレの味方はユリノだけだぜ」（泣）

なんだかなあ……

レナ編 第三十四話 策略（前書き）

第三十四話完成！

レナ

「シンさん強いよ……」

だね

今回はリュウタ視点です。では第三十四話をどうぞ！

## レナ編 第三十四話 策略

「キノガツサ、タネ爆弾！」

「キノー！！」

ユウヤさんの先制攻撃で、バトルが再開した。不意打ちに近い攻撃だから、決まればデカイ一撃になるぜ！

「サマヨール、かわして鬼火」

サマヨールは、瞬時に移動して避ける。タネ爆弾は、あちこちにある岩の一つにあたった。そう簡単にはいかねえか。

そして、今はサマヨールのからだの周りで青むさらき色の火の玉がぐるぐると回っている。

鬼火は相手をやけど状態になつてしまう技はずだ。ヒトカゲは問題無いだろうが、他の二匹がくらってしまったらかなり不利になるな……。

「なんとしてでも鬼火を防いで！！」

レナ俺達にに向かって叫ぶ。へっ！ 言われなくても！

「分かってるよ！ ミズゴロウ、水鉄砲！」

「ヒトカゲ、火の粉だ！」

オレとリナは、それぞれの技で、鬼火に対抗した。

「フツ……そんな技で防げるとでも思ってるのですか？」

シンがいかにもバカにしたような笑い方をした。くそが。なめやがって！

「俺のことを忘れるなよ！キノガッサ、もう一度タネ爆弾！！」

キノガッサは、先ほどと同じようにタネ爆弾を繰り出す。キノガッサが加われば百人力だぜ！

「甘い！ サマヨール、サイコキネシスで確実に鬼火を当てなさい」

サマヨールは、体から特殊なエネルギーを発して、鬼火を自在に動かした。そして、ミズゴロウ、ヒトカゲ、キノガッサに当てていった。ちっ避けらんなかったか。

だけどミズゴロウとヒトカゲは、少し顔を歪めただけ。さっき毒びしのせいで、毒状態にされたからな。状態異常が重なることはいからな。まあ助かったぜ。

しかし、キノガッサはしつばに火がついてしまい、フィールドをいったり来たりしている。なんかアニメとかでありそうな光景だな……。

「ちっ……やられちゃったな……」



ユウヤさんは、悔しそうにいった。マジかよ……ユウヤさんでもシンの策略にはまってしまっただなんてよ……信じらんねえ。

オレ達……ラプラスを救えるのか？　ちっオレまで弱気になってきちゃったな……オレが弱気になるなんて似合わねえな。気合いいれるぜ！

「状態異常だからって関係ないよ！　ミズゴロウ、もう一度……」

「リナ、待て！　やけど状態は治しといたほうがいいぜ」

ユウヤさんが、ミズゴロウに攻撃させようとしたリナを止める。まあキノガッサがやけどになってたらかなり不利だよな。

「でも、どうやって治すんだよ？」

オレは首を傾げながらユウヤさんに聞いた。リナも不思議そう顔をしている。まあユウヤさんが何考えてるのかわかんねえからな。

「なーに、簡単なことだ。リナ、ミズゴロウで俺のキノガッサに水鉄砲をしてくれ」

「えっ？……本当にいいんですか？」

リナは、ユウヤさんに、予想外のことを言われて驚いている。正直オレも驚いてるしな。

「水タイプの技を当てたらやけどは治る、そうですね？」

エイトは、ユウヤさんに向かっていう。なるほどな。火は水に弱いってか。

「まっそういうことだ。分かったならさっそく頼むぜ！」

「わかった！ ミズゴロウ、水鉄砲！」

「ガヤーー！！」

ミズゴロウは、キノガッサの火がついてる部分に、水鉄砲を放った。それのおかげで、キノガッサの火は消えた。

「そういえば、毒状態を回復出来る道具を持ってる人っていないの？」

レナが、みんなに向かっていう。まあ毒状態も状態異常だから、このままだとこちらがかなり不利な戦況が続いてしまう。つってもオレにはそんな道具持っていないしな……。

「リュウタ、リナ、これを使って……！！」

ユリノが、バッグから桃色をした甘そうな木の実を取り出した。そういえば今朝、ユリノは木の実を取りに行ってたな……。

「モモンの実じゃねーか！ ありがとな、ユリノ！」

「助かったよ！！」

オレとリナは、ユリノからモモンの実を受け取って、それぞれのポケモンに食べさせた。モモンの実のおかげで、ヒトカゲとミズゴ

ロウの顔色が良くなった。

「よし、回復が完了したことだし攻めるぞ！ヒトカゲ、火の粉だ！」

「カゲー！」

「ミズゴロウ、水鉄砲！」

「ギャー！」

リナとオレは、さっそく元気になった二匹に指示する。本番はこれからだぜ！

「何度いつても分からないようですね。サマヨール、サイコキネシスで技を止めなさい！」

シンは、サマヨールに再びサイコキネシスを使うように命じた。

そのせいで、火の粉と水鉄砲の動きは、その場に止まり、最終的にはキノガッサのいる方へ跳んでいった。

ちっ、サイコキネシスで技を操っていることがよくわかるぜ。あれをどうにかしないと勝機はねえな。

「キノガッサ、ジャンプして避ける！」

「キノッ！」

キノガツサは、高くジャンプして、跳ね返ってきた火の粉と水鉄砲をかわす。なかなかの脚力だぜ。

「やつかいな……サマヨール、キノガツサにサイコキネシス！」

イライラしているのか、シンの口調が強まった。おいおい、キノガツサ自身にサイコキネシスされたらまずいだろっが！

「させるかよ！ キノガツサ、ストーンエッジ！」

キノガツサは、周りに鋭い小型の岩を発生させた。キノガツサはストーンエッジが使えるんだな。

「サマヨール、気にせずに続けなさい！」

サマヨールは、ストーンエッジを無視してサイコキネシスが続けた。サマヨールにダメージを与えることは出来たが、キノガツサはサイコキネシスをくらい、サマヨールによって中に浮かされてしまった。あれじゃあ身動き取れない。マズイだろ！

「キノガツサ、タネ爆弾で脱出だ！」

ユウヤさんは、脱出を試みるが、キノガツサは、驚きのあまりあふたしている。完全に冷静さを失ってやがるな。

「くそ……どうすればいいんだよ！」

ユウヤさんは、投げやりの気持ちでいう。ユウヤさんでも無理なのか？

「あなたたちで私を止めることなど不可能です。ここは一気に畳み掛けてあげましょう……！」

シンがそういうと、サマヨールは、サイコキネシスを解いた。そのおかげで、キノガッサは解放され、地面に下りることができた。

「サマヨール、破壊光線……！」

おいおい！ なんちゅう技を指示してんだよ！ 破壊光線とか、ノーマルタイプ最強の技じゃねえか！ なんとかしなくちゃな！

「対抗するぞ！ キノガッサ、ソーラービーム！」

「ミズゴロウ、水鉄砲！」

「ヒトカゲ、火の粉！」

ユウヤさんもマズイと思ったか、オレ達に指示を出すように促した。

四つの技は互いにぶつかり合い、やがて大爆発が起きた

レナ編 第三十五話 結末（前書き）

第三十五話完成！

レナ

「このサブタイなに？」

気にしない気にしない

では第三十五話をどうぞ！

## レナ編 第三十五話 結末

リュウタ達の攻撃と、シンさんの攻撃がぶつかり、爆発が起った。その影響で煙りが発生し、前が見えない状況になっている。

戦力はあまり変わらないけど、技の多さならこっちが上回っている。普通に考えれば、私達が勝ってるかもしれない。でも相手はシンさん。油断は出来ない。

「ちつどうなった？」

舌打ちをしながら、ユウヤさんが、煙りが晴れるのを待っている。この時間はとてもどかしく感じる。

やっと煙りが晴れると、そこには、悠然と立っているサマヨール、ボロボロのキノガッサ、ダウンしているヒトカゲとミズゴロウの姿があった。そんな……嘘でしょ……？

「なっ！？ ヒトカゲ！」

「ミズゴロウ！ しっかりして！」

リュウタとリナちゃんは急いで自分のポケモンのもとに駆け寄る。それをシンさんは悠然と見ていた。

「クククッ……ハッハッハ！！ お前達では私には勝てない！！」

勝利を確信し、高らかに笑うシンさん。どうしたらいいの……？ このままではラプラスは連れて行かれてしまう……。

「気合いだキノガッサ！ ストーンエッジ！」

『キッ……ノー！』

フラフラしながらも、なんとかストーンエッジを放つキノガッサ。でも、さっきのと比べると、明らかに威力もスピードも落ちている。

「鬼火」

シンさんが指示すると、さっきも見た青紫色の火の玉を発生させ、ストーンエッジにぶつけた。たったそれだけで、威力の高いストーンエッジは消されてしまった。

「くそがあ！ 種爆」

「遅い。接近しなさい」

えっ？ サマヨールは一瞬の間にキノガッサに接近していた。サマヨールってあんなに速いの！？

「なっ！ 馬鹿な！？」

「忘れたのですか？ サマヨールはテッカニンのバトンタッチによって出てきたのですよ」

そういえば……泥かけを受けてからバトンタッチで交代していた……待つて、さっき図鑑を見た時……テッカニンの特性って！

「そういうことか……」



「テツカニンの特性は加速。時間と共に速くなる。更に剣の舞を使用した。このスピードとパワーを受けたらどうなるかな？」

「しまった！ 離れるキノガッサ！」

「遅い！ 炎のパンチ！」

『キノー！！』

キノガッサはサマヨールの炎のパンチをお腹に受け、岩にたたき付けられた。

ユウヤさんがキノガッサを確認すると、目を回しているキノガッサの姿があった。

「もうお前達に勝ち目はない。そこで私がラプラスを捕獲するのを見ているがいい」

そう言うと、右腕に付けているなにかの機械を、ラプラスに向けた。

「させるか！ いけブイゼル！ 水鉄砲！」

『ブイブイ！』

とつさにブイゼルを出して水鉄砲を指示する。だけどそれはサマヨールに防がれてしまった。

「やれやれ……サマヨール、サイコキネシス」

サマヨールの超能力の効果で、ブイゼルは空中に浮かべられてしまった。そのままブイゼルは、地面にたたき付けられた。

「ブイゼル！」

リュウタが叫ぶ。だけどブイゼルは反応しない。どうやら気を失っているみたい。

「レベルが違うのですよ」

不適な笑みを浮かべるシンさん。……私達じゃやっぱりダメなの……？

「一体どうしたら……」

エイト君も必死に頭を巡らしているみたいだけど、良案は浮かんでいないみたい。そういう私も浮かんでいない。

「レナア……」

目をウルウルさせながら、ユリノが私に助けを求めてくる。私だつて泣きたいくらいよ……。

「俺は諦めるかよ！」

「私だつて諦めないよ！」

そう言いながら、ユウヤさんとリナちゃんはモンスターボールを取り出した。そうよね……諦めたらダメよね……。

「無駄だと言っている。サイコネシス」

サマヨールの目が怪しく光った。すると私達の体は、ピクリとも動かなくなった。

「さて……捕獲を開始するか……」

先程の機械を、ラプラスに向けるシンさん。その機械から一筋の光が発生し、ラプラスに命中した。刹那、ラプラスの体が金色の銅像のようになった。どうなってるの……？

「ヨウヘイ」

「任せるんだな」

今までおとなしくしていたヨウヘイさんは、カプセルのようなものを取り出し、ケースを開けた。するとラプラスの体は収縮し、カプセルに吸い込まれていった。

「ラプラスが……」

とっさに叫ぶユリノ。私もなんとかしたいけれど、サマヨールのサイコネシスで動けない。ポケモンを出したくても出せないから、実質ただ見てるだけしかできない。

「さて、仕事は終わりだ。ヨウヘイ、帰還する」

「わかったんだな」

ヨウヘイさんはカプセルを持ちながら、シンさんのもとに歩いて

いく。

シンさんの所に着くと、カプセルをシンさんに渡した。

「では……さらばだ」

そう言いながら、シンさんはサマヨールをボールに戻すと、違うポケモンを出した。黄色い体に、二本のスプーンを持ち、人型のポケモンだった。

「今だ！」

「逃がすな！」

エイト君とユウヤさんが叫ぶと、私達はボールを出しながら、シンさんとヨウヘイさんの所に走り出した。

「お別れだ……フリーディン、テレポート」

フリーディンと呼ばれたポケモンの、スプーンがキラリと光ると、私達の前から消えてしまった。

私達は、二人がいなくなった場所を、ただ呆然と見ていることしか出来なかった

レナ編 第三十五話 結末（後書き）

レナ

「……………」

ユリノ

「……………」

リュウタ

「……………」

だからこの辛気臭い空気やめい！

レナ

「……………」

ダメだこりゃ……………」

レナ編 第三十六話 失意を越えて（前書き）

第三十六話完成！ …… あれ？ 誰もいない……？

まあいいや。今回でコラボは終わりです。\* s n o w      w h i t e  
\*さん、コラボしてくれてありがとうございました！

リュウタ

「ありがとな〜！」

あれ？ さっきまでいなかったのに……まあいいや。では第三十六話をどうぞ！

## レナ編 第三十六話 失意を越えて

シンさんとヨウヘイさんによってラプラスは奪われてしまった……私達はその真実は、受け入れなくてはならない。

シンさんたちが立ち去った後、辺りは閑散としていて、しばらくは誰一人と口を開かなかった。

みんなショックが大きいんだと思った。全力は出したけれど、結果的にはラプラスを奪われてしまったのだから。

リナちゃんは、ポロポロと大粒の涙を落としている。

私に至っては、ハンカチを取り出して、流れる涙を拭いていた。涙を抑えようにも、溢れる感情には栄えなかった。

ユリノは、ただシンさんたちが消えた場所をじっと見つめている。内からこみ上げてくる、どうしようもない気持ちを、必死にこらえているように私には見えた。

リュウタやユウヤさんは、悲しさというよりも、悔しさというものが大きいみたいで、苦虫をかみつぶしたかのような表情をしている。

エイト君も悔しいのだろう。拳をにぎりしめたまま、なにか言いたいことを我慢しているように見えた。

時間がたつにつれて、場の空気は重くなる。こんな空気のなか、どうやって話を切り出すべきなの？ 私は、なんとか考えてみるけ

ど、なにも浮かばなかった。

「なあ……とりあえず脱出しようぜ」

一番はじめに口を開いたのはリュウタ。リュウタなりに必死に考えた結果がこの言葉だったのね。

「う……うん……。でも、どうやって脱出するの？ ……私たちのポケモンは……もう戦えないのに……」

リナが、少し涙声で言葉を途切れさせながら、リュウタに続いた。

「……確かにそうよね」

それに同意し、私は頷きながらいう。私達のポケモンはほぼ全滅。私はまだヒメグマがいるけど、ユウヤさんやリュウタは違う。

だから、ここは一度脱出したほうが良いのは、こんな状態の私の頭でもわかる。でも、いったいどうやって……？

「おいおいこういうときは先輩つてのに任せりゃいいんだよ。ほら、これを見ろ！」

みんなを気遣っているのか、ユウヤさんが、わざと大きな声を出していった。そういうところは、さすが年長者というところね。

そのユウヤさんが取り出したのは手ごろな長さのロープのようなものだった。これって一体なんだったかな……？

「穴ぬけのひも……！ ……これがあつたら外に出られる……！」

ユリノがうれしそうにいう。その顔は、先ほどより少し明るくな



っていた。

それにつられて、皆の顔色も少しずつよくなっているみたい……  
やっぱりみんな笑顔の方がいいね。

「よし、今から穴ぬけのひもを円上に置くから俺がかけ声をいつた  
ら一気に中に入れ！ くれぐれもタイミングを損なうなよ。マジで  
帰れなくなるからな！」

「おう！ 皆、準備しようぜ！！」

「うん！ いくよー！！」

リュウタとリナちゃんは、もう元通り。リュウタもリナちゃんも、  
やっぱり笑顔が似合うね。

ふとエイト君の方を見ると、リュウタとリナちゃんの方をボーッと  
見ていた。

「ねえ、エイト君？ ボーッとしちゃて……どうしたの？」

少し心配になり、私はエイト君に声をかける。エイト君はすぐに  
反応し、私の方を向いた。

「ごめん、大丈夫だよ。……じゃあ行こうか」

大丈夫だと言いながら、エイト君はユウヤさんが設置した穴ぬけ  
のひもがあるほうへ近づいていった。本人が大丈夫って言ってるな  
ら大丈夫かしら。

「よし！ 皆、いくぞー！！」

ユウヤさんが、声を張り上げていう。みんなは穴ぬけのひもの周りにスタンバイしている。準備は出来てるわね。

「せーのー！！」

ユウヤさんのかけ声に合わせて私達は、穴ぬけのひものにダイブした。

最初はなんにも起きていないかのようだったけど、徐々に視界が歪んできて、やがて、目の前が真っ白になった。

「ここって入口じゃんッ！！」

呆れた声でそういうのは、リナちゃん。私達は、入口に戻ってきってしまった。まあリナちゃんが呆れてしまうのも分からなくもないけどね。

「悪い悪い……穴ぬけのひもは入ってきた場所にしか戻れなくてな……。でも、しょうがねーだろ！？」

ユウヤさんは、なぜか私のほうを向いていつている。正直私に振らないでもらいたいわね……。

「確かにそうよね。リナちゃん、ここは黙っというてあげようよ。ねっ？」

仕方なく私は、リナちゃんをなだめるように説得していた。だんだんどうしたらリナちゃんを丸められるかわかってきた。

「はあ〜い」

リナちゃんは、口を尖らせながらも、案外すぐに納得していた。

「ねえ、ポケモンセンターに行かないと……！」

ユリノが、みんなに向かっていう。そっか、早くみんなを元気にしてあげないと！

「あつ！ 忘れてたぜ！ うっし俺が一番乗りだぜーッ」

「あ　ッ一番乗りは譲らないんだから！」

リュウタとリナちゃんは、風のごとくポケモンセンターに向かって走り出した。

あんなことがあってもやっぱりそこは変わらないいのね……私はエイト君と顔を見合わせて笑った。

「レナ、ボクたちも行こう……」

「うん、そうね！ リュウタたちを追いかけましょう！！」

ユリノが、私に話しかけてきた。早く追い掛けないと二人に怒られそう。私とユリノはリュウタたちを追いかけていった。

「エイト、俺たちも行くぞ！！」

最後まで残っていたエイト君とユウヤさんは、少し遅れてポケモンセンターへと向かって行った。

「ユウヤさん遅いな……」

私達は、すでにポケモンセンターでポケモンを治療してもらっていて、今はロビーで休憩している。けどユウヤさんがいつまでたってもこない。いったいどうしたのかしら？

「意外と迷っていたりしてるんじゃないの？」

そういつのはリュウタ。でも、一番迷ったりしそうなのはリナちゃんだと思うのは私だけかしら？

まあだからといって、それを口に出したらリナちゃんに怒られそうだから言わないけどね。

「皆　　ッ待たせて悪かったな　　！！」

ユウヤさんが、やっと戻って来た。なんでこんなに時間がかかったのかしら……？

「ユウヤさん、どうして遅かったんですか？」

リナちゃんが、皆が疑問に思っていることを尋ねる。すると、ユウヤさんの顔が、みるみる暗くなっていった。なにかあったのかしら？

「実は、今回の件のことをジョーイさんに聞かれてよ……こっぴどく怒られちゃった。……皆、俺がいながらシンたちを逃がしてしまつてごめんな……」

そういつてユウヤさんは、私達に頭を下げていた。ちょっと待つてよ……なにもユウヤさんだけの責任ではないのに……！ それになんでジョーイさんはユウヤさんだけを怒ったの？ 正直私はジョーイさんに少しムカついてしまった。

「ユウヤさん、自分を責めないで下さい！ 私たちだって戦力不足だったわけだし……」

「……ボクたちはユウヤさんに頼ってばかりだったから……！！」

「それに、これは俺たち皆の問題だぜ。カッコつけてんじゃねーよ！」

「大丈夫！ 次は皆でシンたちを倒しちやおうよ！」

私、ユリノ、リュウタ、リナちゃんの順にいつていった。みんなユウヤさんのことを心配しているのね。

「みんな……！」

ユウヤさんの声が震えている。驚きを隠せないでいるの、それとも嬉しくて涙を堪えているのか……ここは前者かしら。

「ユウヤさん、”負ける”ということを経験してこそ強くなれる、そうですよね！」

最後に、エイト君がユウヤさんに向かっていった。エイト君の言う通りよね。

「ゴホンッ……そういうことだ。皆、今から力をつけていけばいいんだぜ！ 悔しさをバネに強くあれ！！ まっもちろん俺も強くなるけどな……」

ユウヤさんは、いいことをいったつもりでいるみたいだけど、最後のはいう必要はなかったんじゃないかと思ったのは私だけかしら……。

「ちょっとユウヤさん！ もっと真面目に言えばいいのに……」

「ちょ…リナ！ お前にだけはいわれたくないな！！」

「アハハハハハ……」

少し前まで落ち込んでいた私達だったけど、今はもう大丈夫ね。

その日の夜中、私は一人目を覚ました。どうにも寝付けなかった。

「眠れないな……」

私は寝ているリュウタとユリノを起こさないように部屋のテラスに出た。夜風が私の頬を撫でた。

「気持ちいい……」

しばらく夜風に当たっていると、リュウタが私の所に来た。どうやら起こしちゃったみたい。

「どうした？」

「んっ？ ちょっと今日のことを考えてた」

そう、私は今日のことが今だに頭から離れなかった。あれからラプラスはどうなっただろう？ 誰かにいじめられてないだろうか？ 悪い人に悪用されてないだろうか？ 不安はどんどん積もっていく。

「うじうじしていても仕方ないだろ？ そうだ！ なら少しここに滞在して特訓するか！」

顔をパーツと明るくしながら、少し声を上げながらリュウタが提案してくる。ユリノとかエイト君達が寝てるんだから、もう少し静かにしてほしい。

「どうしたの……？」

リュウタの声のせいでユリノも起きてしまった。

「おうユリノ、聞いてくれ！」

今の提案をユリノに説明するリュウタ。なぜかその目はキラキラしているように見える。

「特訓……いいんじゃないかな？」

ユリノも乗り気みたい。私もこんな悔しい思いはもうしたくない。

「よっし！ 決まりだな！」

「そうね……じゃあ明日に備えて寝ましょ」



私はそう提案すると、私達はすぐに眠りについてしまった。

翌日、ポケモンセンターの入口で私達はエイト君達と話をしていた。

「本当にいいのか？」

「あつはい！ 私たちはもうしばらくこの辺りで特訓したいので大丈夫です」

問いかけたのはユウヤさんで、答えたのは私。私が特訓することを言ったら、ユウヤさんに少し驚かれてしまった。

エイト君達は、今からユウヤさんにヒワタウンまで連れていってもらってからみたい。方法は、チルタリスというポケモンの”空を飛ぶ”で行くみたい。私も空を飛べるポケモン欲しいなあ……。

「そうか、それもありだよな。……ならこれをやるよ」

そう言いながらユウヤさんは、私達一人ひとりに紙切れを渡して

いく。これ、なにかのチケットみたい。

「うおっ！？ これって高級レストランのタダ券じゃねーか！ ユウヤ、ありがとよ！」

「……リユウタ、ちょっとは かんがえないと……」

はしやぎまくっているリユウタを、ユリノが止めるように促す。  
全く子供じゃないんだから……けど私も内心このチケットでなにを食べようか考えていた。

「ユウヤさん、これもらっちゃっていいんですか？」

私は、遠慮がちにいう。高級レストランのチケットなのよ。遠慮しないほうがいい。

「おう！ どおってことねーよ。……またどこで見かけたら声をかけてくれよな！」

ユウヤさんが、にこやかにいう。昨日のことは吹っ切れたみたい。私はそんなユウヤさんを見て、

「ありがとうございます」

といって、チケットをバッグに入れた。これを使う日が楽しみね。

「じゃあ私たちそろそろ行くね！」

リナちゃんは、やけにうれしそうにいった。きつと空中移動が楽しみでウキウキしているのね。私もしてみたいなあ……。

「そっか、もういつちゃうんだね……」

私は、エイト君達との別れを考えると、さみしくなってしまう、つばやくようにそう言った。

「大丈夫。また会えるよ！」

「うん、エイトのいう通り……！」

エイト君とユリノが私を励ましてくれる。別れもあれば、出会いもある。旅ってそういうものよね……。

「次に会うときまでバトルはお預けか……。まあ、その間に強くなつてやるから覚悟しとけよ……！」

「いや、勝つのは私よ！」

最後の最後まで、リュウタとリナちゃんはこの調子。やっぱりこれが二人らしい。

「おい、エイト！リナ！準備が出来たぞ！」

ユウヤさんがエイト君旅を呼んでいる。これでお別れね……やっぱり淋しい。

「それじゃあ、三人とも元気で」

エイト君は、そう言い残してチルタリスが待機している場所に向かった。

チルタリスの美しいソプラノのハミングが響き、三人はだんだん離れていき、私達がいる場所から見えなくなっていった。

「行っちゃったな……さてと！ 俺達は俺達で忙しいぜ！」

握り拳を作りながら気合いを入れるリュウタ。私達は今より強くないと、シヨウやキヨウコに笑われちゃう。最近連絡取ってない……今度連絡入れてみよう。

「頑張ろうね、レナ、リュウタ」

「ええ！」

「おうよっ！」

ニッコリ笑いながら、ユリノが私達に言う。がんばって強くならないと！

レナ編 第三十六話 失意を越えて（後書き）

レナ

「行っちゃったね……」

だね……

リュウタ

「まあまた会えるだろ！」

ユリノ

「うん……！」

今回は久しぶりにショウウ編です！

キョウコ

「久しぶり〜！」

えっと余談ですが、最近感想が少なくて寂しいです……よかったら感想ください！

ショウ

「……………」

シヨウ編 第三十七話 孤立（前書き）

第三十七話完成！

今回からシヨウ達が復活します

キヨウコ

「やった〜！」

あとあまりサブタイトルは関係ないです（泣）  
では第三十七話をどうぞ！

シヨウ編 第三十七話 孤立

俺は一人で、クロガネシティの北にある、二百七番道路にやって来ていた。ここに、修業と、新たな仲間を求めて来た。

「……もつと強くなつてみせる……」

なぜ俺が一人でいるか。それを説明するには、数時間に遡る。

マルク達が俺達の前から去った後、俺達はこれといった会話もなく、クロガネシティにやって来た。この時に至ってはキョウコも静かだった。

「ふわあゝ！　ここがクロガネシティ？」

クロガネシティに來ると、いつもの元氣を取り戻すキョウコ。だが今の俺には、鬱陶<sup>うつとう</sup>しいものだった。

「……ヒカリ、ポケモンセンターは？」

「あそこだよ」

いつも嘘ばかり言うヒカリが、今日は珍しく素直だった。さすがにこの雰囲気ですれづきにはなれなかったのだろう。

俺はそれを聞き、一人でポケモンセンターに行こうとした。

「待つてよー！」

「……悪いが一人にしてくれ……」

俺はそう言い切り、一人ポケモンセンターに向かった。

「お待たせしました。みんな元気になりましたよ」

「……どうも」

俺はポケモン達を、ジョーイから受け取り、ポケモンセンターを後にした。

調度出ようとすると、ポケモンセンターに入ろうとするヒカリとすれ違った。



「あつシヨウ……」

「……………」

誰とも話をしたくない俺は、無言でヒカリの横を素通りした。

「待ってシヨウ」

「……………なんだ」

ヒカリに呼び止められ、俺はため息をしながら、仕方なく足を止めた。

「あんまり一人で抱え込まないでね。君にはキョウコがいるんだから」

「……………そうだな」

そんなことかと思いながら、俺は軽く返事をし、ポケモンセンタ―を後にした。

そして現在に至る。俺は辺りを見回したが、あまり強そうなポケモンの姿はない。

「……いないか」

諦めて帰ろうとすると、突然なにか大きいものがぶつかるような音が聞こえた。

「……なんだ？」

俺は、その大きな音がする方に向かった。そこには、周りより大きい木に、拳をぶつけるポケモンの姿があった。そのポケモンは、灰色の体をし、人間に似た体格だった。

俺はそのポケモンに、ポケモン図鑑を向ける。名前はワンリキー。かなり腕力があるポケモンのようだ。

「……面白い。ゲットするか……」

ワンリキーに興味を覚えた俺は、ワンリキーに近づき、声をかけた。

「……おい」

俺の声に反応し、ワンリキーはこっちを向いた。かなり警戒しているようだ。

「俺とバトルしろ」

『……リッキー!』

俺の挑戦を受け、ファイティングポーズをとるワンリキー。フツ、ますます気に入った。

「頼むぞ、ラクライ」

『ガウツ!』

俺の選択はラクライ。ワンリキーにはあまりスピードがなさそう  
だ。ならラクライのスピードで攪乱するまで。

「いくぞ。遠吠え」

『ガーウ!』

高らかに遠吠えをするラクライ。これでワンリキーのパワーに少し近づいたな。

『リッキー!』

思ったより速いスピードで突進してくるワンリキー。だが……単  
調な攻撃など、俺には通用しない。

「電光石火でワンリキーの後ろに回り込め」

『ガウツ!』

『リキッ！？』

素早いスピードで、ラクライはワンリキーの後ろに回り込む。うまくいったな。

一方、ワンリキーの攻撃は空を切り、その拳は木にぶつかった。ぶつかった木は、ワンリキーの拳の形にへこんでいる。ワンリキーのパワーの高さを物語っている。

「スパーク」

『ガウッ！』

体に雷溜め込み、ワンリキーに突進した。よしっ直撃……なんだ？ 攻撃を受けたワンリキーが、ニヤリと笑みを浮かべていた。

『リ……キー！』

体当たりしているラクライに、右手で渾身のパンチを繰り出し、ラクライを地面にたたき付けた。なんだあの威力は……！？

「カウンター……いや、今は……リベンジか？」

リベンジは、相手からダメージを受けた後に使っと、技の威力が倍になる。こちらから攻撃するのは危ないな……それにしても、旅立つ前に、ポケモンの技や特性を勉強したのは正解だったな……。

「マズイな……なんだ？」

電気タイプではないワンリキーが、体から電気が少し出ていた。

どうやらスパークの追加効果で、麻痺したみたいだな……だが、これは……逆にマズイな……。

『リッキー！！』

今までに無いくらいの声を出すワンリキー。ちつ……やはり麻痺したことで、特性の根性が発動したのか……根性は、状態異常になると、技の威力が上がる。ワンリキーにとっては、まさに鬼に金棒だな……。

「ラクライ、一旦距離を取れ」

『リッキー！』

『ガウツ！？』

ワンリキーは、地面に倒れ込んでるラクライに、やたらめったにパンチャ、キックを繰り返す。まさか……インファイトか……？  
たしかインファイトは、かなり強力だが、守りを捨てる捨て身の技。ラクライは大丈夫か……？

「ラクライ！」

インファイトによって発生した煙りが晴れると、そこには、目を回したラクライの姿があった。

「くっ……ごくろうだった。ゆっくり休んでくれ」

俺はラクライをボールに戻した。やつは近距離のバトルが得意。ならヒコザルはキツイ。なら……俺の選択は一つ。

「頼む、ヒトデマン」

俺はボールからヒトデマンを出す。遠距離ならヒトデマンが俺の手持ちで一番だ。

「水鉄砲」

俺の指示通り水鉄砲を放つヒトデマン。麻痺して動きが鈍くなっているワンリキーは、水鉄砲を回避することが出来ず、直撃した。そのダメージでフラフラしている。

「よし、怪しい光」

ヒトデマンの中心のコアが怪しく光った。怪しい光は相手を混乱させる。それはうまく決まり、ワンリキーは変な動きをしている。

……チャンスだ。俺はそう判断し、モンスターボールを投げた。

モンスターボールがワンリキーに当たると、ワンリキーはボールに吸い込まれた。地面に落下すると、カタカタと動き、やがて動きを止めた。

「……ワンリキー、ゲット完了」

俺は一人で呟いた。ヒトデマンもうれしいのか、クルクル回転していた。

「ご苦労だった。ゆっくり休んでくれ」

俺はヒトデマンをボールに戻すと、他になにかポケモンがない

か搜索を再開した。

レナ編 第三十八話 特訓！（前書き）

第三十八話完成

今回はユリノ視点です



## レナ編 第三十八話 特訓！

次の日、ボク達はいつもより早く目が覚めた。今日から、昨日決めた特訓を始める。みんなそのために早く起きたんだね。

「あら、リュウタが珍しく早起き」

「朝からなんだよ！？ 今日から特訓なんだから気合い入ってんだよ！」

なぜかリュウタはガッツポーズをしながら気合いを入れている。やっぱりこの二人といると楽しいね。

「二人共、朝ごはん食べに行こうよ」

「そうだな！ よっし！ 朝飯食ったら特訓開始だ！」

「ちょっと待ってよ！」

ボクが提案すると、リュウタが凄い速さで部屋を出ていく。それをレナとボクは追いかけて行った。

朝ごはんを食べ終えたボク達は、ポケモンセンターのバトルフィールドに来ていた。

「さてと、特訓つってもよくわかんねーし、バトルだバトル！」

まあ確かに特訓で言ってもよくわからないしね。バトルが一番いいかも。

「誰がバトルするの？」

「そうね。相手はどうするの？」

「そうだなーオレはバトルしたくてうずうずしてるぜ！」

ぶるぶると震えながら説得するリュウタ。レナは呆れているけど、リュウタはこうじゃなくちゃいけない気がするなあ。

「じゃあボクバトルしたいな」

「よっしゃ！ 決まりだぜ！ バトルバトルー！」

そう言いながら、ダッシュでバトルフィールドのスタンバイ位置に移動する。ボクも頑張らないと……もうボクのポケモン達に無理はさせられない。

「仕方ないわね。じゃあ私が審判するわ」

「おっし！ 頼むぜブイゼル！」

『ブイブイ！』

「お願いピッピ！」

『ピーー！』

リュウタはパートナーのブイゼル、ボクは妖精ポケモンのピッピ。前にカントー地方のお月見山って所に行った時に友達になったんだ……。

「いくぜー！ 水鉄砲！」

『ブーイ！』

ブイゼルは勢いよく水鉄砲を放ってくる。いきなり攻撃してきた……えっと……どうしよう……。

「ピッピ、守るー！」

『ピーー！』

ピッピはエメラルドグリーンの壁を発生させて、水鉄砲をうまく弾いた。やっぱり守るはいいな……これならボクのポケモンは傷つかない……。

「ピッピ！ コメットパンチ！」

「ブイゼル！ ソニックブームで接近させるな！」

右手にエネルギーを溜め込み、ピッピはブイゼルに向かって走り出したけど、ブイゼルのソニックブームが直撃して動きを止められてしまった。

まさかここで止められるとは思っていなかったボクは、少しパニックになってきてしまった。

「よっし！ アクアジェット！」

水を纏いながら、凄いスピードで突進してくるブイゼル。どうしよう……とにかくダメージを減らさないと。

「コスモパワー！」

ボクが指示を出すと、ピッピの体が光だした。コスモパワーは使ったポケモンの防御と特防を上げるの。これのおかげで、アクアジェットを受けたピッピにあまりダメージはないみたい……。

「ピッピ、歌う！」

『ピーー』

ピッピは綺麗な歌声で子守歌を歌い出す。その……ピッピで凄い歌がうまいの……歌うは相手を眠らす技。案の定ブイゼルの目がとろんとしてきた。

「やべっ！ ブイゼル！ 水鉄砲！」

リュウタは急いで技の指示を出すけど、ブイゼルは眠ってしまい、

夢の国にいつてしまった。……夢の国って表現、変……かな……？  
とにかくいまがチャンス……！

「目覚ましビンター！」

ピッピはブイゼルのほっぺに強烈なビンタを当てた。目覚ましビンタは相手が寝ているとダメージは大きくなるの。その変わりに目を覚ましちゃうけど……とにかくブイゼルは寝てるからダメージは大きいはず……。

『ブイ……』

ブイゼルはフラフラしながら立ち上がる。さすがリュウタのブイゼル……気合いが違うね。

「よっしゃ！　いくぜ！」

『ブイ……ブーイ……！』

なっなに？　ブイゼルは凄いい勢いで、冷たい光線を放ってきた。あれは……冷凍ビーム？　どっとうしよう！　あれが当たったらピッピが凍っちゃう！

「まっ守る！」

『ピイ……』

戸惑いながらも、なんとか冷凍ビームを防ぐことが出来た。危なかったね……。

「油断大敵！ アクアジェット！」

あっ！ 油断している間に、ピッピはアクアジェットをともに受けて、フィールドの壁にたたき付けられ、目を回していた……。負けちゃった。

「よっしゃ！ お疲れさんブイゼル！」

『ブーイ！』

「頑張ったねピッピ。ゆっくり休んで」

ボクはピッピをボールに戻す。ボクももっと強くないとね。

「じゃあ次は……」

「レナとユリノでいいんじゃないね」

ボクが考えていると、リュウタが提案した。でも……なぜかレナはボーッとしている。どうしたのかな……？

「……あっ私？ わかった。じゃあやろう……」

少しフラフラしながらレナはフィールドの位置につく。調子悪いのかな……？

「大丈夫か？」

「大丈夫よ。さあやろう」

「うっうん……」

ボクは少し戸惑いながらも、ボクはレナとの特訓を開始した。

レナ編 第三十八話 特訓！（後書き）

リュウタ

「最後のなんだ？ しかも短けーし」

仕方ないだろ！？（泣）



シヨウ編 第三十九話 搜索（前書き）

第三十九話完成！

今回はキヨウコ視点です

## シヨウ編 第三十九話 搜索

シヨウがポケモンセンターを出てからしばらくして、あたしは部屋で一人ぼっちになっていた。ヒカリはなんかこの町の博物館に行っちゃったしシヨウのポケギアに連絡しても反応ないし〜ふえ〜ん……退屈だよ……。

「博物館に……やめとこっ……」

一瞬博物館に行く選択があたしの頭に浮かんだけど、博物館なんて絶対あたしには合わないし……うん、シヨウを探しに行こうとあたしはそう思い、部屋を出た。

街中でシヨウのことを聞くと、それらしい人を見た聞いて、あたしは二百七番道路にやって来た。

「どこいったかなー？」

周りをキョロキョロ見渡してみるけど、シヨウらしい姿は確認出

来ない。ふえ〜どこいったの〜……。

「よしっあっちいってみよう!」

あたしが歩きだそうとすると、木の陰に火を纏った馬のようなポケモンがいた。ふわぁ〜綺麗だな〜。

『ヒンッ?』

あたしがじつと見ていると、そのポケモンはあたしの方に近づいてきた。

あたしはそのポケモンが気になり、ポケモン図鑑を向けてみた。名前はポニータ。見た目通り走るのが得意みたい。

「どうしたの?」

『……ヒンッ』

あたしが気になってポニータに話し掛けると、ポニータは軽く鳴く。するとぐう〜とポニータのお腹が鳴った。

「ほえ? お腹空いたの? これ食べる?」

あたしはバッグから、缶に入ったポケモンフーズ、つまりポケモンのご飯をポニータにあげてみた。

『ヒンッ』

ポニータはニコニコしながら、ポケモンフーズを食べはじめた。

よっぽどお腹空いてたんだ。

「……あつ！」

ポニータをボーッと眺めていると、前に見覚えのある格好をした人がいた。やっと見つけたよ。

「シヨウ見つけ！」

「……なんだ」

あたしが声をかけると、渋々あたしの方を見るシヨウ。ほえ？  
そっけない態度だった？ そんなのいつもだよ。

「なにしてたの？」

「……修業だ……調度いい。キョウコ、俺とバトルしろ」

ほえ？ バトル？ なんで急にそんなこと言っただろう……でも  
バトル楽しいっか！

「いいよー！」

「……なら使用ポケモンは三体だ」

三体？ あたしが持つてるのはピチューとオタチだけ。三体も持  
ってないのに……。

「三体も持つてないよ？」

「その後ろのポケモンはお前のじゃないのか？」

ふえ？ あたしの後ろ？ あたしは後ろを振り向くと、さっきポケモンフーズをあげたポニータがいた。ついてきちゃったのかな？

「あたしについて来たの？」

『ヒンッ』

笑顔で頷くポニータ。なら手伝ってもらおうかな

「じゃああたしはポニータでいくよ」

「わかった。なら俺はこいつだ」

そう言うと、ショウが出したのは、見たことのないポケモン。ほえ？ 新しくゲットしたのかな？

「新たな仲間のワンリキーだ」

『リッキー！！』

ファイティングポーズをとるワンリキーというポケモン。ふわあゝ 凄いバトルが好きなんだね。

「とりあえず技の確認つと……」

あたしは図鑑でポニータの技を確認する。よしっこれで大丈夫だね！

「先攻はもらう。ワンリキー、空手チョップ」

勢いよく走りながら、ポニータの頭にチョップを決める。痛そう……ってそんなことより技の指示しないと！

「ポニータ！ 火の粉！」

『ヒーン！』

ポニータは小さめの火の玉を沢山ワンリキーに向けて放った。それは技を使って隙が出来たワンリキーに当たった。やったあ！

「フン、リベンジ」

『リツキー！！』

ほえ！？ ワンリキーは凄い気迫を出しながら、ポニータに攻撃しようとする。確かにリベンジって……ほわわっ！ 当たったらマズイよ！

「高速移動でかわして！」

『ヒンツ！』

『リキツ！？』

「ちっ……」

あたしの指示がギリギリ間に合い、ポニータはリベンジを回避出来た。ふわぁ……危なかったよ。

「インファイト」

ワンリキーはポニータに接近すると、パンチやキックをポニータに当てる。ほわわっ！ ポニータ！

『ヒーン……』

ワンリキーの攻撃が終わると、ポニータは目を回していた。うう……あたしの判断ミスだあ……。

「ワンリキー、ポニータを端に運ぶんだ」

『リキッ』

倒れたポニータを、ワンリキーがバトルに巻き込まれないところに運んでくれた。こういうところは優しいよね。

「なら……お願いピチュー！」

『ピッチュー！』

あたしの選択はピチュー。さすがにオタチは相性が悪いしね。

「いくぞ。インファイト」

「天使のキッス！」

『ピッチュー』

ピチューは突っ込んでくるワンリキーに、ピンクのハートを作り出して当てる。するとワンリキーはフラフラとよくわからない動きを始めた。やった！混乱した！

「電気ショック！」

『ピーチューー！』

『リッキーー！』

「ワンリキーー！」

ピチューはワンリキーに電気ショックを浴びせる。確かインファイトを使うと、守りの能力が下がるはず。結構威力あるとおもうよ。

「……ちっ」

ピチューの攻撃が終わると、目を回しているワンリキーの姿。やったあ！あたしの勝ちね！

「ご苦労だった。なかなかやるな……」

「あたしだって強くなりたいんだもん！」

「フッ……なら次はこいつだ。頼むヒコザル」

『ヒッコーー！』

ふわぁー二番手はヒコザルかぁ……強敵だなあ。でもあたしは負



けないんだから！

シヨウ編 第三十九話 搜索（後書き）

いやゝ出来が悪すぎる……

シヨウ

「……………」

## レナ編 第四十話 不安

私達はとりあえず特訓を終えて、ポケモンセンターの食堂でご飯を食べていた。でも……どうも私は食欲がでない。現にあまり箸が進んでいなかった。

「けど結構疲れたな」

突然そう言うリュウタ。あれからだいたい三時間ぐらいバトルの特訓をしていた。さすがのリュウタも疲れている。ユリノは言うまでもないわね。

「レナ……大丈夫？」

「えっ……？　大丈夫ってなにが？」

「さっきからブーツとしてる……」

ユリノが心配そうに私を見る。まあさっきからご飯も進まないし頭もブーツとしてるし……今日は早く寝ようかな。

「じゃあ今日は早めに寝るか」

私のことを察したのか、早めに寝ようというリュウタ。私にとってはありがたいわね。

「じゃあ部屋に戻ろう」

ユリノがそう言うと、私達は部屋に戻っていった。私は部屋に戻

ると、すぐに眠りについてしまった。

次の日、いつも私は一番に起きているのに、起きたらすでにリュウタとユリノが起きていた。

「あれ、私最後？」

「おう、調子悪いなら無理すんなよ」

「そうだよレナ」

二人共私の心配をしてくれる。でも私は昨日よく寝たからか、少し体が軽くなってるような気がした。

「私は大丈夫。それより今日中につながりの洞窟を抜けよう」

「本当に大丈夫か？」

いつもお気楽なリュウタが、神妙な顔をしているとなんか違和感あるわね……でも私の心配してくれてるんだし、あんまりそんなこ

と思うのも悪い。それに二人の迷惑かけたくないし。

「大丈夫。とりあえず朝ごはん食べよ」

私はリュウタ達より先に部屋を出て、食堂へと向かって歩いていた。

「さて、行くか」

朝ごはんを食べ終えて、私達はポケモンセンターを出た。とにかくなんとか今日中につなかりの洞窟を抜きたいわね。

「レナ……」

まだユリノは私のことを心配しているのか、不安そうな顔をしていた。

「大丈夫よ。さあ行こう」

私はユリノの手を引つ張りながら、つながりの洞窟へと入っていた。

つながりの洞窟の中は、この前よりジメジメはしていなかった。今日は晴れてるからかしら。

「ここにはあまりいたくねーな」

リュウタがなんとなしに呟いた。ここにいると、負けたことを否応なしに思い出してしまう。

「まあ過去は変えられないしょ、とにかく今は強くなるうぜー!」

リュウタが暗い空気を変えるように言う。暗いのは嫌だからありがたい。

「じゃあ進もう」

ユリノも、私が大丈夫と言い続けたからか、少し笑顔になっていた。

「でもオレ達強くなったんだろうな?」

結局あれから私達はバトルしかしていない。まあバトルに詳しい人もいないから、とにかくバトルに慣れるしかない。昨日の特訓のおかげか、判断力が上がった気がする。まあ私は昨日ずっとボーッとしていたからか、あまり成果は出なかった。

「ねえ、あれ何かな?」

ユリノが指差す所には、一匹のポケモンがいた。水色の体を基調とし、つぶらな瞳が印象的だった。

私はポケモン図鑑をそのポケモンに向けてみた。名前はウパー。へえーああ見えて地面タイプも持つてるのね。

「こんな所にウパーっているんだね」

「私あのポケモン欲し……」

私はウパーが欲しいと言おうとしたけど、急に目眩がして、最後まで言えなかった。

「どうした？」

「うっん、私ウパー欲しいなあって」

「ならゲットしてきたら……？」

確かにゲットしたいけど……なんかまたフラフラしてきたし……ちゃんとポケモンに指示出来るか不安ね……。

「おい！逃げちまうぜ！」

「わかった。お願いエイパム……！」

『ウキー！』

私はボールからエイパムを出す。エイパムはやる気満々みたいね……私もしっかりしないと……。

「エイパム、乱れ引つかき」

『ウキッ！』

『ウパッ！？』

私はウパーに先制攻撃を仕掛ける。不意打ちに近い攻撃だったから、乱れ引つかきはウパーにうまく当たった。

『パー！』

ウパーは水鉄砲をエイパムに仕掛ける。そんな単調な攻撃……！

「エイパム、影」

エイパムに影分身を指示しようとしたけど、私は足元がふらつき、エイパムに指示を出せなかった。

エイパムは私の様子の変化に戸惑っていた。その間に水鉄砲が、エイパムに直撃してしまった。

「レナ！」

リュウタが不安そうに私の名前を呼ぶ。そんなユリノまで不安そうな顔しないでよ……私は大丈夫だから……。

「エイパム、スピードスター」

『ウキー！』



『パー！』

エイパムのスピードスターに対して、ウパーは泥を飛ばしてきた。あれは……マッドショットね。なら……。

「エイパム、高速移動で接近して……」

『ウッウキッ！』

私はあたらしく覚えた高速移動を、エイパムに指示する。その速さのおかげでマッドショットは当たらなかった。

エイパムはウパーに接近しようとするけど、途中でウパーは地面を揺らした。まさか……地震が使えるの……？

『ウパー！』

ウパーは地震の揺れで転んでしまったエイパムに、しつぽを鋼のようにして攻撃しようとする。あれは……アイアンテール……ダメ……早く指示しないと……エイパムが傷つく……でも今からじゃ間に合わない……ならあれしかない。

「カウンター……！」

『ウキー！』

エイパムはアイアンテールを両腕でガードすると、しつぽでウパーを攻撃した。その攻撃で、ウパーはふらふらしていた。

「今ね……」

私はモンスターボールを投げようとしたが、うまく狙いが定まらない。投げるのは厳しいと思い、少しウパーに近づきながら、モンスターボールを投げた。

モンスターボールはウパーに当たる。刹那ウパーはボールに吸い込まれていった。カタカタと動いていたが、やがて動きは止まった。

「ウパーゲット……」

私はボールを拾いながらつぶやく。すぐに心配そうな顔をしながら、リュウタとユリノが近づいてきた。

「おいレナ！ 大丈夫か！」

「レナ！」

「うっうん…… 大丈夫…… 夫……」

あれ…… なんか二人の顔見たら…… 安心しちゃったかな…… 私は急に意識が遠くなってきた。

「レナ！」

リュウタが私の名前を呼んでいる。なんとなくにそんなことを判断しながら、私の目の前が真っ暗になった

レナ編 第四十話 不安（後書き）

リュウタ

「レナ大丈夫かよ!？」

それは次の次なのだ

リュウタ

「シヨウ達なんかすっ飛ばせよ!」

シヨウ

「……………」

キヨウコ

「ひどーい!」

## シヨウ編 第四十一話 進化

「あたしが先攻もらうよ！ 天使のキッス！」

『ピチュ  
』

キョウコは先手に天使のキッスを選択したか。だがそれは俺も予測していたこと。予測していたことなら、対処するのめたやすい。

「火炎車で回避しながら攻撃しろ」

『ヒコッ！  
』

ヒコザルは器用に天使のキッスで発生したピンク色のハートを回避しながら、ピチューに体当たりする。思ったより上出来だ。

「ほわわっ！？ 大丈夫ピチュー！？」

『チユー  
……』

だいぶダメージがあるのか、ピチューはフラフラしている。今が決めるチャンスだ。

「火炎放射」

『ヒコッ  
……』

なんだ？ ヒコザルは俺の指示通りに動かず、その場で立ちすくしたままだ。まさか、さっきの攻撃で、ピチューの特性で麻痺した

のか？ ピチユーの特性は静電気。直接攻撃すると時々麻痺する。ちつ……不利になったな。

「チャンスだー！ ピチユー、電気ショック！」

『ピーチユー！』

痺れて動けない隙に、ピチユーの電気ショックがヒコザルに命中する。それなりのダメージになったか、フラフラしていた。

だが、この状態は俺にとってはチャンスだった。ヒコザルの頭に燃える炎が一段と強くなった。特性の猛火が発動したからだ。

「一気に決めるぞ！ 火炎車！」

「あたしだって、ピチユーにはすごい切り札があるんだから！ ボルテッカー！」

ボルテッカーだと？ ピチユーにそんな大技が使えたのか？ だがためらってる暇はないな。

「構わず突っ込め！」

『ヒコー！ー！』

「お願いピチユー！」

『ピチユー！』

二匹はぶつかり合い、パワーとパワーの真つ向勝負になった。

最初はピチューがスピードをつけた分有利だったが、次第にヒコザルが押していった。

「そのままいけ！」

『ヒコー！』

最後の力を振り絞り、ヒコザルはピチューを吹き飛ばした。ピチューは近くの木に叩き付けられ、目を回していた。

「はわわっ！ ピチューしっかりして！」

キョウコは急いでピチューのもとに駆け寄る。だが、俺のヒコザルも力尽き、その場に倒れていた。かなり無理をさせてしまったみたいだな。

「次で最後だ。頼むラクライ」

「あたしが勝つんだから！ お願いオタチ！」

『ガウッ！』

『オタッ！』

二匹はボールから出て一度鳴いた。ここまできて負けるわけにはいかない。

「スパーク」

「乱れ引つかき！」

先程のヒコザルとピチューのように、ラクライとオタチもぶつかり合う。パワーはラクライの方が高いからか、オタチは吹き飛ばされた。

「体制を整えて！」

『オタツ』

オタチは空中で上手く体制を整えると、上手に着地した。

「パワーもスピードも勝てない……ふえ〜どうしよう……」

なにか悶々と考えているが、逆に俺にはチャンスだな。一気に攻める。

「噛み付く」

「はわわっ！ オタチ！」

『オーター！』

「なにっ？」

ラクライが噛み付くを仕掛けようとした刹那、オタチはラクライ接近し、思い切り噛み付いた。まさか、噛み付く？ なぜオタチが噛み付くをつかえる？

「どうなってる……」

「オタチ？」

『オタツ  
』

オタチは笑いながらピースをしている。まさか、あれは先取りか？ 先取りは相手の使おうとした技を、威力を上げて自分で使う技。これは厄介だな……。

「だが俺達は負けない！」

『ガウツ！！』

俺に答えるかのように、ラクライは一鳴きする。刹那、ラクライの体が光だした。なんだこれは……？

「進化……か？」

半ば見とれるかのように、俺達はラクライの姿を見ていた。

光が収まると、そこにいたのはラクライじゃなかった。青と黄色を基調とした体に、黄色い鬣のようなものが特徴的だった。

俺は図鑑を向けてみる。名前はライボルト。ラクライの時より雷が強力になっているようだ。

「技が増えたな……これならいける」

図鑑で技を確認しながら、俺はここからの作戦を構成する。これ



ならいけるか……。

「ライボルト、スパーク」

「ほわっ！？ 先取り！」

予測通りだ。オタチは先取りを使い、スパークを使用しながらライボルトに突撃してきた。俺の計算通りだ。

「火炎放射」

『ガーウツ！』

「うそっ！？」

ライボルトは、灼熱の炎をオタチに向けて放った。まったく、進化して炎タイプの技を覚えるとは……さすが俺のパートナーと自惚れそうになる。

「オタチ、大丈夫！？」

『……オタツ』

まだオタチに余力があったか。かなりのガッツだな……もしかしたらキョウコの手元で一番諦めが悪いポケモンかもな。

「水の波導！」

『オタツ！』

オタチは青いエネルギー弾をライボルトに向けて放ってくる。遠距離技は火炎放射しかない……相性は悪いが、ライボルトを信じるだけだ。

「火炎放射！」

ライボルトは水の波導に向かって火炎放射を放つ。やはり相性が悪いからか、かなり押されていたが、ここまで威力とスピードが落ちれば上出来だ。

「電光石火からスパーク！」

『ガーウ！』

「うそっ！？」

ライボルトは電光石火で水の波導を回避し、雷を纏いながらオタチに体当たりする。よし、上手くいったな。

オタチは体力の限界が来たか、その場で倒れていた。この勝負、俺の勝ちだな……。

「お疲れオタチ〜」

『タッチ……』

労いの言葉をかけながら、キョウコはオタチをボールに戻した。

「よくやったなライボルト」

『ガウッ』

「これからよろしく頼む」

俺はそう言うと、ライボルトをボールに戻した。これで戦力が増したな。

「やっぱシヨウは強いね」

「ライボルトが進化していなかったら危なかった……所であのポニータはどうするんだ？」

俺はポニータを見ながら言う。さっきワンリキーが運んだ場所で座っていた。

「ねえポニータ、あたしと旅しない？」

『ヒンッ』

ポニータは即答で首を縦に振る。余程キョウコのが気に入ったのだろうか。

「じゃあいけっ！ モンスターボール！」

キョウコはボールをポニータに向かって投げ、ポニータはそれに吸い込まれていった。

ボールはしばらくカタカタと音をたてながら動いていたが、すぐにその動きを停止させた。

「ポニータゲット」

「……ならポケモンセンターに戻るぞ」

「ふえ？　ちよつともう少し喜びに浸らせてよ」

「勝手にやってろ……」

俺は今回のバトルを頭の中で反省すべき所を考えながら、キョウコとポケモンセンターへと戻っていった。

シヨウ編 第四十一話 進化（後書き）

シヨウ

「俺のポケモンが最初の進化か……」

キヨウコ

「あたしのポケモンも進化しないかな」

えゝ多分これから更新が止まります

シヨウ

「なぜだ？」

テストだから（泣）

## レナ編 第四十二話 決意（前書き）

久しぶりの更新です

リュウタ

「おいレナは大丈夫なのか!？」

それは今回の話で。あと一周年記念企画をやっているので、よかつたら誓いSPに詳細があるので見てください。では第四十二話をどうぞ！

## レナ編 第四十二話 決意

「おいレナ！ しっかりしろー！」

オレは倒れ込むレナをなんとか地面と衝突するのを防ぐ。下手したら大怪我していたな。

「リュウタ！ 凄い熱！」

ユリノが慌てながら言う。言われてみれば、顔も赤いし息も絶え絶えだ。くそっなんで気づかなかったんだ！ いや、今はそんな場合じゃない！

「とにかくここを出てポケモンセンターに運ぶぞ！ あそこなら人間相手でも多少の治療は出来るはずだ！」

慌てながらオレは言う。けどここは洞窟。どっちに出口があるかわからない……こういう時にこの前使った穴抜けの紐でもあれば……いや、今はそんな場合じゃねえな。

「リュウタ、あそこに人がいる！」

おっユリノの言う通り人がいるじゃん！もしかしたら出口の場所知ってるかもな！

「なあ、ヒワダタウンへの出口はどこだ？」

オレはそいつに話し掛ける。歳はオレ達より少し年上ぐらいで金髪、前髪で片目が隠れている男だ。

「ヒワダタウン？　すぐそこだ。慌てているみたいだがなにかあったか？」

「オレの仲間が倒れたんだ。すぐにポケモンセンターに向かいたいんだ！」

「そいつは大変だな……いいぜ、俺が連れてってやるよ」

おお、こいついいやつだな！　とにかく今はレナを早く連れていきたいからありがたいぜ！

「んじゃいくか。たのむフライゴン」

そいつが出したポケモンは、緑色を基調とした体に、大きい翼に長いしっぽがあるドラゴンのようなポケモンだ。フライゴンってのか。

「乗りな。出口に送ってやるぜ」

「ありがてえ！　いくぜユリノ！」

「うんっ！」

オレとユリノがフライゴンに乗ると、そいつも乗り込んだ。

「頼むぜフライゴン」

そいつが指示すると、フライゴンはいつきにスピードを出し、出口に向かって飛んだ。すぐに洞窟の出口にたどり着いた。



「おっもつ着いた！」

「ついでだ。ポケモンセンターまで乗せてってやるぜ」

こいつすげえいいやつじゃん！　ありがたくって涙が出るぜ！  
オレがそんなことを考えていると、

「着いたぜ。早く嬢ちゃん連れていきな」

「おう、ありがとよ！　いくぜユリノ！」

「うんっ！」

オレはレナをおんぶしながら、急いでジョーイさんの所に走り出した。

ジョーイさんにレナを任せ、オレはポケモンセンターのロビーにいた。ユリノは女の子だから付き添っても大丈夫とジョーイさんに

言われ、レナの所に行っている。

「……ちっ」

時間はもう夜。結構立つてるのにまだ連絡は無い。オレはなににも出来ないもどかしさに舌打ちをする。まあ行っても出来ることは無いし邪魔になるだけだ。頭ではわかっている……けどよ、黙って待ってるのは性に合わねえっての！

「嬢ちゃんの容態はどうだ？」

んっ？ と後ろを向くと、さっきここまで送ってくれた男がいた。そつえば名前聞いてなかったな。

「まだわかんねえ。それよりありがとな、えっと……」

「名乗って無かったな。俺はレオン」

「オレはリュウタだ……あっ！」

レオンと話していると、ジョーイさんがオレの所に来た。どうやら熱もだいぶ引いたらしく、もう部屋に行っても大丈夫らしい。

「悪いレオン、オレ行くわ」

「おう、気にすんな」

オレはレオンに別れを告げると、駆け足でレナが寝ている部屋に向かった。

オレが部屋に着くと、静かに寝息を立てているレナと、レナの看病に疲れたのか、ユリノも寝息を立てていた。

「だいぶ顔色良くなったな……」

オレはレナの顔を覗きながら呟いた。

「疲れていたんだろな……いろいろあったしな」

旅に出てから殆ど休み無しかったからな……シヨウ達と別れたりジム戦したり、アンノーン達と戦ったりシン達と死闘を繰り広げたり、特訓したり……特訓の時に様子がおかしかったのに、なんでオレは気づけなかったんだ……！！

「くそっ！」

オレは思わず近くにあった机を、上から拳を振り下ろし殴りつけてしまった。その音でレナは目を覚ましてしまった。

「……リュウタ？」

「おう、大丈夫か？」

「ゴメン……心配かけて……」

なに謝ってんだよ……悪いのは気づかなかったオレなのに……レナは悪くねえよ……。

「ユリノにも迷惑かけたわね……」

「違う！ 悪いのは気づかなかったオレだ！ オレが調子悪いのに気づいていれば……！！」

「そんなに自分を攻めないの。リュウタの悪い癖よ」

優しくレナはオレに言う。でも悪いのは……オレだ……。

「……悪いと思ってるのは頼み聞いて」

「なんだ？ オレに出来ることか？」

「うん、手出して」

手？ よくわからないけど、オレは言われた通りに手を出すと、軽くレナにその手を握られた。

「レナ？」

「少しこうさせて……」

まあレナがこうさせてって言うてんだし、まあいいか。手を繋ぐ程度なら餓鬼のころにしていたし。

なんとなくそんなことを考えていると、いつの間にかレナは静かに寝息を立てていた。

「……寝ちまったか」

寝たなら手を離してもよかったけど、このままでいいかと思い、オレは近くの椅子に座り、さっき殴った机に頬杖をついた。

「これからはもう少し二人のことを考えて行動すっかな……」

よく考えたら、オレはいつも先走ってレナやユリノを振り回してたな……このままだとユリノも倒れるかもしれない。

「……もう少しオレも大人になった方がいいのかもな……」

なんとなくそんなことを口にする。オレに落ち着きを求めるのは間違いだと思うけど、少し制御出来るようにならないとな。

そんないろいろ考えながら、オレは手を握られながら、レナの寝顔を眺めていた。結構飽きないものだった。

## シヨウ編 第四十三話 挑戦（前書き）

えゝ久しぶりの更新です。今回は途中で視点が変わります。では第四十三話をどうぞ！

## シヨウ編 第四十三話 挑戦

キョウコとバトルした次の日、俺はいつもより早くに目を覚ました。今日は初めてのジム戦だ。受付は昨日中に済ませたから、あとは時間になったら行くだけだ。

だが何故このような時間に目を覚ましてしまったのだろうか。まだ6時にもなっていない。早過ぎる。

「……………ん？」

よく見ると俺の手が微かに震えている……………震えている？ 緊張しているのか？ 俺が？ フンッ、俺がぶるっちまうことがあるとはな……………我ながら驚きだ。

「……………」

じつとしているのはいくらでも出来るが、今はあまり考え事をしたくない。そう思った俺は、キョウコを起こさないようにそっと部屋を出た。

ポケモンセンターを出て少し歩いていると、炭鉱の町と呼ばれるクログネシティにしては珍しい緑豊かな公園があった。前に聞いたが、この連中は、この町に残ったこの自然を大切にしているらしい。

その公園に入ると、子供が遊ぶような遊具があった。俺もガキの頃にレナ達と遊んだな。懐かしい。

そんなことを思っていると、草木が茂る小高い丘があった。似たような所がワカバタウンにもあったな。その丘に登ると、俺は座り込んだ。

「久しぶりにやるか……」

ぼつりと呟きながら、俺はその場に座ると、スッと目を閉じた。

精神統一　前に俺の親父がやっているのを教えてもらったことがある、集中したい時や平常心を保ちたい時に、俺はこれをやる。

集中し、風や大地や空、この星と一体になる



＼K y o k o   S i d e ｝

あたしはポケモンセンターを出るとすぐにシヨウを探し始めていた。も＼すぐに勝手に行動しちゃうんだから！ ほえっ？ あたしの方がそうじゃないかって？ そんなことない＼！

「見つからない＼」

探し出してから30分は経つけど今だに見つからない。シヨウの行く場所って付き合い長いあたし達でもわからないからな＼。

「あつ公園がある……」

あたしはこの町には珍しい緑が多い公園を見つけた。もしかしたらここにいるかとも思い、あたしは公園に入ってみた。

公園に入ってわかったけど、ここってクロガネシティには珍しい場所のような気がする。緑の多いワカバタウンで育ったあたし達には落ち着ける場所だね。

「うゝん……あっ！ いたっ！」

あたしは小高い丘に座っているシヨウを見つけた。あれ？ 珍しくあれやってる……名前なんていったっけ？

「あれやってると全然反応ないんだよね……」

シヨウがあれをやっていると、時間が経つかよほどのことがないと反応しない。それほど集中しているってことなんだろうけど……ふえゝどうしよゝ。

「……………ん？」

どうしようかと考えていると、集中が目を開けてあたしの方を見ている。ほわっ！ 気づいてもらえたあ！

「キヨウコか。なにやってる」

「起きたらシヨウがいないから探しに来たんだよ」

そうかと軽く返事をする、シヨウはまた目を閉じようとする。

ってまたやったらダメっ！

「ねえシヨウ。もうすぐジム戦だよ」

「……そうか」

ふう、なんとか止められたよ……ふえ？ まだ時間あるんじゃないかって？ こうしないとまたシヨウがあれ（名前やっぱり思い出せなくいい！）をやっちゃうよ。

「あとシヨウ、ポケモンセンター出る時にパン貰ったよ」

「……………」

あたしが袋からパンを出すと、シヨウは黙ったままパンを受けとって口にした。あのパン、確かあんパンだったかなあ。

「戻るぞ」

「ふえ？ 待ってよ」

シヨウはパンをモグモグしながら立ち上がると、元来た道に戻ろうとした。ほわわっあたしを置いてかないでよ。

ポケモンセンターで準備を終えたあたし達は、ジムの前に来ていた。ふえゝ前に来た時も思ったけどゴツゴツした造りになってるよゝ。

「……………」

シヨウは黙りながらジムの扉を開いた。中には受付とバトルフィールドに繋がる扉がある。

「チャレンジャーの方々ですね」

「嗚呼」

「トレーナーカードをご提示ください」

あたしとシヨウは受付の人にトレーナーカードを見せる。すると受付の人はパソコンになにかを打ち込んでいた。

「ありました。最初はシヨウさんからですね。幸運をお祈りしています」

「……………」

黙ったままバトルフィールドに向かうシヨウ。やっぱり緊張しているのかなあ。ほえ？ あたし？ あたしはいつもどーりのあたし！

「シヨウ、頑張つてね！」

「嗚呼」

片手を上げてシヨウは返事をする、バトルフィールドに入っていた。あたしはとりあえず観客席へと向かった。

観客席についた頃には、シヨウはバトルフィールドに着いていた。相手はクロガネシティのジムリーダー、ヒヨウタさん。ヘルメットと眼鏡が特徴だね。

「ジム戦にようこそ、シヨウ君。バトルは三対三のバトルだ。いいね？」

「嗚呼」

三対三か。あたしも多分そうなるんだろうけど、ポニータを仲間にしといて正解だったよ。

「じゃあ始めよう！　まずはこいつだ！」

『ローン！』

ヒヨウタさんはボールから岩石に似たポケモンを出してきた。あたしはそのポケモンに図鑑を向ける。名前はゴローン。見た目通り岩タイプ。ヒヨウタさんは岩タイプの使い手なんだよ。

「いくぞ、ヒトデマン」

『デヤッ!』

シヨウのチョイスはヒトデマンか。やっぱり岩には水タイプだよね。

「先攻は譲るよ」

余裕を見せるヒョウタさん。なんかジムリーダーとしての威厳があるよ。でもシヨウ! 負けないでよ!

レナ編 第四十四話 復活と隠し事（前書き）

久しぶりの更新ですね。まあとりあえずサブタイトルはあまり関係ないかもです

レナ編 第四十四話 復活と隠し事

「うん……」

私は窓から差すお日様の光に反応して目を覚ました。あれ、私昨日……あ、そっか。昨日私倒れちゃったんだ……。

「……………」

私は無言で部屋を見渡す。隣のベッドでユリノが普段着のまま寝ている。疲れてそのまま寝ちゃったのかしら……。

それに私のすぐ隣には、リュウタが椅子に座り、ベッドのすぐ近くにある机に頬杖をついて寝ている。ってなんで私リュウタと手繋いでるの！？ ってそっか。私が頼んだんだ……よくよく考えるとなんで私はそんな恥ずかしいこと頼んだの！？ 考えれば考えるほど私の顔は赤くなっているのがわかった。

「…………でも、ずっと繋いでいてくれたのね」

私はやはり恥ずかしい気持ちがあっただけ、なんだか安心感を覚えた。こんな気持ちは久しぶり……。

「…………うん？」

私の声に反応したのか、リュウタは目を覚ました。あっ起こしちゃったみたい。

「レナ？ もう大丈夫なのか？」



「うん、大丈夫」

「そっか。ならよかつ……っっ!!」

リュウタは安堵の息を漏らした刹那、声にならない悲鳴を上げた。  
どっとうしたの!?

「せっせっ……」

「せ?」

ブルブル震えながら、リュウタは“せ”を連呼している。本当に  
どうしたのかしら……なんでもないならただのアホな子にしか見え  
ないんだけど……。

「背中痛ええええ!!!!」

「……………」

“せ”って背中“せ”だったのね……まあ座ったまま寝たらど  
つかしら痛くなるわよね……まあ私のせいなんだけど。

「私湿布もらって来るよ」

「おいおい、レナはまだ寝て　　っ!!」

背中が痛い状態で言っても説得力ないわよ……とりあえず私はジ  
ョーイさんに湿布を貰いに部屋を出た。

「そうだったの……」

私はジョーイさんから貰った湿布をリュウタに張り終えてから、倒れてからあったことの話を聞いていた。

「まあな。レオンには感謝しねーとな」

いつも通りの口調で喋るリュウタ。湿布が効いているみたいね。よかった。

「まあなんにしても、ヒワダタウンにはついたから、明日辺りにはジム戦ね」

「なに言ってんだ！ まだレナは休んでろ！」

いつもより強い口調で、リュウタが私に言い放つ。私自身はもう大丈夫だけど、やっぱりリュウタはまだ心配みたいね……。

「……あれ？ レナ？」

やっと起きたユリノが、起きている私を見て少し驚いていた。

「もっもう大丈夫なの？ まだ寝てたほうが……」

「一応熱は引いたわ。とりあえずは大丈夫」

私が優しく言うと、ユリノはホッと胸を撫で下ろしていた。ユリノにも心配かけちゃったみたいね。

「あっそうだ」

私はあることを思い出し、おもむろにバッグからモンスターボールを取り出した。

「出ておいで」

ボールから出てきたのはウパー。昨日ゲットしたのに、まだ挨拶していなかったの。

「ウパー？」

突然ボールから出たので、どうしたのかとウパーは首を傾げている。

「昨日はちょっとあって挨拶まだだったから。よろしくねウパー」

「パー」

ウパーはニコニコしながら、私の膝の上に乗ってきた。ヒメグマ

に劣らぬ甘えん坊さんね。

「リュウタ、私お腹すいちゃった」

「んじゃ飯行くか」

私達はとりあえず着替えをして（私とユリノが着替えているときはリュウタを外に出てもらったわよ）食堂へと向かった。

昨日ちゃんとご飯を食べていなかったからか、今日はいつもより朝ごはんを食べた。今日はご飯やみそ汁などの和風料理。あっさりしていて食べやすい。

「よう」

私達に声をかけてきたのは、金髪で前髪で片目が隠れている男の人。でも私には見覚えがない。

「ようレオン！」

レオン？ この人が昨日助けてくれたレオンさん？

「おっと、嬢ちゃんはもう大丈夫なのかい？」

「まあな。レオンがここに連れてきてくれたおかげだ」

「別にたいしたことねえよ」

リュウタとレオンさんが楽しそうにおしゃべりしている中、私とユリノはその話に入らず、取り残されたような状態になっていた。

「おつと悪い悪い。自己紹介が遅れたな。俺はエンジュシティのレオン」

私とユリノに気がついたのか、自己紹介をしてくれるレオンさん。あれ？ エンジュシティ出身？ ユリノと同じね。

「私はレナ。昨日はありがとうございました、レオンさん」

「あゝ敬語は無しで構わないぜ。堅苦しいのは苦手なんだ」

「わかったわ、レオン」

私の自己紹介を終えると、後ろに隠れていたユリノを、私の前に出す。もう、もう少しユリノは前に出ることを覚えないと。

「ボッボクはユリノ……よろしく」

「ユリノ？ ユリノってあの……？」

あれ？ ユリノのことを知っているのかしら……？ でもユリノはなんだか苦しそうな顔をしている。一体どうしたのかしら……

「まあいつか。俺がどうこう言う立場じゃねえしな」

なにかを察したのか、レオンはすぐに話を切ってしまった。それがユリノには都合がよかったのか、ホッと胸を撫で下ろしていた。

一体なにがあったのかしら……でもユリノが話したがないみたいだし、ユリノが話してくれるまで待とう。私はそう思い、あまり言及はしなかった。

「なあレオン。この後暇か？」

「あ？ まあな」

「俺とバトルしようぜ！」

やっぱり……暇かどうか聞いた流れでそうなると思ったけど、やっぱりそうだったわ。でもいきなりはレオンに迷惑なんじゃ……？

「構わねーぜ」

思ったより簡単に受け入れたわね。きっとリュウタはこの前の特訓の成果を試したいのね。

「じゃあバトルフィールドに行くか！」

リュウタを先頭にして、私達はポケモンセンターのバトルフィールドへと向かった。

「リュウタ！ お前の手持ちは何体だ？」

「二体だ！」

「なら二対二でやるか！ んじゃ出てこい！」

レオンが出したポケモンは、私が見たことのないポケモンだった。なんかとっても綺麗なポケモンね……私はポケモン図鑑を向けてみた。名前はミロカロス。水タイプのポケモンなのね。リュウタも同じように図鑑を向けていた。

「相性は悪いがお前ならいけるよな！ 頼むぜヒトカゲ！」

『カゲー！』

リュウタのトップバッターはヒトカゲね。相性は悪いけどどう戦うのかしら。

「先攻はリュウタでいいぜ」

「へっ余裕かましている場合か？」

あくまでもリュウタは強気な姿勢を保っている。とにかくリュウタ！ 頑張って！



レナ編 第四十四話 復活と隠し事（後書き）

次回はシヨウのジム戦ですね

シヨウ

「……………」

シヨウ編 第四十五話 クロガネジム

「ヒトデマン、水鉄砲」

ヒトデマンは勢いよく水流をゴローンに向かっていく。これが決まれば手出しは好調と言ったところか。

「決めさせないよ。守る！」

ちっ守るか。水鉄砲がゴローンに当たる前に壁が発生して防がれたか。まあジムリーダーなら水タイプ対策はしているか。

「岩落としだ！」

『ローン！』

ゴローンは近くにあった岩をヒトデマンに投げつけてきた。なるほど、このバトルフィールドを上手く使っている。

「水鉄砲で打ち落とせ」

『デヤッ！』

ヒトデマンは水鉄砲を岩にぶつけて勢いを殺すことに成功した。フンッこの程度、俺達には通用しない。

「ならこれだ！ 地震！」

「なにっ？」

『ゴロー!』

ゴローンは地面を力強く叩き、地面を思い切り揺らした。そのせいでヒトデマンはバランスを崩し、倒れてしまった。チツ……やはり相手の方が上手か。

「今だ! 気合いパンチ!」

「硬くなる!」

間一髪でヒトデマンは硬くなるを発動し、気合いパンチの威力の軽減をした。今のはさすがに危なかった。だがこの至近距離なら決まるか。

「水鉄砲!」

「読んでたよ! 守る!」

読まれたか。水鉄砲が当たる前に守るで防がれるとは……だが……。

「俺は更に読んでいた。怪しい光」

「なにっ!?!」

さすがにそこまでは読まれなかったか。ヒトデマンのコアが怪しく光ると、ゴローンは意味不明な動きをし始めた。怪しい光で混乱したな……一気に仕留める。

「水鉄砲！」

『ゴロー！』

「ゴローン！」

決まったか。ゴローンは水鉄砲を受け、その場に倒れている。よし……まずは一勝か。

「まだだ！ 立てゴローン！」

なに？ ゴローンの奴、ヒョウタの声に反応して立とうとしているのだと？ あれを受けて立つのか。

『ゴー……』

ゴローンは弱い声で鳴くと、その場に倒れた。今度こそ勝ったか。

「ゴローン戦闘不能！ ヒトデマンの勝ち！」

よし、まずは一勝だな。幸先良いスタートを切ることが出来た。

「やるね。君みたいなチャレンジャーは久しぶりだよ。だけど次はどうかな？ イワーク！」

『イワーク！』

イワークか……あの蛇みたいに長い体と硬い体に注意しながら戦うか。まあ相性が良いのには変わりはない。

「一気に決める。水鉄砲！」

「させないよ！ 竜の息吹！」

竜の息吹だと？ なるほど、遠距離技で水鉄砲を相殺するつもりか。それが上手くいったようで、竜の息吹に水鉄砲は相殺されてしまった。

「通せんぼうだ！」

『デヤッ！？』

「なに？」

どうなっている？ ヒトデマンの周りに岩が発生して身動きが取れなくなってしまった。これはマズイか……。

「通せんぼうは本来相手を逃がさなくする技だけど、こんな使い方もあるんだよ。ギガインパクト！」

『ワーク！！』

イワークは凄まじい勢いで、動きを止められたヒトデマンに突撃した。くっ、これは駄目か……？

「ヒトデマン戦闘不能！ イワークの勝ち！」

やはりか。俺が確認する前に審判がコールを入れた。あの通せんぼうをなんとかしない限り勝機は無いか。

「ご苦労だった。ゆっくり休んでくれ」

俺はヒトデマンをボールに戻すと、新たにボールを手を取った。  
俺のポケモンでイワークに勝てるのはこいつだけだ。

「頼む、ワンリキー」

『リッキー！』

「ワンリキーか。相手にとって不足は無い。イワーク、竜の息吹！」

いきなり遠距離技か。やはりワンリキーに接近戦は厳しいと踏んだか。だが甘いな。

「しゃがんで回避しろ」

ワンリキーは俺の指示通りしゃがみ込むと、上手く竜の息吹を回避した。ワンリキーの体の小ささが回避成功に繋がったか。

「バレットパンチ」

『リッキー！』

ワンリキーは一気にイワークに接近すると、鋭いパンチを放った。バレットパンチは必ず先制攻撃が出来る。あまり早くないワンリキーにはありがたい技だ。

「怯むな！ ロックブラスト！」

イワークは一旦距離を取ると、自分の体の周りに岩を発生させ、

ワンリキーに向かって放ってきた。フンッ、俺のワンリキーを馬鹿にしないでもらいものだ。

「空手チョップで破壊しろ！」

『リキッ！』

ワンリキーは空手チョップで岩を破壊していったが、一発だけ残ってしまっていた。これは間に合わないか？

「あと一発ある！」

『リキッ！？』

やはり間に合わなかったか……しかも一発とはいえかなりの威力だな……あまり長いバトルは無理か。

「決めるぞ。インファイト！」

「こちらも決めるよ！ ギガインパクト！」

俺達の指示通り行動する二匹のお互いの最強技がぶつかり合い始める。相性ならこちらが有利だが、如何せん相手がデカイからな……ワンリキーを信じるしかない。そう思った刹那、二匹はお互いに吹き飛ばされ、壁にたたき付けられた。

「ワンリキー！」

「くっイワーク！」

互いの声に反応せず、二匹は目を回している。このバトルは引き

分けか。

「ワンリキー、イワーク戦闘不能！ このバトル引き分け！」

「お疲れイワーク」

「ご苦労だったワンリキー」

俺達は自分のポケモンをボールに戻す。ここまでは互角に戦えている。このままの調子でいきたいものだ。

「さすがだね。なら最後はこいつだ！ ラムパルド！」

『パー！！』

初めてみるポケモンだな……まあ図鑑を出すのは面倒だ。さっさとバトルを再開したい。

「ならこちら最強のポケモンで挑む。ライボルト！」

『ガーウ！』

さすがに岩タイプ主体のヒョウタにヒコザルは辛いだろうから、俺の選択はライボルト。遠距離技も覚えてからバトルの幅も広がったからな。俺の期待に応えるだろう。

「初めてみるポケモンだね。だけど僕のラムパルドに勝てるかな？」

「当然勝つ。俺はそのために来た」



「頼もしいね。なら僕も本気でぶつかると！ 両刃の頭突き！」

ラムパルドは物凄い勢いでライボルトに迫って来る。図体がデカイ所からしてパワーがありそうだ。まずは様子を見るか？

「火炎放射」

とりあえず遠距離技で様子を見ようと火炎放射を指示する。さあ、いくら相性が良いとはいえみすみす直撃するのを選ぶか？

「突っ込め！」

「パルー！」

なにっ？ 直撃を恐れずに突っ込むとはな……一応火炎放射は当たっているが、あまり効いていないようだ……まだ覚えたばかりで技の焦点が定まらないか……。

「中断して電光石火で回避しろ」

「ガウツ！」

「逃がすな！」

「パー！」

電光石火で上手く回避は出来たが、ラムパルドはお構いなしに突っ込んで来る。しかもフィールドにある岩を破壊しながら迫って来る。とんでもないパワーだが……動きが単調だ。

「ライボルト、電磁波」

『パルツ！？』

「しまった！」

ライボルトの電磁波がラムパルドを捕らえた。刹那、ラムパルドの動きは鈍くなった。これでパワーだけしか無くなったか。だがあのパワーにこちらが対抗出来る技は少ない。ならパワーを上げるだけだ。

「遠吠え」

『ガーウー！』

動けない今を狙い、ライボルトは遠吠えをする。これで多少パワーは上がった。一気に仕留める。

「スパーク」

『ガウツ！』

痺れて動けないラムパルドに、パワーが高まった今のライボルトなら決められる……そう思ったが、相手はジムリーダー。そう、俺の考えは甘かった。

「それを待ってたよ！ ストーンエッジ！」

『ラームー！』

『ガーウツ!!』

「ライボルト!」

スパークが決まる寸前に、ラムパルドは自分の周りに鋭く尖った岩を発生させ、それをライボルトに向けて放ってきた。至近距離にいたライボルトに避ける術は無く、まともに喰らってしまった。

ちつ……俺としたことが攻撃が単調になったか……まさかヒョウタはそれを狙っていたのか?

「大丈夫かライボルト?」

『ガウツ!』

とりあえずは大丈夫のようだな。流石は俺のパートナーと言った所か。このまま終わるわけにはいかない。

「負けるなショウー!」

観客席からキョウコの声援が聞こえる。フンツ言われなくても負けるつもりなんか毛頭ない。必ず勝つ。

「もう一度遠吠え」

「させないよ! 地震!」

ラムパルドは地面を足で踏み付けて思い切り揺らした。そのせいでライボルトはバランスを崩して転倒してしまった。このままだとマズイ。恐らくヒョウタはあの技を指示するだろう。

「両刃の頭突き！」

やはりか。あの技を喰らえば終わる。だがあの技に対抗出来る術がライボルトには無い。更に立ち上がっている暇も無い。くっ万事休すか……？ いや、もう負けるのは嫌だ。最後まで足掻いてやる。

「吠える！」

『ガーウー!!』

『パルツ!!?』

「なにっ？」

迫って来るラムパルドに、ライボルトは大声で吠える。本来なら強制的に交代させる技だが、相手を怯ませるのにも使えるみたいだな。博打だったが上手くいった。

「これを逃すな！ スパーク！」

『ガウツ!!』

ライボルトは素早く立つと、体に雷を纏いながらラムパルドに体当たりする。その威力は高く、その勢いでラムパルドは岩に叩きつけられた。これで決める。

「火炎放射！」

『ガーウツ!!!』

『パルドー！』

「ラムパルド！！」

よし、火炎放射が決まった。全力のスパークと火炎放射が決まったが、どれぐらいのダメージだ？

『パルドー……』

フラフラしながらも、ラムパルドはその場に立っている。流石はジムリーダーのポケモン、と言った所か。

「ラムパルドがここまで追い詰められたのは久しぶりだ。だけど次で決めるよ！ ストーンエッジ！」

ちっここで遠距離技か……火炎放射だと打ち勝てる要素は皆無。なら……ライボルトを信じるしかない。

「雷の牙でストーンエッジを砕け！」

「なに！？」

ライボルトは口に雷を溜め込み、向かって来る岩を砕いていく。ヒョウタも俺の指示に驚いている。当然と言ったら当然だろうが。

そんな俺とヒョウタを余所に、ライボルトはストーンエッジを全て破壊し、ラムパルドに突撃していく。

「決める！ スパーク！」

『ガーウツ!!』

『ラムー!!』

「ラムパルド!」

ライボルトはラムパルドに突撃していく。そしてスパークはラムパルドの腹部に決まり、地面にたたき付けられた。

「やったか?」

俺は技の威力で発生した煙りが晴れるのを待つ。少しすると、目を回したらラムパルドの姿があった。

「ラムパルド戦闘不能! ライボルトの勝ち! よってこのバトル、シヨウの勝ち!」

俺の勝利が審判のコールで決まる。危なかったがなんとか勝ったか。

「やられたよ。おめでとうシヨウ君」

ヒヨウタはラムパルドをボールに戻すと、俺のもとに歩いてきた。

「これが僕に勝った証、コールバッジだ」

「どうも」

俺はバッジを受け取ると、バトルフィールドを出て受付に戻った。

そこには満面の笑みを浮かべたキョウコが立っていた。

「やったねシヨウ！」

「当然だ」

「ほえっ？ 勝ったんだから喜ばうよ」

知るか……勝手にやってろ……。

「とにかくはあたしだ！ 頑張るね！」

「嗚呼。勝ってこい」

「ふえっ？ うんっ勝ってくる！」

キョウコは微笑みながら、バトルフィールドに入っていた。俺はそれを見ると、観客席に上がった。

バトルはキョウコはピチュー、オタチ、ポニータ。ヒョウタがいシツブテ、ズガイドス、ハガネールのバトルになった。思ったより接戦になったが、ポニータのスピードがハガネールを圧倒し、なんとか勝利することが出来た。

俺とキョウコは、初めてのジム戦を勝利で飾ることが出来た

レナ編 第四十六話 高み（前書き）

最初の前書きはこのオレリユウタだぜ！

レナが風邪で倒れた翌日、なんとかレナは風邪が治り、元気になった。よかったよかった。

その日、オレ達を助けてくれたレオンとバトルを挑んだ。最初はヒトカゲとミロカロス。相性は悪いけどそんなものひっくり返してやるぜ！！



レナ編 第四十六話 高み

「いくぜ！ 火の粉だ！」

ヒトカゲは小さな火の玉をミロカロスに向かって放つ。さてどうでるんだ？

「甘いぜ。水鉄砲」

『ロー！』

うおっ！？ あんなにあつた火の玉が水鉄砲一発で全て消されちゃった！？ しかもそのままヒトカゲに向かって来やがる！

「ジャンプしてかわせ！」

『カゲツ！』

よし！ 判断が早かったおかげで水鉄砲は当たらなかった。見た感じあまり速そうじゃないな……ならスピード勝負だな！

「ダッシュで接近するんだ！」

「させるか！ 竜巻！」

なにっ！？ ミロカロスは竜巻を発生させてヒトカゲの動きを止めやがった！ パワーだけじゃなくて技術も向こうが上……八方塞がりだが諦めないぜ！

「体勢を立て直すんだ！ 火の粉！」

「さっきと二の舞だぜ！ 水鉄砲！」

『カゲー！』

『ミロー！』

やっぱり反撃してきたな。だがそれを待っていたぜ！

「中断して接近しろ！」

「なにっ！？」

ヒトカゲは火の粉を中断し、器用に水鉄砲を回避するとミロカロスの懷に潜り込んだ。よし！ 流石にブイゼル程じゃないけどヒトカゲもスピードはあるな！

「引つかくだ！」

『カゲカゲー！！』

『ロー！』

油断した隙に引つかくを浴びせまくる。一発一発に威力はあまりないけど、これだけ浴びせれば多少なりともダメージは与えられるはずだ！

「やるじゃないか！ だがミロカロスを舐めるなよ！ アクアテール！」

ミロカロスは、長いしっぽに水の竜巻みたいなものを発生させて、ヒトカゲにたたき付けてきた。ってこれはマズイよな!?

『カゲツ……』

ヤバいな……俺の指示が間に合わなくてフラフラしちまってる……どう攻めればいいんだ……?

「いつものリユウタらしくないよ!」

「がっ頑張つて!」

観客席でレナもユリノも必死に応援してくれている。へっオレとしたことが弱気になっちまったな……逃げ腰なんからしくねえ! ガンガンいくぜー!!

「諦めるなヒトカゲ!! 火の粉だ!!」

『カゲー!!』

おおっ! 猛火が発動したみたいだな! さっきの火の粉よりも量が多いし威力も高そうだぜ! 決まればデカイダメージだ!

「流石に水鉄砲じゃキツイか。ハイドロポンプ!」

『ミーロー!!』

火の粉に対して、ミロカロスはとてつもない激流を放つと、火の粉をいとも簡単に打ち破り、ヒトカゲに命中させた。あんな強い技

があつたのかよ……ヒトカゲは？

『……………』

ヒトカゲはその場に倒れ、目を回していた。さすがにあれは耐えられないよな……でも頑張ってくれたぜ。

「ありがとな。ゆっくり休んでくれ」

オレはヒトカゲをボールに戻すと、もう一つのボールに手をかける。あとはオレのパートナーに任せるか！

「やるなりユウタ！ まだ旅に出立てとは信じがたいな！」

「当たり前だぜ！ ってレオンは旅長いのか？」

「まあな。さあ二体目いこうぜ」

「だな！ 頼むぜブイゼル！」

『ブーイ！』

ブイゼルはボールから元気良く出てくる。やる気十分みたいだな。さあいくぜ！

「ブイゼル！ 水鉄砲！」

『ブーイ！』

ブイゼルは勢い良く水鉄砲を放つ。相性は良くないけどとりあえ

ず様子見だな。

「アクアテールで弾け！」

『ミロツ！』

マジかよ！？     ブイゼルの水鉄砲をアクアテールで弾き、打ち消してしまった。ブイゼルのパワーでもダメか……ならスピードだぜ！

「電光石火だ！」

「接近させるな！     竜巻！」

やっぱりな。ミロカロスの図体からして接近戦は苦手みたいだな。けどその対策はしてあるぜ！

「ソニックブームで竜巻を打ち消せ！」

『ブイッ！』

「なっ！？」

ブイゼルは竜巻に突っ込む前にソニックブームをぶつけて相殺させた。よっし、一気にいくぜ！

「アクアジェットだ！」

『ブーイ』

ブイゼルは体に水を纏わせると、ミロカロスに体当たりした。よし、ヒットしたぜ！

「お前のバトルは面白いな！ アクアテールだ！」

「右にステップしてかわせ！」

予想通りアクアテールをしてきたな……ブイゼルは上手くステップして回避しながらもう一度アクアジェットを決める。ガンガン攻めるぜ！

「今ならいけるかもしれないぜ！ 冷凍ビームだ！」

『ブーイ！！』

よっしゃ！ 今回は上手く出たぜ！ この至近距離で冷凍ビームがヒットしたんだ。かなりのダメージになったぜ！

「これ以上は無理か……お疲れ、ゆつくり休んでくれ」

はっ？ レオンの奴ミロカロスをボールに戻したぞ？ 交代ありだっけ？

「もうミロカロスは限界だ。これ以上無理させたくないから棄権ってことで構わないか？」

なるほどな。オレもあんまりポケモンに無理させたくないしな。まあ別にいいよな。

「良いぜ！ じゃあ二体目頼むぜ！」

「おう！ 頼むぜサーナイト！」

『サー』

レオンはどこか神秘的な人形のポケモンは出てきた。オレは咄嗟にポケモン図鑑を向けた。名前はサーナイト。未来を予知する能力があるみたいだな……となるとエスパータイプか？ 厄介だな……。

「だけど相手が強いほど燃えるぜ！ 水鉄砲だ！」

「単調だぜ！ サイコネシス！」

『サー』

うおっ！？ ブイゼルの水鉄砲が止められちゃったぞ！ サーナイトの超能力で操ってるのか！？

「そのまま返してやれ！」

「なっ！？」

『ブイツ！？』

止められた水鉄砲が、ブイゼルに向かって飛んで来やがった！？ さすがにこれはビックリだぜ！ ブイゼルもビックリしたのか、無抵抗のまま水鉄砲を受けてしまった。これはマズイっての！

「くそっ！ 攻め方変えるか！ 水鉄砲！」

「無駄だぜ！ サイコネシス！」

やっぱり止めたな！ それを待ってたぜ！

「中断してアクアジェット！」

ブイゼルは水鉄砲を中断して、アクアジェットで突撃していく。  
サイコネシスに集中している今なら決まるぜ！

「フッ俺はそれを待っていたぜ！ テレポート！」

へっ？ サーナイトが消えやがった！ どこいったんだ？

「マジカルリーフ！」

「サー！」

「ブーイー！！」

「なっ！？」

ブイゼルの真上から、色とりどりの葉っぱがブイゼルを襲った。  
まさかテレポートで真上に移動していたなんてよ……。

『ブイッ……』

くそっ……ブイゼルも目を回しちゃってるしよ……このバトルオ  
レの負けか……。



「ありがとうなサーナイト」

レオンはサーナイトに労いの言葉をかけながらボールに戻すと、オレの方に歩いてきた。

「久しぶりに燃える戦いだったぜ。ありがとうなリュウタ」

「オレも楽しかったぜ。次は勝つからな」

「へっ言いやがる」

オレとレオンは笑いながら、無意識に握手をかわしていた。やっぱりバトルはこうじゃなくちゃな！

「リュウタ達はいつジム戦するんだ？」

「とりあえずレナの調子も良いみたいだからな、明日行くつもりだ」

「そうか。んじゃそれを見てからオレは旅立つかな」

おつまだレオンはこの町にいいのか！ 色々話聞きてえからラッキーだぜ。

「お疲れ様リュウタ」

「凄かったよ……」

レナとユリノがオレの所に歩み寄りながら言う。楽しかったけどやっぱり勝ちたかったな。

「じゃあオレはポケモンセンターに戻るわ。じゃあな」

「おう。今日はありがとな！」

「なーに気にすんなって」

手を振り、そう言いながらレオンはポケモンセンターに戻っていった。それにしても強かった……いつかは越えなくちゃいけない壁ってわけか！ くうく燃えてくるぜ！

「次は勝たなくちゃね！」

微笑みながら、レナはオレに声をかけてくる。へっ言われるまでもないぜ！

「あつたりめーだぜ！」

そうだ。あいつも絶対にポケモンリーグに出るはずだ。今は無理でも、いつか追い越して、そして勝って見せるぜ！

シヨウ編 第四十七話 荒れた抜け道（前書き）

……俺が前書きをやるのか？ ……面倒だが仕方ない。今回は俺、シヨウが勤める。

俺とキヨウコは無事クロガネジムのリーダー、ヒヨウタを撃破し、最初のバッジを手に入れた。

その翌日、博物館に用があつたヒカリと合流し、テンガン山を越えてコトブキシティに戻った所から今回は始まる。

……おい作者。こんな面倒なこと二度とやらせるな。

## シヨウ編 第四十七話 荒れた抜け道

ジム戦の次の日、俺達はテンガン山を越え、コトブキシティに戻ってきていた。ヒカリが言うには、このコトブキシティを北上し、町と森を一つ越えることで次のジムがあるらしい……ヒカリの言うことだからあまり信憑性は無い。

「やっぱりコトブキシティの方がクロガネシティより活気があるね」  
「！」

ニコニコしながら、コトブキシティの建物を見ている。ヒカリもそんなキョウコを見て、そうねっと言っている。

……いや当たり前だろう。コトブキシティは都会だ。炭鉱の町のクロガネシティより発展しているに決まっている。

「なにやってるんだお上りさん？」

俺達は聞き覚えのある声に反応して後ろを向くと、果たしてそこにはケイタの姿があった。

「ふわあゝケイタ久しぶり〜！」

「やあキョウコ」

俺からすればうつとうしいキョウコのやり取りにも、ケイタはで笑顔対応していた。……俺には無理だ……いや、したくもない。

「ケイタ、資料は集まった？」

「まあね。そっちは？」

「こつちも集まったわ。後はナナカマド博士のところに持って行かなくちゃ」

ヒカリとケイタの会話に、キョウコは首を傾げて聞いていた。話を聞く限り、なにかポケモンの資料を集めたのだろう。

「シヨウ君、キョウコちゃん、私はナナカマド博士の所に行くからここで別れるわ」

「えっ？ そうなんだ……」

まあおおよその予想は出来ていたことだ。別に俺は驚くことでは無いと思っていたが、キョウコにはいささかショックなことのようにだった。

「そうか。ならここでお別れだな」

「そうだね。でもこれで一段落つくから、僕はまたジム戦をしに旅に出るつもりなんだ。もしかしたらポケモンリーグで会つかもね」

旅だと？ なるほど、ポケモンリーグに出ればケイタにリベンジ出来るというわけか。

「また会えるんだよね！？ 絶対！」

「そりゃ永遠の別れじゃないんだから」

キョウコの半泣き状態にヒカリも苦笑を浮かべながら対応している。……こいつは誰かと別れたりするのが本当に嫌いだな……まあしょうがないだろう。

「じゃあ私達は行くわね」

「次はポケモンリーグで会おうね」

そういうと、二人はコトブキシティの人混みの中に消えていった。

「……さて、北に行くんだったな」

「いこいこー!」

相変わらず立ち直り早いな……そんなことを思っていると、キョウコは自慢のポニーテールを揺らしながら先に走っていった。……そういえばあいつは昔から勝手に走って迷子になっていたな……こんなところで迷子なられても迷惑極まりない。はぐれないようにしないとな。

「……ハア」

無意識に俺はため息をしながら、キョウコの後を歩いていった。

それからあまり時間が経たずに、コトブキシティの北にある204番道路にやってきた。この先に小さな町があるみたいだな。

「ふえ？ ショウ洞窟があるよ」

キョウコの視線の先には確かに小さい洞窟があった。見た目通りあまり深そうじゃないが、ここを抜けなくてはいけないのか？

「あんたらここを抜けるのか？」

聞き覚えの無い声に反応して後ろを向くと、そこには帽子を被り、短パンをはいた子供が立っていた。

「……ここを抜ければ町に行けるのか？」

「まあな。でも今は無理だぜ」

「……どういうことだ？」

「頑丈な岩が道を塞いでるからな。まあオイラのポケモンなら砕けるけど」

なんだこいつは？ ただ単にポケモンの自慢がしたいだけなのか？

「じゃあその岩砕いてくれないかな？」

「別に構わないけど、オイラとバトルすることが条件だぜ！」

……こいつ、ただ単にバトルがしたかっただけか。だがまあいい。こちらのレベルアップに利用出来る。

「いいだろう。俺が相手だ」

「そうこなくっちゃな！ ルールは二体二のシングルバトルでいいか？」

「構わない」

「よっしゃ！ じゃあ頼むぜビードル！」

『ビー！』

短パンの子供は、ビバーを大きくしたようなポケモンを出してきた。初めて見るポケモンだな……俺はそう思い、図鑑をそいつに向けた。名前はビードル。かなり頑丈な前歯を持っているようだ。あれの一撃は強力そうだな……あとタイプはノーマルか？ ならこいつでいくか。

「頼むワンリキー」

『リツキー！！』

俺の選択はワンリキー。ノーマルタイプなら格闘タイプのワンリキーが有利だ。ワンリキーもかなりやる気があるようだ……都合がいい。

「先攻は貰うぜ！ 必殺前歯！」



勝手に先攻を取られたがまあいい。とにかく鈍そうな図体のくせになかなかのスピードで突っ込んでくるビーダルを止めるか。

「受け止める」

『ツキ!』

『ダッ!?!』

よし、上手く受け止められたな。図体はデカくてもワンリキーの方がパワーは上だな。次はこっちから攻める。

「地面にたたき付けろ」

『リキッ!』

『ダァ!』

「ビーダル!」

「空手チョップ」

ワンリキーは自慢のパワーを駆使してビーダルを地面にたたき付けると、ビーダルの頭に空手チョップを決める。終わったか？

『ビー……!』

ちっフラフラしてはいるが、まだ立っているか。次で決める。

「インファイト」

『リッキー！』

『ダー！！』

ワンリキーはビーダルの懷に潜り込むと、パンチやキックをビーダルに何度も決める。止めと言わんばかりにワンリキーはビーダルの顔面に跳び蹴りを喰らわせると、ビーダルは目を回しながらその場に倒れた。

「マジか！ お疲れさんビーダル」

ワンリキーの猛攻に驚きながらも、ビーダルに労いの言葉をかけてボールに戻した。まずは一勝だ。

「なら二体目だ！ ムクバード！」

『クー！』

二体目は鳩を大きくしたようなポケモンだな……情報を得るために俺は図鑑を向ける。名前はムクバード。ムツクルの進化系で見た目通り飛行タイプか。相性は悪いがなんとかなるか？

「先手必勝だ。バレットパンチ」

『リッキー！』

必ず先制攻撃が出来るバレットパンチを使い、一気に決めようとしたが、俺としたことがかなり安易な戦術だった。

「上昇して翼で打つ！」

ムクバードはバレットパンチを上昇して回避すると、自分の翼を使ってワンリキーに攻撃した。マズイ、ワンリキーに飛行タイプの技は効果抜群だ。その証拠にワンリキーはフラフラしている。

「一気に決めるぞ。インファイト！」

「そいつを待つてたぜ！ 守るだ！」

「なにっ!？」

くっ！ 守るか……ワンリキーの決死のインファイトはムクバードの周りに発生したエメラルドグリーンの壁に弾かれてしまった。

「チャンス！ 突進だ！」

『ムツクー!』

『リッキー!』

「ワンリキー！」

ムクバードは一度上昇して勢いをつけると、ワンリキーに体当たりする。その威力でワンリキーは吹き飛ばされ、近くの木にたたき付けられた。

「くっ……」

俺はワンリキーの状態を確認すると、目を回していた。やはり今のは厳しいようだな……。

「ご苦労だった。ゆっくり休んでくれ」

さて、二体目はどうするか……相性ならライボルトが有利だが、ライボルトに遠距離の電気技は無い。それに上空からの攻撃を捌くのは厳しい。遠距離技が得意なのは……。

「よしっ、頼むヒトデマン」

『デヤッ!』

俺はヒトデマンをボールから出した。こいつなら遠近両方に対応出来る。

「先攻は貰う。水鉄砲」

「上昇してかわせ!」

奇襲をかけたつもりが、ムクバードは上昇して水鉄砲を回避した。ちっやはりそう甘くはないか。

「燕返しだ!」

『ムクー!』

燕返し、確か必ず当たる技のはず。恐らく水鉄砲で反撃しても回避されるのが関の山だろう。なら……。

「硬くなる」

『デヤッ』

『ムツクー!』

「マジ!?!」

ヒトデマンは自分の体を硬くして燕返しに対抗する。さすがに硬くなったヒトデマンに突撃するのはキツイのか、ムクバードは悶えている。今がチャンスだな。

「怪しい光」

「なっ!?!」

悶えている隙に、ヒトデマンは真ん中のコアから光の球を一つ生み出し、それをムクバードに当てる。刹那、ムクバードはフラフラと意味不明な動きを仕出した。どうやら混乱したようだな。

「水鉄砲」

『ムクー!』

「ムクバード!」

がら空き状態のムクバードに、ヒトデマンは水鉄砲を決める。さすがに一撃では倒せなかったが、かなりのダメージを与えたはずだ。一気に攻める。

「諦めねえよ！　しっかりしろムクバード！」

『……ムクツ？』

ちっ混乱が解けてムクバードは周りをキョロキョロしている。だが俺の考えが間違いで無ければ、この勝負……確実に貰った。

「よっしゃ！　上昇して燕返しだ！」

『ムクツ！　ムツクー！？』

「どうなってんだ？　飛ぶんだムクバード！」

無理だな。翼が濡れて重くなった状態で飛ぶことはほぼ無理だ。悪いが決めさせて貰う。

「高速スピン」

『デヤッ！』

「ムクバード！ー！」

ヒトデマンは高速スピンを戸惑っているムクバードに決める。その一撃でムクバードは目を回していた。

「ちえ、負けか。ありがとなムクバード」

「ご苦労だったヒトデマン」

「いやー強いなあんだ！　楽しかったぜ！」

短パンの子供はニコニコしながら言う。まあ……なかなかのバトルだった。

「やったねシヨウ！」

キヨウコもニコニコしながら、片手を上げている。……なんだ？　ハイタッチでもしろというのか？　くだらない……だが無視していたらキヨウコはムスツとしている。……後で面倒だから合わせるか。

「エヘヘッ」

キヨウコは笑顔に戻りながら、自分の手を俺の手に合わせる。……単純だな。

「じゃあ荒れた抜け道の岩を壊しにいくぜ」

俺とキヨウコは短パンの子供についていくと、洞窟の中に確かに岩があった。確かにこれは通れないな。

「よし、頼むイシツブテ！」

『イッシー！』

イシツブテか。ヒヨウタが使っていたな。こいつが岩を壊せるのか？

「岩砕きだ！」

『イッシー!!』

イシツブテは右手をブンブン振り回し、力を溜めると、勢いよく岩を殴る。すると殴った部分からひびが入り、粉々になった。

「おっしゃ！ これで通れるぜ！」

「ありがとうね！」

キヨウコは笑顔で礼を言う。とりあえずこれで次の町に行ける。

「おう！ また会ったらバトルしような！」

「あたしもバトルしたいよ！ えっと……」

「ああ、オイラはカイト」

「あたしはキヨウコ！」

「……シヨウだ。縁があつたらまた会おう」

「おう！ またな！」

カイトは手をブンブン振りながら荒れた抜け道を出ていった。さてと、俺達もいくとするか。

「いこいこ！」

「嗚呼」



俺達は次の町に期待を膨らませながら、荒れた抜け道の出口に向けて歩みはじめた。

シヨウ編 第四十七話 荒れた抜け道（後書き）

えー今回の荒れた抜け道はダイパのように岩で塞がっている設定にしました

べつ別にシヨウがバトルするきっかけが欲しかったんじゃないんだからね！（おい）

レナ編 第四十八話 挑戦！ ヒワダジム！（前書き）

えっ、えっと……今回はボクユリノが前書きを担当するね……。

ボク達を助けてくれたレオンさんと、リュウタのバトルはいいところまでいったけどリュウタが負けちゃった。

次の日、ボク達はレナの体調も良くなったみたいだから、ヒワダジムに行くことにした。緊張するよ……今回はポケモンセンターを出る所から始まるんだ。

ねえ作者さん……これで大丈夫かな……？

レナ編 第四十八話 挑戦！ ヒワダジム！

次の日、オレ達はポケモンセンターを出て、ヒワダタウンのジムの前に来ていた。ジム戦の予約をしにきたからだ。ちなみにレオンは後から来るらしい。さて、ここのジムリーダーはどんなポケモンを使うんだ？

「うっし！　いくか！」

オレは気合いを入れると、ジムの扉を開いた。中にはキキョウジムと同じ様に受付があり、観客席に続く階段があった。

「チャレンジャーかい？」

「そうです」

「じゃあトレーナーカードを見せてくれるか？」

オレ達はトレーナーカードを受付のオッサンに見せる。どうでもいいけど、この前のジムの受付は丁寧だったけど、ここの受付はなんか適当な感じがするぜ。

「確認完了したぞ。今すぐ挑戦できるがどうする？」

マジで！？　今すぐ出来るならすぐにバトルしたい所だぜ！　つと、また勝手に暴走する前に二人に聞かないとな。

「どうする？」

「私は構わないわ」

「ボクもいいよ」

決まりだぜ！ オレはオッサンにすぐに挑戦すると伝えたと、中のジムリーダーに連絡を取り出した。

「……よし、ジムリーダーも準備出来たぞ。誰から挑戦する？」

「前は私からだったから今回は後でいいわ」

「ボクも……後がいい」

「じゃあオレからだぜ！」

「はいよ。あゝリュウタだな。じゃあ中に入ってくれ」

オッサンに促されてバトルフィールドの中に入ると、そこには草原が広がり、所々に木が生えている。ここがフィールドなのか？ キキョウジムとはまた違った感じだな。

「チャレンジャーだね」

フィールドの向こう側に、オレと殆ど変わらないぐらいの年の子供が立っている。……失礼かもしれないけど、こいつ男？ 女？ どっちでもいいけそうな顔立ちだな。

「僕はリーダーのツクシだ。よろしくリュウタ君。このジムのバトルの使用ポケモンは一匹だよ」

ツクシがそう言う。僕ってことは男か？ でもユリノもボクだし……ええいどうでもいいぜ！ とにかく一発勝負か！ 絶対に負けねえぜ！

「頼むよ！ バタフリー！」

『フリー』

ツクシはチョウチョに似たポケモンを繰り出してきた。初めて見るな。

俺はポケモン図鑑を向けた。名前はバタフリー。虫タイプのポケモンみたいだな。なら俺の出すポケモンは決まってるぜ！

「頼むぜ！ ヒトカゲ！」

『カゲツ！』

俺の選択はヒトカゲ。虫タイプのバタフリーなら、ヒトカゲでならいけるはずだぜ！

「ではジムリーダー、ツクシ対チャレンジャー、リュウタとのバトル、開始！」

いつの間にかいた審判の号令がかかる。よし、先手必勝！

「ヒトカゲ！ 火の粉！」

『カゲー！』

ヒトカゲは、たくさんの小さい火の玉を、バタフリーに向けて放った。当たりやかなりのダメージになるぜ！

「単調だね。風起こしで炎を消すんだ」

『フリー！』

バタフリーは、両方の羽を羽ばたかせ、ヒトカゲの火の玉を消してしまった。なかなかやるな……。

「一気に決めるよ。追い風！」

『フリッ！』

ツクシがそう指示すると、バタフリーは一回だけ羽を羽ばたかせた。一体なにがしたいんだ……？

「バタフリー、ヒトカゲの後ろに回ってサイケ光線」

そう指示すると、バタフリーは、かなりのスピードで、ヒトカゲの後ろに回り込んだ。はあ！？ バタフリーってあんなに速いのか！？

「追い風の効果で、しばらくの間、僕のポケモン達のスピードが上がるんだよ」

「くっ！ マジかよ！ ヒトカゲ！ しっぱを使ってジャンプだ！」

『カゲツ！』

『フリッ！？』

しっぽを地面にたたき付け、その反動を利用して、ヒトカゲはジャンプした。それがうまくいき、バタフリーのサイケ光線を上手くかわした。とっさの判断だったけどヒトカゲがちゃんとやってくれて助かったぜ。

「やるね。バタフリー、念力！」

『カゲツ！？』

「はっ？」

バタフリーの目が、キラリと光ると、重力によって落ちるはずのヒトカゲは、なぜか空中で停止した。念力で操られてるのか？　こりゃヤバいつて！

「そのままたたき付けろ！」

「ヒトカゲ！！」

ヒトカゲは、空中から、思い切り地面にたたき付けられた。やば……これはかなりのダメージになっちまったな……。

「ヒトカゲ！」



オレはヒトカゲの安否を心配した。一応まだヒトカゲは立っていた。でも、このままだと、やられるのは目に見えてる。くそが……ここまでなのか？

『力……ゲー!!』

ヒトカゲが大きな声で咆哮する。それと同時に、ヒトカゲの体が光始めた。な……なにか起きてるんだ？

「これは……進化か！」

進化だって？ 進化はポケモンが条件を満たすと起こる現象。姿が変わり、より強くなれる。まさか……ヒトカゲが進化するなんてな！

『……リザア!!』

光が消えると、そこにはヒトカゲはいなかった。代わりに、ヒトカゲより体の色を赤くし、頭に一つ突起があるポケモンに変わっていた。

「あれは……」

ポケモン図鑑を向けるオレ。名前はリザード。ヒトカゲより強力な炎が使えるみたいだな。これなら勝てるぜ！

「つしゃあ!! リザード！ 絶対勝つぜ！」

『ザア!!』

リザードは、片手を上げてオレに応える。やる気は十分みたいだな！ こっから挽回してやるぜ！！

「これは面白いね！ バタフリー、風起こし！」

「踏ん張れ！」

『ザアア！』

リザードは、バタフリーの風起こしを耐える。進化してパワーが上がったみたいだな。風が止んだ瞬間に、一気に勝負を決めるぜ！

「……今だ！ 竜の怒り！」

『ザアアア！！』

『フリー！！』

「バタフリー！」

オレは、さつき進化した時に、新しく覚えた竜の怒りを指示した。リザードは、しっぱの炎が、赤から青に変わった。そして、口から青い炎の球体をバタフリーに放った。そして、それはバタフリーに直撃した。

「やったか？」

煙りが晴れると、まだ飛んでいる。まだダウンしないみたいだな

……へっ、上等だぜ！

「ジムリーダーとして、簡単には負けられない！ バタフリー！  
サイケ光線！」

「負けるかああ！ 竜の怒り！」

『フリーー！！』

『リザアア！！』

二匹の強力な技はぶつかり合い、爆発が起こった。威力は……互角か！ いいぜ！ 燃えてきたあ！！

「リザード！ 怖い顔！」

『ザアア……』

『フリー……』

リザードは、正直オレも怖いくらい、子供が見たら泣き出しそうなくらいの顔で、バタフリーを睨みつけた。怖い顔は、相手をひびらせて、素早さを下げる。思ったより効果的だったみたいだな！

「決めるぜ！ 炎の牙！」

『リザアア！！』

さっき図鑑で見た、もう一つのリザードの新技、炎の牙を、バタフリーに向けて放った。炎の牙は、口に炎を溜め込み、そのまま相

手に噛み付く技。これなら効果抜群だぜ！

「マズイ！ バタフリー、念力！」

「遅いぜ！！」

ツクシが指示したが遅い。すでにリザードはバタフリーに接近していた。そのままりザードは、バタフリーの胴体に噛み付いた。

「どうだ？」

リザードは上手く地上に着地した。バタフリーは、空中から落ち、目を回していた。

「バタフリー、戦闘不能！ リザードの勝ち！ よって勝者！ チヤレンジャー、リュウタ！」

「よつつしやー！！」

『ザアア！！』

オレとリザードは、一斉にガッツポーズをした。勝ったぜ！ やったぜ！！

「やったなリザード！」

『ザア  
』

リザードは、オレに飛びついてきた。なんだよ、進化してかっこよくなったのに、結局甘えん坊のままかよ。

「やられたよ。これが僕に勝った証、インセクトバッジだよ」

オレは、ツクシからバッジを受けとった。これを見ると、勝った感じがするぜ。

「ありがとな！」

オレは満面の笑みで、二階の観客席に向かった。

「レナ！ ユリノ！ 勝ったぜ！」

「ちょっとヒヤヒヤしたわよ」

「おめでとう、リュウタ」

レナはやれやれといった顔、それとは対照的に、ユリノは素直に、オレの勝利を祝福してくれた。

「じゃあ次は私ね！」

意気込みながら、レナは下に下りていった。まあレナなら大丈夫だよな。

オレの想像通り、レナはエイバムと共に、ツクシのハチに似たポケモン、スピアーを倒した。そこまでは良かったんだけどよ……

「マリル戦闘不能！ ストライクの勝ち！」

「……ま、負け……ちゃった……」

力無くレナが言う。そう、ユリノは、マリルを使ったけど、ツクシの使う、カマキリに少し似たポケモン、ストライクに……負けてしまった。

レナ編 第四十八話 挑戦！ ヒワダジム！（後書き）

ユリノ

「……………」

そんな落ち込むなって

ユリノ

「……………」

ダメだこりゃ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0586l/>

---

ポケットモンスター 絆

2011年10月6日14時21分発行